

## 徳川時代の知識人と「世界」

### 序

日本や中国のような非西洋社会の近代化を見る場合、その近代化を準備した前の歴史、或いは近代化に至る過程をどう評価するかが、大きな問題である。本課題では徳川日本における「世界意識」の芽生えとその成長ぶりを、新井白石ら蘭学者や洋学者を中心とする知識人の思想や行動を通じて分析する。

いつの時代でもそうであるように、知識人は人間世界のあるべき姿に対する強い欲求を持っているために、新しく伝わってきたものに対してつねに好奇的で、貪欲であると同時に、また批判的、懐疑的にもなる。ゆえに視野の拡大に伴い、彼らは在来の価値に反省と反発を示したり、新来の価値に躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>と矛盾を感じたりする。しかしそのような錯綜した思想状況に敢えて入り込んでゆくとき、彼らは、

銭 国 紅

初めて東西文明の対話を実行したと評価しうる。ゆえに私は知識人において世界視野の拡大とともに生じた観念的世界像のぶつかり合い、それによる喜びや苦悶或いは深い思索にも注目してみたい。この観念的世界像の再構築の過程にこそ、東西文明の対決を通しての東洋の主体性が初めて見えてくるからである。

この部分では中心人物として主に地理的・空間的世界像を新たに学び、それを検証し、その世界像の担う価値を自国に現実化しようと努めた人たちが挙げられる。例えば工藤平助、林子平、前野良沢、本多利明、司馬江漢等がそうである。また十九世紀に入ると、一層広く深い世界知識を持ったために、新しい世界に対する憧憬よりもむしろ畏怖の念が強くなり、それに対応すべき自国の現状についても苦悶と批判を強めていった。その代表人物として杉田玄白、渡辺崋山、高野長英などが挙げられよう。さらに山村才助、箕作阮甫<sup>みくくりげんぽう</sup>な

どは新井白石以来の世界地理の伝統を受け継ぎながら、西洋の最新情報や新たに中国から伝来した漢籍世界地理書を速やかに吸収し、全面的に幕末の世界認識を刷新した。それは幕末の対外危機の回避に応用できたばかりでなく、近代日本の世界史や世界地理学の先駆をもなしていたのである。一方、洋学以外の学問分野にも世界とのつながりを視野にいれながら、自らの思想体系を再構築していく人物が見え始めた。町人学者山片蟠桃やまがたはんとうや国学者平田篤胤ひらたあつたね等がその典型を示している。

最後に同時代の中国知識人と比較して、両者の間にどんな精神的な連帯と断絶があるかを提示してみる。これによって近代世界を迎える日本と中国の真の姿を見つめながら、徳川日本と中国、また世界との関係を究明することを目指す。これは世界における日本という存在の本当の意味への解明につながるものと信ずる。

## 1 世界的視野の原点

### 新井白石

徳川初期、日本を囲む世界がどんどん拡大されたにもかかわらず、幕府は対外関係に統制政策を加えた。かの有名な「鎖国」がそれである。いわゆる鎖国の内容は日本人の海外渡航や帰国の禁止と長崎港に限定された中国とオランダとの許可貿易である。これは幕府によるポルトガルとの貿易の独占と西国大名の貿易による勢力増大へ

の警戒にもよるのであるが、幕府はこれにより貿易独占と海外情報の独占を完了し、キリスト教の浸透への予防を果たした。「鎖国」とはいくものの、貿易利益と文明情報を幕府に集中したために、幕府の外の世界に対処する機能はかえって強まったことに注目しなければならぬ。こうした徳川幕府の社会はケンペル以来の「鎖国」という概念だけでは纏めきれないことは明らかである。角度を変えれば、徳川幕府の一見国を鎖したような構図にも、全く異なる側面が現れてくるのかも知れないのである。

徳川時代は、ポルトガル人やオランダ人等の西洋人が度々日本人に知的刺激を与えた時期に当たるが、新しい文明の将来と世界範囲の拡大が現実的なものになってくることを予感させられた時代でもある。こうした新しい文明とともに出てきた未知で、底の知れない世界を正確に捉えることは当時の人々の存在に迫る緊急課題であろう。長い間、空間的にも価値的にも中華文明を中心にして世界を見てきた日本人にとって、新たな世界像の展開の真意をつかむことが進むべき方向を見間違えないための保証である。そのために何をなすべきか。幕府の選択は国内の安定と東西両方からの情報の収集にある。それは清中国とオランダに限定した往来で世界とのやりとりを選択的に積極的に進めることの意味するところである。一方において在来の文化大中国を注視し、中国の新しい世界への接し方を見ながら、世界における日本の在りかたを熟考する。もう一方



では直接西洋の海国オランダ等を通じて、西洋文明の虚実を探る。これは変化する世界の構図をありのままに把握するための最良な方法だと思われたに違いなかった。その努力は徳川日本と明治日本をつなぐものでもあろう。

「鎖国」日本にいながら、敏感に世界への視線を保ち、最高の歴史研究や外国地理・言語の研究で政治家としても学者としても「鎖国」日本の存在意義を問い続けた新井白石（一六五七～一七二五）こそ、徳川時代における新しい世界への模索を実行した第一人者であった。

新井白石が江戸柳原に生まれた明暦三年（一六五七）は、ちょうど林羅山がなくなり、徳川光圀が『大日本史』の編集に着手する時である。一代の碩学者として四代の将軍に仕えた朱子学的世界の巨峰的存在である羅山の死と、脈々と大義名分論を以て幕末尊王論の思想的背景をなし、明治時代に漸く完成を見せた歴史書である『大日本史』編集の着手と、政治と学問の両方を以て、転換期における日本の在りかたを提示した人間新井白石の誕生が奇妙にも相重っている。十七世紀中葉の日本における時代交代の兆しを示したかのような偶然であった。後代になって、将軍の侍講だった羅山に近い立場を持ちえた幕政の補佐白石と羅山との違いは、何よりも、在来の朱子学的世界を洋学その他学問のすべてに拡大させたか否かにあるのではなからうか。

白石の活躍は十八世紀初期に至っている。一七〇八年八月末薩摩国屋久島に潜入上陸した宣教師シドッチ（Giovanni Battista Sidotti, 一六六八～一七一五）との出会いは、白石の学問世界の更なる扉を開けるきっかけとなった。六代将軍家宣の特命によりシドッチ尋問に当たった将軍侍講新井白石が、いままでは長崎経由の蘭学的知識と中国系の情報を耳にしていたが、西洋人に直接訊問することができたのはこの時が初めてである。しかもこれまでとは違って、今度は対面して会話するという形になるので、話し手として相手に何かを表現したり、伝えたりすることも必要である。シドッチからその入国事情及びキリスト教の教理やその文化的背景を聞くわけであるが、そういう知識を得る目的は相手を知るだけでなく、相手に対する処置を巡って自らの判断を下すためでもあった。白石にとって、この出会いは西洋文明と東洋文明の比較の場であった。在来の知識と学問を生かし、新たな世界像を再構成することにこそ、白石の抱く期待が掛けられていたのであろう。

この東西洋文明の対話を実現するに当たり、白石にはどんな知識的集積ができていたのであろうか。それには大別して中国的なもの、西洋的なものがあった。中国的なものは「天地の化育を賛け天命に従って私欲を断つ」という朱子学の宇宙観や価値と中国系の天・地・人に関する知識だったはずである。西洋的なものは潜入宣教師や長崎経由の西洋の地理や物産及び文化についての知識である。す

でに明暦年間（一六五五〜五八）に序文が書かれた『乾坤辨説』<sup>(1)</sup>は西洋の自然学を儒学的立場から批判する「弁説」の内容に見られるように、初めての東西洋自然観と宇宙観念の対話もしくは対決だったといえよう。『乾坤辨説』などを通じてなされた西欧的世界像の移入を通じて、「それまで儒教的・仏教的世界観しか知らなかった当時の日本の知識人に大きな衝撃を与えた」のみならず、「本来幕府の庫のなかに秘蔵されるべきはずであった『乾坤辨説』やその諸異本が多く出回っているところを見ると、この種のはひそかに流布して広く読まれていたようである。こうした動きのなかからやがて西川如見のような開明思想家が現れてくるのである」という指摘もあるが、さらに評価するならば、これは沢野忠庵のような「転び伴天連」と当時の知識人たちが東洋と西洋両文明在来ものを超えようとする試みと努力の最初といえることができる。すでに一六一八年（元和四年）、ポルトガル人に教わって航海に関する種々の心得を記録した『元和航海記』（池田好運）という本が日本に出ている。これは航海だけでなく、西洋學術の輸入の一つの試みとして、後世に残るものであった。人々が海外に興味を持つのは何よりもまず海外にある物産への関心によるものである。一六六九年（寛文九年）に出来た著作『諸国土産書』（川藤左衛門、西吉兵衛）は前半部では中国各地の物産と日本からの距離を示し、後半ではオランダ各国の土産と日本からの距離を書いたものである。一方『華夷通

商考』（西川如見、一六九五）は海外地誌と商業的地理書の集大成として十七世紀における同類の知識を纏めたものである。その上巻は「中華十五省之説」、下巻は「外国」「外夷」その他「阿蘭陀人商売往来ノ国三十五個国」等につき日本よりの道程、気候、物産等を記している。これらの各国についての知識は当時ではすでに白石のよくな知識人の常識になっていたといえよう。新井白石の著作『外国通信事略』において「異国土産」という記述があるが、それは前述の『諸国土産書』や『華夷通商考』に共通なものであった。<sup>(3)</sup>

シドッチ訳問は、白石にとって、中国系の学問とオランダ人の伝えた学問に修正を行う絶好のチャンスであり、西洋への批判的認識のまたとない機会であった。事実この経験はその後の著作『西洋紀聞』『采覧異言』に生かされているし、二著作の成立は白石の東西文明への批判的、比較的視野に支えられたものである。この東西文明への批判的、比較的視野こそ「鎖国」日本を早くも新しい世界像に目覚めさせる手掛かりとなった。

対話を通じて質問者白石は西洋の登場と日本との係わりに強い関心を示した。その質問には白石の西洋文化と自国文化との相対意識が働いていることが明らかであった。こうして白石の経験的世界の範囲は武家社会から、日本及び日本の周辺（南島蝦夷）へ、さらにシドッチのような西洋人との触れ合いを以て世界へと進むコースを辿っていく。<sup>(4)</sup>白石が知りたいのは、西洋人の見ている世界と自分の

持っている世界像との異同である。西洋を含め、日本・朝鮮・南島・蝦夷及び中国・天竺という新しい世界像に近づいた白石は、西洋の立場から世界を眺めることによって、自らの世界像や価値を検証してみようとしたのである。これはキリストとは何かという課題を以てする西洋文明という存在への認識作業でもあった。西洋人の世界像への接近と西洋文明というものの再認識を自覚したところに白石のシドッチ訪問行動の意味はあったが、これは新しい世界における日本の自覚ともつながるのである。

白石の『西洋紀聞』の世界地理部分と『采覧異言』は、西洋の世界像への接近とその接近法をよく表している。

『西洋紀聞』中巻には、大西洋の解説の後に付けられている作者の言葉として次のような段落がある。

按ずるに、大西洋地球地平等の図、其由来る所、いまだ詳ならず。大明吳中明、万国坤輿図に題して、「欧邏巴國中、鏤有旧本、蓋其國人、及弘郎機人、皆好遠遊、時経絶域、則相伝而誌之。積漸年久、稍得其形之大全」といふ。我今大西人に遇ひて欧邏巴鏤板の輿地圖を出して、其説を問ふに、彼其図を見て「これ七十年前、ヲ、ランデヤ人の鏤し所なり。（中略）」といふ。そのヲ、ランデヤといふは、則今我国に歳々朝貢する阿蘭陀国の事にて、万国坤輿図に、品蘭地・則蘭地としるして、

「西洋布地、二島最妙」と注せしもの、即此也。<sup>(5)</sup>

中国系の世界図とオランダ人の鏤版の輿地圖を対照しながらその正誤を大西人に確かめてみるというふうな、白石は自らの異文明接近法である比較と批判を試みている。それは「ヲ、ランデヤといふは、則今我国に歳々朝貢する阿蘭陀国の事にて」というように、漢字の「阿蘭陀国」と「ヲ、ランデヤ」という発音の説明にも用意されており、さらにマテオ・リッチの世界図をはじめとする中国系の「図説」に、大西人の説を以て訂正する作業とともに磨かれていくのである。

今其ヲ、ランド鏤版の図に拠りて、万国坤輿図、并三才図絵、月令広義、天経或問、図書編等に見えし所の図を見るに、此等は、皆其大略をしるせしのみ也。<sup>(6)</sup>

大西人の説を聞いて、ブラウの世界図に照らしてみたら、中国系世界知識がもの足りなく感じられる。『三才図絵』『月令広義』『天経或問』『図書編』等にのせた世界図とその説明はいずれも、もとマテオ・リッチの世界図から出たものである。<sup>(7)</sup>白石はこれらの世界図の系列を皆見ているために、その不備を補う気持ちに駆られたのである。

亦按ずるに、万国坤輿図に、欧邏巴、利未亜、亜細亜、南北亜墨利加の外に、墨瓦刺泥加（メガラニカ）の一州を加へて、六大洲とす、其説に墨瓦蠟泥、係弘郎機人姓名、前六十年、始過此峽、并至此地、故欧邏巴士、以其姓名、名峽、名海、名地といふ。其墨瓦蠟といふは、即是マゴラの番音転じ訛れるにて、亦繆りてヲ、ランド人を以て、弘郎機国人となせし也、されど、阿蘭陀鏤版図には、南方一帯の地はいまだ詳ならずして、其地名をたてしにもあらず。<sup>(8)</sup>

右の按を見て分かるように、白石にはシドッチ取り調べやオランダ人等との会談を経た上に、ブラウ図を利用したことの効果が大きく出ている。その解説に見えたマテオ・リッチ『坤輿万国図』所載の南方大陸メガラニカ（墨瓦刺泥加）の存在への否定説は、時代を画するものであろう。というのは江戸後期において大槻玄沢門下の橋本宗吉でさえ、『喁蘭新訳地球全図』においてそのままマテオ・リッチ説を援用し、同様に山片蟠桃の『夢の代』の場合においてもリッチの説を認めているが、それらの人々と比べてみると、白石のリッチ説批判が先駆的だったと言える。

一方白石の世界像の構築が中国系の世界図に基づいて批判と比較の手法を以て進められているにもかかわらず、その内容は明らかに

西洋の記述を中心としていたことが分かる。アジアに対して日本と関係のある国の記述もないではないが、もっとも関係の深い朝鮮については全く記述を欠くし、中国についても僅かしか触れていないのである。もちろん中国についての地理や人文知識は十二分に持っていたはずだし、朝鮮通信使との往来も頻繁であった。詳しく触れないというのは、もともと白石において西洋人の世界像の原点に返り西洋の角度から世界を捉え直そうとする創作意図があったからであらう。こうして西洋人の目を通じて世界を見た白石には、在来の世界構図が全然違うように見えてきたのである。場合によっては、新たに把握した世界像が、旧い世界の中国や朝鮮の人々のもつ文化的優越感に打ち勝つ武器ともなった。白石と直接に交渉した朝鮮使節が白石との筆談（二七一年十一月五日）を基に編集した『江関筆談』には、白石と朝鮮使節の応酬が記されている。筆談の内容は史書、礼服、儀典、交易、日朝外交関係及び中国、西洋、琉球にまでわたっている。筆談に際して史書、礼服、儀典に関しては朝鮮使節の方に話題を奪われるが、外交関係や世界地理になると、白石の博識な説教が圧倒する。これは、在来の世界像に立脚して議論する朝鮮知識人と新しい世界像によって議論する日本知識人のありかたを象徴的に物語る一場面である。視点の違いは西洋を軸に世界を見る意識を持つか否かによっていた。新しい視野を獲得した白石にとつては、この対談は東アジアにおける知識人同士に自らの世界的視

野をアビールする絶好のチャンスでもあったろう。

## 前野良沢

今時、世間に蘭学といふ事専ら行はれ、志を立つる人は篤く学び、無識なる者は漫りにこれを誇張す。その始めを顧み思ふに、昔、翁が輩二三三人、ふとこの業に志を興せしことなるが、はや五十年に近し。今頃かくまでに至るべしとはつゆ思はざりしに、不思議にも盛んになりしことなり。漢学は中古、遣唐使といふものを異朝へ遣はされ、或は英邁の僧侶などを渡され、直にかの国の人に従ひ学ばせ、帰朝の後貴賤上下へ教導のためになし給ひしことなれば。漸く盛んになりしは尤ものことなり。この蘭学ばかりは左様のことにもあらず。<sup>(9)</sup>

これは杉田玄白が蘭学興隆の経緯を記した『蘭学事始』（二八一五）の冒頭の一文である。「翁が輩二三三人」は前野良沢と中川淳庵、桂川甫周を指し、「五十年に近し」というのは千住小塚原での死刑囚の腑分<sup>ふぶん</sup>の見物と『解体新書』の翻訳の開始（二七七一）以来のことを指している。ここで玄白が言いたいのは漢学は自ら中国に渡って取り入れたのに対して、蘭学はそういう経緯もなく、自発的に流行了った。その理由は何であろうかということであった。作者または

当事者である杉田玄白はまさに、この体験談の著作を以て、日本人と蘭学との出会いを、新しい世界との出会いとして見つめ、それを新しい文明と歴史の流れのなかに意味付けようとしていたのである。

確かに、十八世紀後期の日本における西洋学の急速な展開の背後には、暦学と医学に起源する洋学の禁を緩めた社会的事情があった。明の西洋暦学がいまままでの暦学より精確なので、長崎において焼却されるのはもったいないと、暦学者中根元圭（一七三三年歿）が幕府に建議を申し込んだのがきっかけであった。このような機運に応じて、仁斎派の学者であった青木昆陽（二六九八―一七六九）が徳川吉宗の命により蘭学を学び、西洋の実学に並々成らぬ関心を示した。昆陽は後に自ら長崎へ赴いて学び、『和蘭文字略考』『和蘭話訳』等の著書を以て、蘭学の根元を成した。大槻玄沢（一七五七―一八二七）はいみじくも蘭学の展開を、「和蘭学の一塗は白石新井先生に草創し、昆陽青木先生に中興し、蘭化前野先生に休明し、鶴斎<sup>いさ</sup>杉田先生に隆盛となれり。ゆえに近時斯に従事するもの皆この四先生に淵源せざるものなし」と表現している。<sup>(11)</sup> 西洋ふうな順序で各人の名前を呼ぶ玄沢が、白石の草創・昆陽の中興・蘭化の究明・鶴斎の大成と、洋学の歩みを纏めてみせたのである。

知識人の洋学への関心は、実用的な医学や天文学から目を付けはじめたが、西洋像の変遷によって、人々は技術の分野を超えて、世界の有りかたについての探索に傾いていく。そのような転換は西洋

各国の力関係の地殻変動を表している。アメリカの独立（一七七六）、フランス革命（一七八九）、イギリスの産業革命（十八世紀後半）という一連の社会転換の実現により、スペインやオランダ諸国に代わってイギリスやフランス等が世界進出の主役の座にのし上がった。その西洋の変化と出来つつある世界との関連が、清中国与西洋に同時に注目をしている日本知識人の関心と呼ぶのは当然のことであった。もともと西洋の視点を以て世界を眺めた新井白石の視野は、日本知識人が東西洋文明を両眺みしながら、変化する世界の実像を模索する道に入ったことを意味していた。新たな世界の構成における西洋という見逃すことのできない存在について、その実体は未だはっきりしないところが多い。これは、日本の在りかたや日本の存在に無関係ではないのである。巨大な西洋文明が日本に無限の可能性をもたらすかも知れないが、場合によっては、日本を脅かすものにもなる。この両面に備えるための知的作業が洋学の隆盛を造りだす最大の理由であろう。十八世紀後半になると、洋学者たちは西洋により理想的世界を求める一方、西洋からの危険を避けようとする一見矛盾した心境に逢着していたのである。このような洋学者の西洋像には正に憧れと恐怖が対峙しつつ、いつも混在していたといつてよいであろう。

洋学者の学問的内容は天文、地理を中心とするが、天文学や医学に対する理解が人間社会の様々な現象に目を向けさせる契機となる

し、天の理を究めることにより、世界観の再構築も考えられる。また航海は世界進出へのもっとも有効な手段である。陸や山のような座標のないところに航海すると、方位や星の秩序を頼りに方向を保つことが重要である。より精密な天文学の将来が海に出る前提となる。これは未知の西洋への知的アプローチをまず天地人に集中させた所以でもあろう。

蘭学の究明をなし遂げたと言われる蘭化先生前野良沢（一七二三～一八〇三）の学問的営みにも、こうした天地人への腐心が読み取れる。

中津藩医として青木昆陽に蘭学を学び、杉田玄白らと江戸小塚原で死刑囚の解剖を見て、西洋人の医学書記述の精確さに驚きを覚えた前野良沢は、『解体新書』（一七七四）の翻訳に見られる医学の分野はもちろん、彼の代表的著作の一つ『管蠡秘言』を見ても分かるように、天文、地理及び人間の在りかたについても少なからざる思索の火花を残している。

『管蠡秘言』序には作者が当該著書の趣旨を記している。

和蘭都に諸学校があり。その中に別に窮理学校と名づけたるもの有り。その教を立つるや、三才万物に即いてその本原固有の理を窮む。名づけて本然学と曰ふなり。是を以て天を敬ひ神を尊び、政を秉り行を修め、事理に明らかに術芸に精しく、物品

を正し器用を利す。而して帝王徳政を布き、公侯社稷を保ち、四民業を安んじ、百工巧を尽す。けだしその教化の至る所、実に遠大となすなり。<sup>(12)</sup>

オランダに各種の学校がある。その中に特に窮理（物事の道理を究める）学校と名付けられるものもある。この学問は天地人に則して、その本源や固有の理を究める。本然学（自然のままの学問）とすることができるとする。ここでは西洋の学問をする学校とその学問の内容から学問の効用にまで言及している。窮理というのは易經の説卦伝「窮理尽性」に出自し、程朱学の方法として格物致知に用いられる在来（こゝろ）の学問的概念である。その要点は一事一物の道理を究め知ることによりここに貫通して流れる天理を発見するところにあるが、その関連を以て、良沢が西洋の学問の一般的特徴を表現している。<sup>(13)</sup> 本然学というのも朱子学の「本然の性」と「氣質の性」という対概念から引用したもので、人工を加えないで、客観的にものを見ることの謂である。西洋の学問の本質的特徴を捉えるために、良沢が在来の学問的用語に新しい意味を付与することにより、再生させる工夫を施しているのが明らかである。このような努力を導き出すものは、西洋についての新たな認識である。『和蘭訳文略』では、

且夫、支那ハ聖人教化ノ国ト称ス。而モ私ニ思フニ、其制作技

術、実ニ西土ヨリ来ルモノアリ。況ヤ「ヨランダ」ノ図書ニオケル、予ヲ以コレヲ見ルニ、其善美ナルコト殆ド支那に勝レル者アリ。唯憾ラクハ、吾邦ノ伝習スル所ノ者、或ハ支那ノ翻スル所、或ハ訳家ノ伝ル所ニシテ、粗其事理ヲ窺フニ啻隔靴ノ痒ヲ搔クノミナラズ、其謬誤・杜撰ノ多キ、亦枚挙スルニ勝ヘズ。<sup>(14)</sup>

西洋の技術が中国に優れていることを素直に認め、そのような西洋を知るために、過ちがちな中国系の西洋知識や他人の訳本を頼りにするだけでは、用をこなすことができないと言う。オランダ語に近づいた理由が正に中国系の西洋知識を乗り越えて、自ら西洋文明との対話を可能にさせるためである。

良沢は『管蠡秘言』という独自の「本然学」の構築にも挑んだ。

これは天地人を巡る当時の論者が接触できる東西の学問を網羅したもので、世界におけるかつてない新しい総合的学問―東西文明に跨がる天文学、地理学、人間社会論―の誕生を意味するものであった。その学問体系の中身について、『管蠡秘言』の末に付けられている目録と附注<sup>(15)</sup>を見ることができる。目録では第一葉はまず地、地球、六大洲の図、アジア諸国、支那称、浮海求世界等を、第二葉は水、火、空、雲霧雨露、日月体、星を取り上げている。そして附注では総世界教法、孝弟急務、三教一致、戲論五行、湯武革命、天地過不及由于人心等を付け加えている。



同じ『管蠡秘言』の略説では、良沢は地球、地大、六大洲という順序で、世界万国の輪郭を描いている。地球が美しい玉石のようなものであり、昔中国では地球が方の形をしているというが、これは誤った説である。地球という名はヨーロッパに起源するという。そして地球の大きさについては「地球ノ一周、凡一万三千八百四十六里」という西川如見の計算を取って説明している。六大洲については「是吾邦、及ビ支那・印度等ノ古人、未ダ曾テ知ラザル所ナリ」と指摘したものの、マテオ・リッチ以来の学問を超えるものではない叙述だと言える。しかしその解説文には作者の世界認識の核心を衝くものがある。

六大洲の次に、アジアの国々を列举し、このように解説を加えている。

已上ノ諸国、小ナル者ハコレヲ日本ニ比スルニ、五六分ノ一ナリトイエドモ、大ナルハ五六倍、或ハ十倍、最モ大ナル者ハ二十余倍ニモ出ル者アリ。大洲中、亜細亜ヲ殊ニ大ナリトス。然レドモ、コレヲ以テ余ノ五大洲ノ広大ノ分ヲモ想像スベシ。<sup>(16)</sup>

ここに挙げた諸国は、小さいものでは日本と比べると、五、六分の一ぐらいだが、大きい場合は、日本の五、六倍或いは十倍、二十倍のものもある。六大洲の中、アジアは特に大きい方であるが、こ

れを以て、外の五大洲の広大さを想像することもできようという。作者はアジア一大洲が、如何に大きくても外の五大洲の和に叶うものではないのだと言明して、世界におけるアジアの構図を鮮明にする姿勢を打ち出しているのである。

こうした良沢における世界認識はまず西洋の膨張に対する分析に支えられている。西洋を含めた六大洲なる世界が人々に認識され始めたのが極く最近のことで、西欧でも、かつて世界を三分にして、ヨーロッパの東にアジアがあり、南にアフリカがあるとのみ考えられていたのだと良沢は世界像への接近を始める。良沢は、ヨーロッパ人の世界拡張により、世界の構成が大きく変わった事実を人々に示そうとしていた。ヨーロッパ人による世界探検の偉業が良沢の目には特異なものとして映っていたのである。

往昔歐羅巴ノ人、惟三世界ノミニテ、復国土アルコト知ラズ。然ルニ今ヨリ二百八十余年前（吾邦明応二年ニアタル。乃チ後土御門帝ノ御宇也）、歐羅巴ノ内、意大利亜国ノ人閼竜ナル者アリ。三世界ノ外ニ、海中尚国土アルベキコトヲ量テ、西海ニ舟行ス。<sup>(17)</sup>

昔ヨーロッパ人はまだ三世界以外に国土があることを知らなかった。しかし今より二百八十年前に、ヨーロッパのイタリアに閼竜（コロンブス）という人がいた。この人は三世界の外の海の中にさら



に国土があると思ひ、西へ航海に出たという。明応二年は一四九三年で、コロンブス（一四五〇—一五〇六）が第二回航海（一四九三—九六）に出発し、エスパニョラ島に入植を始めた時に当たる。このように良沢はコロンブスたる人物と、彼が「別世界」を発見した経緯を大きなスペースを以て紹介した。ところで良沢から見るとコロンブスは入植者や探検者の上に、また一人のミッシヨナリーでもあった。

予按ルニ、歐羅巴洲ニオイテ教法ヲ修スル人ニ、他邦済度ノ職アリ。持戒、不犯捨身救人ヲ志願ス。常ニ遊行シテ、一処ニ住セザル者アリ。想フニ閻竜モ、亦此職ヲ奉ズルナラン歟。<sup>(18)</sup>

話によると、ヨーロッパでは宗教を修める人には、他国を救済する職がある。彼らは戒律を守り、罪を犯さず、身を捨てて人を救うことを志願とし、常に歩き回って、一か所に止まらないといい、言うならばコロンブスもこのような職業の一人ではなかったかという。良沢にはコロンブスが西洋の宗教を背景に出てきた人物という認識があり、このような宗教の下でコロンブスの行動があったと理解されている。宗教を背景に世界像の拡大に努めたコロンブスの人間像に西洋人の正体を伝える何ものかがあると思われていたのであろう。こうした宗教的な情熱を燃やしていたコロンブス一行の「別世界」

との出会いの瞬間は実に生き生きと描かれている。

数月ニシテ、従者、或困倦シテ病ヲ発セントスル者アリ。閻竜、懇ニコレヲ教諭、按撫ス。時ニ望遠鏡ヲ候フ者、遙カニ土地ノ形容ノ彷彿タル者ヲ見得タリト告グ。乃、船中ノ諸人大ニ喜テ、相競フ。是ニ於テ舶ヲ彼地ニ進ム。数日ニシテコレニ到ル。果シテ別世界ナリ。<sup>(19)</sup>

数か月立つと、一行の中に疲れたり、病気に掛かったりするものが出たが、コロンブスは懇切に彼らを励まし、慰める。突然望遠鏡を眺める人が、遠い所に大地のような塊が見えていと報告した。そこで、船に乗る人々は大いに喜び、お互いに競いあってその方向を目指して進んだ。数日をして岸に着いた。果たせるかな、そこは別世界だった。

然シテ其土ノ人、言語相通ズルコト能ハズ。只吾ヲ怖ル、ノ状アリ。便チ財帛・美麗ノ物ヲ与テ、コレヲ馴近ヅカシメ、遂ニ彼地ニオイテ許多ノ国邑ヲ創置スルニ至ル。<sup>(20)</sup>

しかしその地の土着人とは、言語が通じない。向こうはただ怖がっているばかりだった。そこで彼らに金銀や布等綺麗なものを与え

て親しくなり、その土地に多くの国を創設するのに成功したという。このように良沢はかなりの紙幅を費やして南北アメリカ大陸の発見を説き、西洋人の三大洲以外の世界との巡り合いを叙述している。

新井白石に否定されたメガラニカ洲についても、「此一大洲ノ地理・人物等、未ダ審ニ誌スルモノヲ見ズトイヘドモ、上ノ五大洲トハ地界全ク異ナリ。故ニコレヲ備ヘテ六大洲ノ名ヲ記ス」と言って、未知な分野としながら記述を残している。

新しい大陸の発見を果たした西洋人には、特有な人間社会に関わる学問や宗教があり、それが探検家の後押しとなったことは、すでに良沢も指摘している。しかし良沢はその学問や宗教が一体どんな性質のものかよりも、その宗教や学問の世界における勢力範囲がどうなっているかの方をまず知りたかった。良沢にとっては、前者は必ずしも新鮮な問いではなかった。西洋人の学問や宗教については、早くから中国の明、清を通じて西洋人が伝えたものを耳にしたり、考えさせられたりすることがあった。良沢は学問や宗教というものは時代や地域之差によって多少異なる所があるにせよ、一般的に教化や国の治乱盛衰の調節を目的とするものであり、その質を言う時にはその勢力分布が如何になっているかをも見極めるべきだと考えているのである。

大抵仏教ノ到ル所、只「アジャ」ノ内、僅ニ十分ノ二、儒教ノ

及ブ所、十分ノ一ナリ。其余ハ大凡天主教ナル者、諸大洲ニ遍満ス。「アジャ」ニ在テハ、回回国ヲ以テコレガ首領トス。「エウロパ」ニ在テハ意大利亜専ラ教化ノ主タリ。「エウロパ」及「アフリカ」四方ノ学士、皆聚会シテ、耕織ヲ勞セズシテ、此処ニ衣食スル者、凡七十万人ナリ。<sup>(21)</sup>

アジアの中では、大体仏教の到るところは、僅か十分の二、儒教の及ぶ所は、十分の一、あとは凡そ各大洲には皆天主教の人で、一杯である。アジアにおいては、「回回」<sup>ファイ</sup>国を以て天主教の首領とし、ゆえに中国ではこれを「回回」教と呼んでいる。ヨーロッパでは、イタリア人が専ら教化を司る。ヨーロッパ及びアフリカ四方の学者が皆ここに集まり、働かずに生活しているものは凡そ七十万人に上ると言う。仏教や儒教と比べ、圧倒的な力を持っているものとして天主教を捉えているわけである。さらに良沢はヨーロッパ諸国では宗教者も官職も国民により選ばれることに触れた上、中国は昔から「革命」の伝統があるために、「故ニ勝敗興亡ノ移ルコト、環ノ端ナキガ如シ」、その反対に「欧羅ノ洲中、古ヨリ篡奪ヲ以テスルモノ、天下国家ニ君タルコトヲ得ズ」と、中国とヨーロッパの政治伝統の差異を明確に指摘し、中国社会の劇的変化の原因を伝統思想の作用に求めた。西洋の宗教制度と社会制度のありようにむしろ高い評価を与えたのである。このように世界の大勢を占めている宗教や

社会制度の持ち主を野蛮な夷狄と簡単に片づけることができるのであろうか。西洋人はこの新しい世界における無視できない存在なのではないか。これこそが良沢の言わんとするところであつたらう。

こうして良沢における新しい学問の構築と新しい世界認識とが同じ地平に立ったことが分かる。多くの洋学者は西洋の学問研究とともに海外事情の紹介者、世界地理の研究者をも兼ねていた。このことは言ってみれば、西洋への理解がないと、西洋の学問も素直に受け入れられない事情があつたことを示している。現実的に西洋から危機を感じ始めた時は尚更である。一七八二年、良沢は早くも一六九二年にフランスのパリで公刊されたニコラス・サンソンの地図帳『輿地図小解』を訳している。これは時局の必要に応じて西洋人の書いた地理書をそのまま訳して使おうとしたものであつた。さらにその後も『東砂葛記』（一七八九）、『東察加志』（一七九〇）、『魯西亜本紀略』二卷（一七九三）等の地理書を訳している。これら三者はいずれも北方地域やロシアの地理を中心内容としている。『東砂葛記』の序文には「按ずるに蝦夷の属島クナシリより、直路わが里法で二百五十里ばかりに当たつてカムサスカという国がある。わが邦人が奥蝦夷というのはこれである。この国には今は魯西亜の手が及んでいる。然るにこの国の地図や山川等について詳しく記したものが無い」と言明されており、率直に北方からの危機を訳出の動機に挙げている。『魯西亜本紀略』を訳した寛政五年は、ロシアの使

節アダム・ラクスマンが漂流民光太夫を伴つて蝦夷地に現れて通交を迫つた翌年で、ロシア問題がようやく頂点に達しようとした時代である。内容から見ても、この訳書は歴史的にロシアのことを捉えているもので、地理書よりも歴史書といった方が適切である。この本には、時折り良沢の按も注記されており、訳者の時局に対する認識が示されている。この本は当時のロシア関係の文献、特にロシアの歴史として權威的なものになっていたために、その写本が広く流布して幕末まで諸書に参考にされていたといつた<sup>22</sup>。

十八世紀末期になると、新しい世界像をもとに新しい学問の構築に苦心した良沢も、北からの対外危機に直面して、海外情報や世界的関心と自国の危機の両方に目を移し、いふなれば献身的知的な戦士として出発した。これはまた十九世紀の世界を迎えようとする日本知識人の新しい時代への適応の様相を示すものであつたといつてもよいかも知れない。

#### 杉田玄白

新井白石が人生の舞台を去つた一七二五年を前後にして、一七二三年に前野良沢が生まれ、一七三三年に杉田玄白が生まれた。徳川日本においては、これは非常に大切な時期であつたのかも知れない。これらの人々はそれぞれ、世界像の再構成に動き出した徳川日本の

知的営みの先駆者であった。その死と生による新旧交代は、時代の節目を現したと言える。十八世紀中後期における前野良沢や杉田玄白のような代表的な洋学者たちの登場は、日本のために、思想上、学問上の新たな担い手を準備し、特に新しい世界を迎えようとする機運をもたらしたのである。良沢は、新しい本然学の確立を目指し、独自の学問の樹立や世界像の見直しを図った。これに対して盟友の一人である杉田玄白は確実に新しい世界を把握するために、その新しい世界像の意味するところをつかまえようとしていた。両者はともに徳川日本における新たな世界認識や世界像の再展開に深く寄与し、中心的な役割を果たしたのである。

杉田玄白（一七三三―一八一七）については、彼が前野良沢、中川淳庵らと小塚原刑場で死刑囚の解剖に立会い、ドイツ人クルムス著『解剖図譜』のオランダ語訳（ターヘル・アナトミア）からの翻訳を、良沢らとともに一七七四年に『解体新書』として刊行し、『蘭学事始』でその苦心を追懐したことを思い浮かべる人は多いであらう。もちろん蘭学の祖と目されてもよいこれらの人々の成果である『解体新書』と、彼らが歩んだ道を記述した『蘭学事始』を抜きにしては、玄白を語ることは不可能である。母の難産による死とともに生まれてきた杉田玄白がその誕生後二年目に刊行されたクルムス原著、ディクデン、オランダ語訳の『ターヘル・アナトミア』と、日本において運命的に出会ったことは近代日本文化史上の忘れ

がたい一情景として永遠に記憶するに値するものであらう。しかし玄白たちの精神構造や思想の内部に立ち入るためには、上述のようなことだけに着目するのでは十分でない。良沢と同じように、玄白も蘭学の目的は実用的で専門的な学問たることにあるとしたが、同時に学問の成長を支える精神的な到達と蘭学の西洋的出自との格闘に関心を抱かざるを得なかった。良沢も玄白も、こうした心の代弁を虚構人物との対話体文章に託した。前節で既に見てきた通り、良沢は、その世界認識と新しい学問との関わりに対する確固たる信念を表すために、『管蠡秘言』等における対話体の文章に盛り沢山の思想的火花を持ち込んでいた。本節に登場する玄白も、『和蘭医事問答』や『形影夜話』等の文章で、良沢に劣らず、対話体の文章を用いたが、それによってその精神的な世界と外の世界との対話が、こんにちでも読者のわれわれに生き生きと訴えかけてくる。自分の精神的軌跡と変化する世界に対する印象を、対話を通じて世間一般に発信しようとした作者の啓蒙的合理的思想家の本領を窺うのに、これ以上のテキストがあらうか。

『解体新書』の刊行から『蘭学事始』が成るまでは、日本を取り巻く世界情勢が激しく変化を遂げつつあった時期であった。イギリスは対植民地政策において本国の利益第一主義の重商主義を取り、未成熟な国内産業資本を必死に守ろうとしていた。アメリカ大陸では十八世紀後半アメリカ独立戦争の勃発とその独立宣言の成立が在

来世界の構図を変える兆しを見せた。フランス革命の達成とナポレオンの時代の到来は西欧世界が十八世紀から十九世紀への移行を宣言したものであった。もっともイギリスの産業革命を皮切りに、フランスやドイツ、アメリカ、ロシアなどの国々にも同じ産業革命の波が押し寄せ、旧植民国家ポルトガルやスペイン、オランダに代わって、上述のような新興国家群が出現した。さらに明治維新を経て産業革命を達成した日本を加えると、ほぼ十九世紀の世界の新しい顔を代表する存在が出そろうことになる。この産業革命を中心とした大転換の波は西洋から始まり、日本や中国のような非西洋社会に、強大なインパクトを与えたのである。それは非西洋社会の人々がいずれもこうした事態への対応に追いついてしまふほど力強いものであった。在来の世界を見直そうとする非西洋社会の知的指導者たちは、新しい世界への展望を、喜びと苦痛とともにしか広げていくことはできない。歴史的に、心理的に親しみがたい西洋から、異なる文明を受け入れ、新しい世界に近づくことは、場合によっては楽しいことであるが、そうする前に自国が強大な西洋植民地勢力に飲み込まれない保証はどこにもない。世紀の交わりに遭遇した老年の玄白が、まさにこれと似たような心境にあったろう。かの西洋人による侵攻への危機を訴える数編の文章には、こうした恐怖への思慮が強く感じられる。医者や業を営みながらも、時代の要請に目を向けずにいらなかった玄白が、晩年には人間の病状を見出す力を社

会危機の所在の分析に当てたのは、日々募ってくる西洋からの圧力を一身に受け止めている医者としての鋭い感受性によるものであったばかりでなく、個々人の生死を超える国全体の存亡にかかわる大問題を前に戸惑った結果、勇敢に立ち向かう以外に生きる道がないとの自覚によるものであったと思う。

『解体新書』の翻訳（二七七二）と刊行（二七七四）に際して同時期の日本社会も種々の新しい様相を呈し始めている。思想的には江戸時代の中でもっとも自由な時代であるといわれる田沼時代と相まって、人々の蘭学への関心が高まってきた。一七七〇年に平賀源内（二七二八〜七九）は時の田沼の命を受けて、再び長崎に赴き、蘭館に出入りして発電機の理法を身につけようとした。源内はかつて後藤梨春の『紅毛談』<sup>オランダ</sup>を読んで、発電機のことを知り、その法を得ようと思ひ、長崎に見物に行ったのであるが、江戸に戻ってから大いに発電機の効力を説き、広く西洋文化への関心を呼んだのである。翌年の一七七一年二月には、薩摩藩主島津重豪<sup>しげたか</sup>（二七四五〜一八三三）が幕府の許可を得て長崎におけるオランダの船を視察し、その設備の精巧なを見て、西洋の文化にいたく驚嘆したという。重豪は洋学を導入して積極的開明策を採用し、藩校の外に造士館等を創設し、また臣下に命じて、『成形図説』『世界地図』等を編纂せしめた。このような雰囲気と呼応するかのうちに、同じ年の三月五日には前野良沢、杉田玄白、中川淳庵の三人が例の『解体新書』の翻訳

に着手し始める。しかし同年七月、このような蘭学に憧れつつある世間に大きな震動を与える事態が出現した。かのベニョウスキーのロシア南進野心に関する情報がすなわち震源なのである。これは誤った情報であったにもかかわらず、ロシア南下侵略の警告として広く知識人に受け止められた。これを境に、蘭学者の世界地理研究や西洋各国への関心がさらに進展を見せる。同年十二月に本木仁太夫は蘭人ヨハン・ヒュブネル編集の地理書『阿蘭陀地図略記』（一七二二）、翌年の末ごろに蘭人ロエイス・レナルドの撰書『阿蘭陀地球説』を訳した。一七七二年二月の和蘭甲必丹例参の際、幕府医官桂川甫周は幕府に命ぜられて蘭人フエイト等と対話をし、意見の交換をしたりした。一七七四年一月には、西村遠里が『万国夢物語』を著し、新井白石の『采覧異言』をもととして夢中の行旅に託して世界万国の度数、寒暖、産物、地理、風俗等を平易に叙述する。更に平山旭山が『万国図説』を著し、心を和蘭の事物に注ぎたいものたちに大いに喜ばれた。同年八月、杉田玄白等訳の『解体新書』が刊行される。同月、本木仁太夫が『天地二球用法』（四巻）を訳した。本木の自序に曰く、

古聖、俯仰天文地理を見察し、民に時を授け、天下を平治す。欧羅巴の先賢亦同じ。殊に和蘭は海に浮んで万国に通商し、国を富し博衆芸を学んで身を潤す。嗚呼大哉、航海の術、纔かに

一隻の舶を以て万里の大洋を渡る。其の要は天文を測り、日月諸星の運行を考へて、昼は太陽行度升降を測り、夜は恒星地平上、高低を度り、経緯度を以て其船隻の所在を知る。天地二球は天文地理の学士及び航海者の要器なり。<sup>(23)</sup>

この訳書において初めての地動説を説いた上に、地理天文の学問の目的は世界に通商して、国を豊かにし、広く他国の優れたもの身に着けるためだという認識を示したのである。世界地理知識への社会的関心呼び出し、オランダのように海洋への進出を夢見ている訳者の意気込みを伝えている。この次の年に、玄白は『狂医之言』を著し、自らの新しい医療哲学とその医学を支える世界的視野への傾斜を明確に提示した。

腐儒庸医は天地の大なるを知らず、少しく東洋二三国の事を聞き、支那を以て万国の冠となし、また少しくその書を読めば漫然とみずから称して曰く、夷狄はその俗もとより礼楽なきなりと。それ礼楽文物は、以て尊卑を分かたんとすなり。何れの国が尊卑なからん。何れの国が礼楽なからん。<sup>(24)</sup>

古い世界像の持ち主、狭い視野によって中国を世界のもっともすぐれた国と思わせる「腐儒庸医」に痛烈な批判を加えた上、その

「夷狄」には文明がないとする一般論を退け、「何れの国か尊卑なからん。何れの国か礼楽なからん」と言って明快な西洋文明肯定論を打ち出したのである。

道なるものは、支那聖人の立つるところにあらず、天地の道なり。日月の照らすところ、霜露の下るところは、国あり人あり道あり。道とは何ぞや。悪を去り善を進むるなり。<sup>(25)</sup>

「道」というのは中国の聖人たちが作るものではなく、自然にあるものである。天の下には国があり、人があり、「道」がある。「道」とはなにか。それは悪いことを無くし、いいことを勧めるものであると言う。言うならばここでは荻生徂徠が主張する「先王」という理想的古代帝王の「作為」「制作」の総体とする「道」に対して、世界共通という普遍性を求め、自然的存在という朱子学固有の「道」を生かしたところに玄白の世界観の再構成を見ることができ。この「道」をととのえ、悪を無くし、善を増やしていく自信が玄白にあったのであろう。普遍的「医学」を追求しながら、日常医務に努めていた玄白の生きる姿勢も、こうした新しい哲学観の認識に裏付けられていたのではないかと思われる。これは世界的視野の上に世界的普遍性を追求するようになったものであり、新井白石の時代とは違った玄白の時代的側面と言えよう。前節の白石のとき

ろでも述べたように、知識人たちは、西洋学問の吸収に際して、中国思想への批判的発展と中国からの刺激という二重的思惟をいつも持ち合わせていた。これは玄白の場合も継承された。この「道」の再構築を通じて、一部の知識人の頭裡にある中国思想の伝統的権威を破りながら中国思想に内包される普遍性をうまく引き出し、一方、中国からの刺激を生かして、人々の危機意識を呼び起こそうとした。

けだし支那は、天文曆家および百工の類、すでにその国に伝はるところの非なるを知り、明季以来、多く西洋の法を学び、行ふところに、西洋曆・曆算全書・奇器図説・靈台儀象・大西水法等の書あり。ゆえに今の渾天儀は古とはその制を異にするなり。これその善を採んでこれに従ふなり。ひとりわが医の如きは、株を守りて改むるなし。あに悲しからずや。<sup>(26)</sup>

知的な権威を誇っている中国でさえ西洋の文化に目を向けようとしたのに、ひとり日本だけが古い権威を守っているのはどういうことかという強い疑問を発したのである。近代日本における新しい世界観や合理的啓蒙思想の土台は、中国思想への批判的発展と中国からの刺激の上に置かれていたことが分かる。しかも西洋の学問や中国の思想を見る場合には、無原則的、盲目的ではなく、西洋の医説と漢土の医説とに対する客観的、合理的な判断が求められていた。



漢土の医は身体の理に疎漏なる故、毎事着実なる所は少し。

(中略) 其他、後世の書に至りては、専ら五行配当を主張して、論説を設しものあるは、捨る所多くして取る所少し。(中略) 阿蘭医学といへども亦しかり。彼医も己が好む所に執泥する所なきにしもあらず。さりながら其本とする所正しき故に、取所多して捨てる所は少し。但、此等の取捨は其読者の力によるべし。<sup>(27)</sup>

漢土の医でも西洋の医でも一方的に取捨するのではなく選択的に使うべきだという。大切なのは読者自らの判断力にあり、学説の出自ではない、ということを強調したかったのであろう。この取捨の原則は玄白の『解体新書』翻訳事業を支えた一貫した態度でもあった。医学という分野を通じて西洋世界を探ろうとする玄白においては、西洋医学の有効性という事実こそが説得力を持つが、何もかも西洋がという盲従的な思维法を取るわけではない。合理的な選択というカテゴリーに目覚めた玄白の思维には、近世日本における西洋認識の初期的論理を内包していたといつてよいであろう。

しかし合理的な選択吸収も、急速に現実的になってくる西洋の圧迫の前に、早くも限度を見せ始めた。玄白は一医者として西洋から医学という有用の学を学んでいる内に、西洋からの脅威を意識する

ようになった。人間の病気を見る目を国の危機に移した晩年の玄白には、その憂国の情を『野叟独語』(一八〇七)というかたちで披露せずにはいられなかった。玄白にして見ると、平和な世に溺れて目の当たりの災難に気づかない人々の暮らし振りは余りにも心に痛々しい。

然るに世の人々も此余沢にて、今日に至る迄何不足なく、干戈飢寒の患を知らず、美食に飽き美服を着し、華奢風流に日を送り、かゝる難有事をば打忘れ、代は万代も如此ものと思ひ、上は貴人より下賤人に至る迄、二代も三代も安楽に暮せし其天罰にや近來は金銭不足して、世の中何となく手詰になり、人々之を塗隠さんと思ふより、心底あくまで賤しくなり、其所業皆道にあたらす。<sup>(28)</sup>

人々は平和が永久なものだと信じて、国家が興亡の危機に臨んでいる兆しを認めようとしない。医者としての玄白は、その危険を人々に訴え、昏睡状態の世人を起こしてやりたかったのであろう。国家にも人間のように生老病死があるとすれば、時に医者に見てもらうこともありうる。ここでの、玄白は国の病を見出そうとする医師に生まれ変わっている。その玄白が見出した国の症状は次のようなものであった。



先其萌の第一と申は、近来諸人聞く所の魯西亜国の外患なり。<sup>(29)</sup>

ロシアからの脅威を第一に上げている。一七九二年、ロシア使節ラクスマンが伊勢の漂流民大黒屋光太夫を護送して根室に來航した。ロシア人の通商要求に対して、幕府は長崎入港の許可状を与えた。一八〇四年にロシア使節レザノフが皇帝アレクサンドル一世の親書を携え、軍艦ナデジュダ号に乗って長崎に漂流民を護送し、また通商を要求したが、幕府は今度はロシアの貿易要求を拒絶した。ナデジュダ号に対する日本側の対処も厳しいもので、兵器、弾薬の引渡しを命じ、ロシア人の上陸を認めず、ナデジュダ号を長崎港外に泊めて厳重な監視下に置いた。ロシア側にとって一八〇四年の通商拒絶は、一七九二年に通商許可の意思表示をした幕府の「前約違反」としか考えられない。これは文化三年から文化四年に至って、ロシア人が頻繁に蝦夷地を襲撃したりする背景の一つにもなったと考えられる。

問曰、其魯西亜こそ我国の大病のやみ附にて候べし。良医は未病を治すと申候得ば、此取扱間違なば難治の症となるべし。如何して可宜や。<sup>(30)</sup>

ロシアの脅威が日本という国の最大の病というべきだ。よい医者は病気を未然に防ぐものであるが、このロシア病へのとり扱いを間違えば、不治の重病にもなりかねない。どうすればよいのだろう。国家の病気を診察する医者として、玄白は症状を指摘するだけでなく、この症状を治すには、いかにすべきかを問いかける。それは、まずこの病気の本質を掴むことが必要であり、つまりロシアという国とはどういう国であるかをさらに追跡することが要求される。

抑魯西亜と申は所謂没斯箇末亜にて、昔は一の王国なりしが、当時より四五代以前の英主ベテルデゴロートといふ男、其近国を切従へ、其国を中興し、段々勢盛になり、次第々々に手を延し、我蝦夷の方向カムシカツトカといふ所迄己が領地となし、遂に彼方の帝位を履み、今時世界第一の強盛の大邦となりし由。<sup>(31)</sup>

ロシアというのはもとモスコビヤとも呼ばれ、昔は一王国だったが、今から四、五代以前の偉大なビョートルという男により、この国は振興され、強くなり、今は四方に拡張し我が蝦夷地方カムチャツカをも自分の領地にして、世界における第一の強大国になっているという玄白は、大国ロシアの日本に対する存在意味を十分に理解していたのである。このような大国と交わるには、日本はどうあるべきか。日本はロシアを含めた世界にどういう位置を占めるべ

きか。ロシア病を巡って、玄白は日本と世界の關係に目を配り、國際環境における日本という視座を明確に持ちえたのである。

近來アメリカ船・ベンガラ船とて、交易を望み来りしとも聞ゆ。又所々に異国船漂着といふもの、多くは伊祇利須国と見ゆ。又阿蘭陀は格別に御誓約申上し事有て百年余も来舶御免の国なれ共、人情の変態、国力の盛衰は何国も同じ事なれば、惣て百年前に申上し通りにや、数千里隔てし国の事、其上片便宜の事なれば、今に不変事か、必ず当にもなるべからず。<sup>(32)</sup>

近來アメリカ等の船も貿易を望みにきたそうである。また各地に異国船の漂着もあり、その多くはイギリスのものと見える。オランダとは特別の約束により百年余り通商關係を維持してきたが、人情の変遷、国力の変化がどの国にも同じであるように、すべて百年前の通りにするのが必ずしも適當ではない。アメリカやイギリスの登場とオランダの衰えという新しい世界の情勢に対処するには、日本は変化する世界とともに動く以外に存在できないという。ロシアの脅威、アメリカ、イギリスの出現という新しい事態を目の前にして、玄白は時代の変動の刻みを読み取ったに違いない。同時に玄白にとってこれは今までのように西洋のよいものに憧れ、西洋文化を摂取することから、西洋の脅威を受けながら、西洋の文明に切り込む

ことに切り換えることを意味し、平和日本はもはや平和に安住することができなくなったということの意味していた。西洋は強い一方、危険な存在でもある。西洋世界のこうした面を見据えた玄白の新たな國際意識の形成は、彼の国の病氣への分析に見出すことができる。かつてない強くて危ないロシア、そして国力を弱めたオランダに替わって、新世界に登場してきたアメリカとイギリスという新しい世界勢力構成のイメージが、玄白等の文化人に止まらず、やがては、十九世紀初期の時代意識として民衆一般にも浸透していく。これは後に明治日本の西洋世界像の原型ともなるであろう。

## 2 憧れと脅威の世界

### 司馬江漢と本多利明

十八世紀後半期になると、ときの老中田沼意次<sup>おきつぐ</sup>（一七一九～一七八一）が政治を担当した時代いわゆる田沼時代（一七六七～一七八六）を迎えた。田沼時代では、享保改革の一面を繼承し、商業資本の活用で積極的な幕府財政再建をはかり、長崎貿易の拡張を実現したのみならず、また、商業資本で下総の印旛沼、手賀沼の開拓を進め、蝦夷地の開発、ロシアとの貿易も計画するなど、従来にはない積極的經世策を展開した。思想的にも江戸時代のなかでもっとも自由な時代といわれ、蘭学の興隆、平賀源内の活動、新しい經世論、經濟論など、大変局を生み出す精神的準備の完成を見せ

ている。一方では、天明の飢饉や百姓一揆、打ち壊しが続発の中で、民衆は田沼意次、意知父子の専横に対する批判を強め、権力と金銭との絡み合いに対する厳しい姿勢を示したのである。このようなダイナミックな世相は、一部の人々には落ちつかぬさや焦燥感、それに不安をもたらし、一部の人々には変化へのエネルギー源や精神的緊張感を与え、さらに一部の人々には夢と希望、反発と苦悩という相反した情緒世界をもたらしていた。この三者はともに十八世紀から十九世紀への変わり目における、外部世界への憧憬と在来社会への批判という知的作業をする日本人の精神的背景だったといっている。

司馬江漢（一七四七―一八一八）はまさに、こうした時代精神のもとに活躍した知的戦士の一人であった。<sup>(33)</sup> 彼は絵をもって生計を立てていたが、絵画の世界をはるかに超えるところまで、自らの知的領分を持ちえたのである。それは西洋を含めた世界というものを把握しようとする幅広い知的作業であった。未知の世界に対する挑戦は地動説の紹介や銅版で制作した「地球全図」や「天球図」をはじめとする天文学、地理学ばかりでなく、工芸技術、社会制度、<sup>(34)</sup> さらに彼特有の人生の哲学等にも及んでいる。<sup>(35)</sup> 浮世絵から漫画そして洋風画から西洋事情や世界図、そして老荘的な人生観へと、その知的世界の空間と深さが絶えず拡大されていく。

こうした江漢の知的世界の構成はかなりのところ西洋に対する好

奇心に支えられていた。西洋の学問、西洋の品物、西洋の人間、何ひとつ江漢の心を引かないものはなかった。天明八年（一七八八）、江漢は絵画の修業のために長崎への旅行をした。遥かなる未知の世界への憧憬や想像力を持ちながら、彼は西へ向かった。

十一日、天気、嶋原屋しきへ行ク、晩方風呂屋へ行ク、居へ風呂也、夜ニ入、平戸町幸作ノ処へ行ク、二階おらんと坐しきを見物ス。イギリス細工のヒイドロ額欄間下ニ掛ケならべ、下ニハ倚すを並、其外奇妙なる蘭物ヲかざり、酒肴を出し、夜の九時過に帰ル。<sup>(37)</sup>

途中で、様々な見聞や感想を持った江漢にとっては、長崎でオランダ渡りの奇妙な品物に触れたことも、彼の言うような「楽しみ深し」<sup>(38)</sup> の一つであろう。しかしこうして目に見えるものを通じて西洋世界に近づこうとする江漢に与えられるチャンスは余りにも少なすぎた。彼には、西洋世界に到達するもう一つの道が必要である。それは学問的に西洋を研究することによって、西洋世界に迫ることである。事実江漢は自らの西洋学（理学）を構築し始めていた。

理学とハ天地人の三才の理を云、此理を究めんと欲せハ、天地を始めとして之を窮むる事なり、天地の窮理ハ西洋是を教への

肇とす、然ニおらんた国ハ西洋の何レニ有之国と云事をも不知ハ、其理わからず、故に小子等曩地球の全図を製し、銅版にし、彼国の法にならひ、国字を以て国の名を誌す<sup>(39)</sup>。

理学というのは天地人の三才の理をいうものであり、この理を究めるには、まず天地の理を究めるべきである。天地の理については西洋の教えが優れている。もしオランダという西洋の国がどこにあるかも知らなければ、西洋の理が分かるはずはない。ゆえに西洋の方法に習い、日本語を以て各国の名を表記する銅版の地球全図を作ったのだという。明らかに、天文、地理への指向を、単に天文学、地理学への興味よりも、西洋という人間世界をよりよく理解するための、必要不可欠なステップとして位置づけている。言うなれば天地の理の究明は人間世界の究明につながるものと思われているのである。さらに彼は西洋の中でも、特に西洋の主要国に焦点を絞り、少しでもそのイメージを明確にしようとした。

それ万国中、最も先づ創まる者は、諸厄利亞・払郎察・和蘭陀の三都なり。故にその国の学は、三才に兼通し、物理を窮極し、巧思深慮、至らざる所なし。聖々肩を比べ、賢々踵を接し、これを窮めてまた究む<sup>(40)</sup>。

世界万国のなかに、もっとも早く開化した国が、イギリス、フランス、オランダである。この三国の学問は天地人の三才に精通し、物理学を窮め、巧みに思索し思慮し、至らないところがない。これを目指して聖人や賢人が輩出しているという。聖人ももはや中国の専有ではなくなった。代わってイギリス、フランス、オランダの聖人たちが賢人たちを中心とする天地人の学問が江漢の「理学」の目指すところとなったのである。江漢はこうした天地人の三才を持つ国の群れを憧れを込めて眺め続けている間に、西洋の優れた学問から、「武を以て治る事ハ甚いやしめり、只徳を以て治る事なり<sup>(41)</sup>」という優れた社会政治が生み出されていたとも信じるようになった。西洋はまさに理想世界そのものであった。

天下第一ノ大洲ヲ名テ<sup>ちうげ</sup>欧羅巴ト云（土地ノ広大ナルハ<sup>エウロツパ</sup>亜細亜ニ過ルハナシ、然トモ開闢久キヲ以テ第一トス）人類<sup>ハシメテ</sup>肇開ケ、聖賢ノ道<sup>ちうだう</sup>首<sup>ひつ</sup>ルノ郷ナリ<sup>(42)</sup>。

西洋は土地の大きさではアジアに及ばないが、文明開化の歴史が長くて、人類が文明を開き、聖人の道が始まった故郷でもあると言う。最初に西洋に聖人の道が始まったというのは、江漢の知的世界において文明像の転換が既に達成されていたことを示すものであった。これは江漢が絵画の世界にしながらも、世界地理や西洋事情に

興味を持つに至った理由であるのかも知れない。

西洋を文明の源泉地と仰いだ江戸町人絵師江漢に見える西洋人のイメージも格別なものであった。

此諸国大概人物ノ氣質同ジウシテ、性温厚ニシテ躁<sup>サハカ</sup>シカラズ、  
 ア細<sup>ア</sup>亜<sup>ヤ</sup>ノ人ニ比スレバ甚タ巧ミアリテ思深シ、人生レテ胎<sup>タイ</sup>髪<sup>ハツ</sup>ヲ  
 剃<sup>シ</sup>ス、髭<sup>ヒ</sup>鬚<sup>シ</sup>ヲ剃<sup>シ</sup>テ髪ヲ結ビ括<sup>グ</sup>コトナシ、毛髪ノ赤ク白キトノ  
 班紋ヲ美トス、男女トモニ隆準<sup>リウジュン</sup>なり、諸州ノ人ヨリも鼻高ク眼  
 中浅黄色、眸<sup>ヒト</sup>青シ、吾亜細<sup>ア</sup>亜<sup>ヤ</sup>ノ諸国ノ人に比スレハ其志甚異  
 リテ、<sup>(43)</sup>

これらの国々の人々は氣質が相似であり、性格が温厚で穏やかである。アジアの人と比べると、特に物事に巧みで、思索も深いのである。彼らは生まれてすぐ胎髪を剃る。髭と鬚を剃るが、髪は結び纏めない。髪は赤い或いは白い模様を美とする。男女とも準骨が高く、他の諸洲の人よりは鼻が高く目が浅黄色である。瞳が青い。我がアジアの諸国の人々と比べて、その志するところが甚だ異なっているという。西洋人の外観に対する入念な描写において、アジア人は外観的にも精神的にも西洋人に及ばないという觀念がすでに出来上がりつつある。こうした西洋人論は、遠い西洋世界の人々の積極的進出性と身近の人々の現状に甘んじる保守性との比較

において生まれたが、鮮明で、しかも知恵に溢れた西洋人像には、江漢の西洋に対する羨望がたつぷりと込められていたのであろう。江漢からみると西洋は天地人の学問の源というばかりでなく、人間社会の理想郷そのものでもあった。例えばキリスト教にしても、これこそ西洋という理想郷に相応しいものであった。

我日本古へより他邦と交らず、船を出さず、二百年以前「ポルトガル」国の者、東方へ大舶を乗り廻り、日本を初て見出し、其比信長天下の主たる時、戦争未だ已<sup>ヤ</sup>すして有けるを、彼「ポルトガル」の者とも憶ふニ、此国未だ戦て教を知らず、爰に教を施し国民を治平し、吾国の属嶋となさん事を謀しニや、教師数百人をおくり、金銀財宝を齎し来りて諸民に施し、病院を建て貧人ニ施薬し、皆奇薬を以て難病を治し、恩沢を受ける者鮮<sup>(44)</sup>からず、

キリスト教宣教師たちの到来は自国のために属地を求める使命があるとはいえ、日本がまだ戦争の状態にあった二百年まえから、平和な教えをもつてきて国民のために努め、人々に金銀財宝をもたらし、病院を建てたり、貧しい人に治療を施したりして、その恩沢を受けている人が少なくなかったという。船に乗って世界万国を周り、無教養な人々に教えをひろめたり、貧しい人々に金銭や医療を与え

たりした西洋人宣教師たちが、ありがたい慈悲深い道德者として評価されている。優秀な道德性と進んだ学問を持っている西洋人と比べると、日本人は道德の面は勿論、学問の面でも遠く及ばない。

彼諸国の風俗常に天地を学ぶ事して、小童も地球たる事を知らざる者なし、我日本ハ貴人より卑つかたニ至るまで、惟遊樂の技藝のミ好ミ、実学を好て理を究める事を不好、偶々理を云人ハ諸人ニ嫌る<sup>(45)</sup>、

西洋の人は常に天文、地理の学問をし、たとえ子供でも地球ぐらいのことを知らないものはない。しかし我が日本は上層部の人から下までただ楽しい遊びに耽り、実用的学問や論理的な学習を好まず、理を説く人はかえって嫌われるという。西洋人と日本人を対極的に捉えた江漢の文章には、日本人も積極的に世界を周航した西洋人に習い、天文地理等の実学を手掛かりにして、万国との往来を実現したい気持ちが滲み出ているのである。彼にとつては「地球と何何<sup>(46)</sup>の事」といって西洋人に笑われるような日本人像は実に恥ずかしい、耐えがたいものであった。

西洋のもの、西洋の人間、西洋の学問に対する江漢の羨望と賞賛は、その世界像の拡大を如実に表していた。絵の世界でも、江漢は、日本人や中国人そして西洋人の順に描く対象を移している。感受性

のつよい江漢は、古いものよりも新鮮なもの、平凡なものよりも特異なものにいつも魅力や刺激を感じていた。恐らく彼は絶えず未知な世界を求めることによって、初めて想像力を保ち、さらにそれを大きく膨らませることができたとも言える。浮世絵から、漢画、そして洋風画に進んだ江漢は、描く世界や描かれる世界を、絶えず拡大し、高めていくのである。彼は単に絵画を日本的な作風から中国的作風そして西洋的作風に切り換えたのではなく、心の拠り所を日本から中国、そして西洋に託しようとし、描く力の拡大と描かれる世界の再発見に夢を見出そうとしていたのである。

こうして想像の世界と現実の世界の境界を曖昧にした江漢の独自の世界像は、穩健な知識人層には一風変わった様に見えるが、同時代の大衆、特に外の世界に疎い一般町人にとっては、むしろ感覚的には近く捉えられやすいものであり、しかもどきどきさせ、わくわくさせるものであった。それは遠いかなたに憧れの天地を夢見つけてきた孤島日本の町人たちの、情緒的な世界を側面から照らし出すものとなっていた。しかしこのような夢心地的な世界像は決して洋学の主流派に受け入れられるものではなかった。かつて大槻玄沢の一門は「唐あやのでっち猿松」、「銅屋<sup>あかがね</sup>の手代こうまんうそ八」(蘭学者芝居見立番附)と、江漢を呼んで揶揄したように、正統な蘭学者たちは江戸町人出身の江漢における町人的反骨精神を低く見下げようとした。蘭学者たちは江漢と共通した学問分野を持ちなが

らも、想像の世界と現実の世界を見分けず、西洋世界に余りにも自らの理想を託そうとする町人学者江漢に対して一種の距離感や疎外感をさえ覚えざるを得なかったのである。

晩年の江漢が味わった孤独感は、まさに上述のように正統な蘭学者たちと町人学者江漢との間に生まれた感覚的な溝によるところが大きいと言える。しかし彼の老荘思想への回帰は、こうした正統な知識人世界との隔りだけによるものではなかった。もともと老荘思想という東洋的な情緒は江漢の絵画作品には一貫して出ていた。彼の浮世絵に安永初年に描かれた「見立莊子胡蝶の夢図」<sup>(47)</sup>というのがある。これは江漢が宋紫石の弟子になって南蘋派<sup>なんぴん</sup>を学び始めた頃の作であり、絵の内容は美人を莊子に見立てたものであった。若い時の作品に既に莊子に興味を示していたことを知る。その老荘思想の根が深かったにもかかわらず、老年になつてはじめて正面から自らの心の中の老荘を見つめたというのは、江漢の行動を強く縛りつけた当時の社会における西洋的指向が上層洋学者に対してだけでなく、町人学者の世界においても強力だったこと、西洋と東洋との対峙は、時に深層に沈んだり、時に表面に浮かびあがりたりするにせよ、絶えず当時の知識人の精神世界を貫く脈絡となったことを暗示している。これは明治の知識階級の和魂洋才的な生活態度の先駆ともなつたと言われているが、しかし江漢におけるこの所謂「和魂洋才」も一般に理解されているような東西思想の融合ではなく、精神世界に

における東洋的深層と西洋的表層との対流或いは対峙であった。

こうした江漢の精神構造は同時代において特例的なものではない。司馬江漢と親交があった本多利明（二七四四〜一八二一）も江戸の蘭学者と付き合いながら、独自の学問世界を開き、しかも西洋認識において江漢の構築した理想世界よりも、さらに密度の高い理想世界像を表面に持ち出していた。

「和漢西域のことをこた交<sup>まじ</sup>に、有の儘に其大概を誌<sup>(49)</sup>し」たと標榜する利明の『西域物語』においては、彼の和漢世界の深層から西洋の理想世界の表層に辿りつく軌跡を見ることができるといえる。江漢と同じように、利明もまず自らの「窮理学」を以て、理想的な西洋学問の世界への視野を開いていくのである。

窮理学と有、何といふとなれば、彼天地の学をいへり。是に聞<sup>クラ</sup>くては何一ツ分るはなく、其天地の学は何を以て入らんとならば、其最初は数理、推歩<sup>スイポ</sup>、測量の法より入人も近かるべし。是等を能透脱<sup>ヨクトウダツ</sup>の後、西域の学に入るべし。<sup>(50)</sup>

利明の論理では「窮理学」というのは、すなわち天地に関する学問であり、天地の学問に明るくないと、「窮理学」は成り立たない。しかもこの天地の学問への道は、西洋に優れている数学等の学問を通じてしか入れない。彼の西洋学の世界はただ天と地の存在を漠然



と感知するのではなく、厳密にそれを把握することによって初めて開いてくるのである。これは固有の学問に新たな理想的な「窮理学」の学問の方法を添加し、理想的な西洋の学問を以て、固有の学問を排斥するよりも、西洋の学問を学問世界の表層におき、固有のものをその深層に据えつけていく作業である。言い換えれば、西洋の学問と固有の学問の配列秩序を変えることによって、両者の共存と対峙を実現しようとしたのである。

こうした発想法は天地に関する学問の分野に止まらず、理想的な人間として西洋の人を捉えた場合にも、同じく見える。

故に人物も風情も遙に異也。人体目内瞳青く、白眼至て白く、眼も大きく、面体惣身色白く、鼻高く大也。人体大きく、遅し〔く〕剛勇なり。日本の人物と大に異相也。<sup>(51)</sup>

ここには西洋人が日本人と大いに異なるのは、ただ日本人と顔かたちが相違しているというだけでなく、「剛勇」の西洋人は日本人より一段と精神的にも優れている理想的な人間であるという含みがあると言える。利明が取り上げた「都爾格、魯西亞、意大利亞、仏良察、諳厄利亞、和蘭陀」等の西洋の「最隆の国」にもそういう価値判断の尺度を当てはめている。

右九ヶ国は欧羅巴洲の中の隆の国々也。何れも外国属国多くありて、大豊饒にして剛国也。<sup>(53)</sup>

海外に属国を多く所有し、富と力の両方を備えている西洋大国のイメージが鮮やかに出ている。その富と力の秘訣は海国として天文・地理の学問を盛んにして海を渡って貿易する他に、彼らには「武を用いて治る事をせず、只徳を用て治るのみ也」<sup>(54)</sup>という、司馬江漢が説いたのと同じ「治道」があった。そして「欧羅巴諸国の内より高德を選挙して帝位を継む。堯の舜を有莘の野より挙げたるに等し」<sup>(55)</sup>と、中国古代の理想政治像を彷彿させるような憧れを込めた西洋社会像を描き上げたのだった。懸命に西洋世界の実体を、想像絡みに掴まえようとする作者は、自ら「西洋諸君政務書」<sup>(56)</sup>とした『ヒストリイ』<sup>(57)</sup>という書物を通じて、さらに西洋世界に深入りして、感動すべき社会政治の理想像を見つけようとしたのである。

彼の国の風俗にて、他国の人に交るに、言語不通の国といへ共礼讓甚厚く、慎黙する内礼情を通ずるを旨とせり。況隣国の交睦く、王侯〔互〕に使幣を通るなり。王の使者至る時は、帝自ら出て対す。使者礼儀を述るに、両の手の掌を重て額上に捧ぐ。帝片手を延、掌を合て礼儀を述終る也。其始末を記したる書を、ヒストリイと題号あり。<sup>(58)</sup>



『ヒストリイ』という本は利明の時代から凡そ二百年前に書かれた西洋の歴史書である。十八世紀後半の西洋は決してこのような優雅な社会的な情景ばかりではなかった。西洋世界に相次いで起こったアメリカの独立戦争（一七七五〜八三）、フランス革命（一七八九〜九九）、英仏植民地戦争（一六八九〜一八一五）等に象徴されていたように、西洋は正に革命と戦争の坩堝<sup>くわぼ</sup>にあった。現実の西洋に無知な利明が描いた理想的で、礼儀正しい西洋像には、利明の脳裡にある固有の理想国像が色濃く投影していたと言える。理想的な西洋を求めようとする利明にとっては、前に出た舜時代の君子の世界が格好の手掛かりとなったのであろう。言うなれば利明のイメージの表層にある現実の西洋理想国像は、こうして自らの持っている東洋的理想国像という深層のイメージに強く支えられていたのだと言える。理想像を西洋に求めたからといって、直ちに東洋や自国の全般的な否定でもない。あくまでも世界における順位が問題である。

今の支那は国号を大清と云。清和源氏の末孫成故也。昔の支那と違ひ今は大国になり、本国の建州の北西より新長城を築き、夫より古の秦の長城に取附、他国の境界を立て、要害とせり。昔より見れば国土広大なる事倍増せり。南西は東京・交趾・占城に至り、東は朝鮮に至て皆領分也。曾日本のみ不属、海路僅

に二百五、六十里に過ず、小国たりといへども神武の垂訓に依て武道を失はず、故に今に至て他より侵し掠る事なし。誠に目出度風俗也。<sup>(59)</sup>

国土から言うとき清国は大国であり、それに対して日本は小国であるが、幸いに日本は清国の周辺の国々のように清の属国に成らなかつたと言う。しかしこの広大な国土を持つ清国でも、独立を保ってきた日本でも、文明的には西洋に後れを取っている。両国に必要なのは西洋を追いかけることである。

支那・日本いまだ国初以来、経暦年数西域に比すれば半にも至らず。西域は旧国なれば、世務国務能整たるなれば、西域の美成善成事を取て、我國の助とすること本意なれ。<sup>(60)</sup>

利明の考えでは、中国に文明が生まれたのは三千八百余年、日本の場合には千五百年余り、これに対して「西洋」で最初に文明化されたエジプトの場合は六千年以上とするのである。このような「旧国」に対し、中国も日本も「新国」である。「旧国」は文明の歴史が長いので、国を治める方策も整備されていたはずである。その善美のところを取り入れるのは当然なことだとする。

ところで利明は何ゆえにここまで西洋に理想国を夢見たのか。そ

れは利明も江漢と同じように、町人社会に生まれた知識人として、町人的な楽天的な気質によるところがあつたのかも知れないが、二人の西洋志向の背景には、当時の日本における飢餓と災害という社会的な悲惨の現実も無関係ではなかつたと思われる。二人に理想世界への接近を促したもう一つの原動力は、なによりもこの眼前の現実社会に対する深い憂慮にあつたのではないか。このような深層思想の躍動は江漢の『西遊日記』において既に指摘されており、利明の『西域物語』においても読み取ることができる。

寛政改革が始まつた天明七年（一七八七）に、日本中は大飢饉に見舞われていた。その最中に奥州旅行に出掛けていた利明は衝撃的で悲惨な見聞を『西域物語』に記している。

家内の様子を伺んと、勝手へ深く入て能見るに、男女共見分難き疲れ果たる人、六、七人にて、長炉の際に火にあたり居たり。余も渴を凌んと湯を乞ふて、夫に至り能見るに皆女也。年比も若かと見れば、又年寄にもみえ、人相更に猿の如し。皆疲れ果る有様、哀とも不便とも云べき様なし。<sup>(62)</sup>

疲れ果てて、男女老若とも見分けがたい人々を目の前にして、利明はただ「泪胸中に堪兼」「いわん言の葉もなく、扱々不便千万の次第哉<sup>(63)</sup>」と、胸に溢れ出た苦しみの思いや不憫な気持ちで一杯であ

つた。貧農たちの極端に悲惨な状態に対する利明のショックが如何に大きかつたかが分かるであろう。

### 大槻玄沢

大槻玄沢（一七五七―一八二七）、仙台の人で、少年の頃より医学を学び、ついで江戸において杉田玄白の門に入つて、和蘭医学を修め、長崎で蘭学の洗礼を受けた。こうして蘭学の二大先駆に導かれる知的環境に恵まれた玄沢は、医学から西洋世界に入り、オランダ語や西洋の地理、社会、人間全般に学問の視野を広げ、蘭学の振興に並々ならぬ功績を残した学者であるばかりでなく、狂歌や俳句をつくるうえでの戯作名を花篠種成・嘘風・半酔先醒などといったように、なかなかのしゃれっ気のある人間でもあつた。

寛政六年閏十一月十一日、当日は西洋暦一七九四年の元旦に当たる。この年三十八歳の大槻玄沢は、自宅芝蘭堂に社友を集めて、日本におけるはじめての太陽暦の正月を祝った。これがすなわちあの有名な「新元会」である。かつて出島ではオランダ人がこの正月の祝賀をニウヤールヘースト（新年の祝宴）と呼んで、祝つたが、その場合日本人の通詞などが招待されたぐらいであつて、私塾の芝蘭堂で日本人を中心に新年の祝宴を行うのは初めてのことであつた。この新年会を招集した主人公である玄沢の蘭学への熱意がその祝宴の言葉に出ている。

惟寛政甲寅閏十一月甲子及西学翻訳社友会于芝蘭堂、何為用、是日乃大西洋一千七百九十四年正月上日也何用其上日、今読其書肆其業於其穀旦者、祝斯業之大成也。<sup>(64)</sup>

(思うに、寛政六年十一月甲子の日に西学翻訳社友と芝蘭堂に会合、何の用という、この日はつまり大西洋千七百九十四年正月の初日である。この初日を何に使うかという、今このよい朝に西洋の本を読み、それを事業として進めている人々が、この事業の大成を祝うのである。)

とある。西学の翻訳に従事する同人たちを中心にして行われたこの会合は、言うならば日本における西洋学問の新紀元を世間に宣言しようとするものであった。これは蘭学の隆盛を象徴する一場面でもあった。十八世紀末頃に入ると、蘭学への動きは、医学から、言語、天文、地理、人間社会のすべてに亘って展開し、推し進められた。

玄沢は紛れもなくこの運動の中核を占める人間であった。オランダ人に対する間違った認識を持つ世間一般の常識を正す目的で書いた『蘭説弁惑』(一七九九年刊行)は玄沢の指導的立場や、また人々がオランダという国への知識欲が強まっている様相を端的に示している。

問ていはく。和蘭人は天質跟なしといひ、あるひは眼目も畜類のごとしといひ、或は彼の人長大なりといふ。実に然るや。

答ていはく。此妄説何によりて起れるや。彼人の眼中、此方の人とは頗る異なる故、畜類のごとしといやしめたるにや。大洲を異にする故か。欧邏巴地方の人は、我亜細亜の人とは色様稍異なるところあり。しかれども具有するものに何のかはりもなく、用をなす所にも、又少しのたがふ処なし。<sup>(65)</sup>

世の中の通説を一蹴して、正しいオランダ人像をつとめて作り出そうとしているのである。長崎遊学の結果を纏めた『蘭学階梯』<sup>(66)</sup>にも、玄沢の蘭学が当時の最先端に近づいた事実が示されている。

『蘭学階梯』は上下二巻によって構成し、上巻は蘭学の小史を著し、下巻はオランダ文字をはじめ、ごく初歩的な蘭字・蘭語を紹介したものである。ここに示された玄沢が世間に勧めようとする学問は「た畜に医事ノミナラズ、天文・地理・測量・暦算等ノ諸術ニモ、其法、其説、精詳・簡便・微妙ノ要論アルコト少カラズ」という幅広いもので、彼においては蘭学の講習は広く一般の人々の為に新しい世界の窓を開くことであり、「今万邦ノ美ヲ取ントナラバ、彼ノ書ヲ読ムニ如クハナシ。我方折ンデ其美ヲ取り得バ、天下ノ功益鮮少ナラザルベキナリ」と、中国に代わる万国の世界に通用できる知識源として、蘭学を位置づけているのである。<sup>(67)</sup>

丹波福知山城主で、同じ前野良沢の門に入りオランダ語を学んで、後に中国一辺倒の貨幣学や地理学を、新しいヨーロッパの学問を学ぶことによって改良変質させようとした朽木昌綱（二七五〇～一八〇二）、その昌綱が著した『蘭学階梯叙』は玄沢の『蘭学階梯』の刊行をつぎのように意味づけて評価している。つまり蘭学の習得は世界的視野を持つために有益で、「漢の張騫ちやうけん、西域に入り、元人、河源を窮めしがときは、僅かに葱嶺そうれい・崑崙こんろんにとどまるのみ。なほなほ利未亜・欧邏巴の大邦あるを知らざるなり。因りて思へらく和蘭人は万邦に通商し、必ず詳らかにする所あらんと」、中国人は西アジアまでの知識を持つにしても、アフリカ、ヨーロッパの存在を知らない。オランダ人は世界中に通商をし、必ず世界のことを知っているであろう。世界を知るには、蘭学の研究がまず必要だというのである。そして「乃ち蘭化先生に従ひて、その邦語を学び、日々にその諸編を読み、その諸図を観、大槻子煥あひせうと相切磋あひせつするに、天地人才、果たして支那の諸説じふやくに什百なり」と、前野蘭化先生についてオランダ語を習い、広く西洋の書籍や西洋の地図を研究し、大槻玄沢と交流しながら、何十倍も何百倍も中国の学説に優る西洋の天地人に関する学問を我がものにしたという。行間からも洋学者大槻玄沢と朽木昌綱とが互いに切磋琢磨し、西洋学問に没頭した真剣な顔が現れてくるかようである。これは西洋に広く知識を求め、真の世界を発見しようとする蘭学者たちの姿であった。<sup>(68)</sup>

蘭学者はオランダの学問に関心を持ちながらも、西洋全体に対する好奇心が強くなるにつれてオランダ以外の西洋の地理、社会、人間に対する関心が膨んでいった。西洋全般に対する学問的関心は在来の中国文明の絶対性への挑戦ともなった。もう一つの序文「蘭学階梯の首に題す」でも、「天地の大なる、覆載せざる所なく、日月の明なる、照耀せざる所なし。何ぞただ四大州方のみならん」と、中国中心の文明像を批判し、「普天率土、万邦一軌、人おのおのその間に生まれ、同じくその気を受く。人性、賢愚ひと齊ひとしからずといへども、四方おのおの聖人あらん<sup>(69)</sup>」と言うように、どこにも聖人がありうることを強調していた。こうした意識は十八世紀後期における知識人の洋学受容に一つの契機を準備したもののといつてよい。

中華文明の絶対性に対する反発は蘭学者に特有な行為ではなく、十八世紀後半期の知識界における一般的認識でもあった。当時儒学者の間にも「天下」「万国」についての再認識の機運が出来、中国中心の「華夷観」に対する批判の論調が頻発していたと言われる。世界地理認識の進展に伴って、今まで自分の視野に収めていない西洋の存在という事実を前にして、儒学者たちも合理的にそれを解釈しようとしていたのである。これは蘭学者の多くがそういった儒学的素養の強い人々から転身した事実にも裏付けられる。<sup>(70)</sup>

蘭学への関心はオランダ人の出現に伴って生まれ、間もなく西洋全体に対する好奇心や西洋という新しい世界の全体像に対する無限

の想像に変わっていく。しかし現実にはオランダ人以外の西洋人との接触が少ないために、西洋全体についてのイメージは幻のような部分が多い。ゆえに初期蘭学者の西洋像には、蘭学者の理想像を投影しかねない。同じ「蘭学階梯の首に題す」という文章には、「蘭書万冊、精詳比なし。大いに諸邦の文なきに異なり。蓋し<sup>けだ</sup>喁蘭は質にして野ならず、文にして史ならず。またかの文質彬彬たるならずや。欽和・彬蘭・史華・野邦、その言、実に誣<sup>ふ</sup>ならざるなり<sup>(7)</sup>」と理想国オランダを想定している。オランダの膨大な数の書籍は正確で詳しいものでこれと比べるものがない。他の文明のない国々とは完全に違う。オランダは実質を重んじても粗野に成らず、秩序を重んじて形式的にならない。正に文明の国である。礼儀の日本、文明のオランダ、形式の中国、野蛮なその他の諸国というふうに特徴づけても、その言葉はたしかにでたらめではない、という。オランダの文明を謳歌するかわりに中国を形式的な国と位置づけ、文明対野蛮の世界構図を中国の古典の運用を通じて作りだした。これは明治時代に流行った世界の各国の文明を開化、半開、野蛮と分類する発想の深層にまで伝わったのかも知れない。またここではオランダの国と学問を理想視しているだけでなく、蘭学者たちが持っていた中国的君子の理想像<sup>(72)</sup>を日本、オランダ、中国を含めた世界に当てはめているのが分かる。

『蘭学階梯』の続編として後に玄沢は『蘭訳梯航』（二一八六年）

という対話体の文章を著した。蘭医学以外の学問分野にも言及し、蘭学の社会的意味や西洋の全体像に迫ろうとしている。

サテ、天文・暦学ノ事ハ、西洋ホド精密ナルハナシ。故ニ、西實ノ漢地ニ入リテ、コレヲ伝ヘテ筆受セル崇禎以来星曆ノ訳書数十卷アリ。コレ等我邦ニモ将来シ、其法、的実便捷ナルヲ以テ、今時ハ西洋法ニ改曆アラセ給フトイフニテモ知ルベキナリ。其訳編ハ曆象考成前後篇ヲ始メ、数卷ヲ併セテ律曆淵源一大部ヲナス者ナリトイフ。コレ等ノ余、新巧ノ曆書モ帶來シテ、其原書ノ新訳モ漸々起ルベシト聞ケリ。<sup>(73)</sup>

天文、暦学と言えば西洋ほど精密なものがない。西洋人は中国に入って、これを中国に伝えた。そのような学問を記録した訳書は数十巻がある。日本にも将来した。その方法が実用的で便利であるために、今は西洋方式の暦に改めることさえ考えられているのである。『曆象考成』をはじめとするこのような訳書数巻は併せて『律曆淵源<sup>(74)</sup>』という西洋学術書としてまとめられ、我が国の暦学の源流を成した。さらに我が国に新しい暦書も入ってきて、それらの暦書の原書についての新訳も出来つつあると聞いているという。中国経由の西洋的天文、暦学が蘭学者の西洋認識に寄与し、蘭学の学問的価値を実証する材料になっている。また西洋世界地理の概説を紹介し、

地理学の中に含まれた西洋社会全般の情報に注目した。

又、輿地学ノゴトキハ、彼人四海ヲ航シテ、全地総界ヲ四大洲ニ分チ、其每一洲数百ノ国ヲ容ル、者、各州毎ニコレヲ詳究シテ、図説ヲ作り、古今精ニ精ヲ加ヘシモノ、本邦唐山ニ将来スルモノ多シ。其説ノ如キハ、両地ニ於テ略訳スル者アリ。職方外紀・増訳采覧異言等ナリ。コノ約説ヲ見ルガ如キモ、始テ其方位・遠近、土地ノ寒暄、治乱・興敗、政治ノ得失、坐ニシテコレヲ知ルニ至リシハ、皆彼ニ依レルナリ。<sup>(75)</sup>

西洋人は四海を航行し、この世界を四大洲に分け、各洲毎に数百の国を数えている。そしてその国々について詳しい研究を行う。その結果、彼らは地図を作り、古今の世界図の精密性を向上させた。その地図は我が国や中国にも多く取り入れられ、彼らの学説も両国の人によって略訳されている。『職方外紀』や『訂正増訳采覧異言』等がそれである。このような訳説があるために、われわれは座ったまま、世界各国の位置や距離及び土地、戦争の勝敗、政治の得失を知ることができるのだという。世界地理の中に、新しい学問に欠かれない豊富な各国の政治、軍事、社会にかかわる内容が入っていることを上げ、地理書を通じて、世界万国の歴史や人間生活を把握する姿勢を見せている。もともと中国伝統の学問観では輿地学は地理

ばかりでなく、歴史や人間社会にも眼を向けるものであった。こうした学問観は洋学者たちの西洋学問像にも、大きく作用したと思われる。しかし玄沢はいままでの中国経由の学問的集積に満足してはいなかった。

漸ク其全書ヲ読ムベキノ道モ開ケタレバ、未ダ漢人ノ知ラザル所モ、追年、我方ニ在テ分明ヲ得ルコトアルベシ。既ニ、地球ノ全図ハ、西刻数種ヲ集メ、校訂ヲナセル真正ノ大図、近口官刻銅板ニ成レリトイフ。<sup>(76)</sup>

漸く西洋の原書を全面的に読むことができれば、いままで中国人の知らない知識も、いずれわれわれが獲得することがあり得るであろう。現に地球全図については、西洋原版の地理書数種類を集めて校訂を施した真の大地図が近い内に官刻の銅板として出るという。玄沢の発想には中国伝来の西洋地理書を消化した上に、更に直接に西洋の書物に学び、世界地理の知識や世界図を一層精密にしようとした十九世紀前後の日本における知的目標を反映している。医学、天文、地理、人間社会の他に西洋学問のもう一つの側面は、やはり製造技術である。

自鳴鐘・千里鏡・眼鏡、諸種ノ製ハ、唐山ハ明季ニ伝ハリ、我

邦モ二百余年ノ昔ニ在テ始テ伝ヘタリ。今ニ在テハ一日モ闕クベカラザルモノナリ。爾來、漸々此方ニテ擬製シテ其用足レリトス。(中略) 近時、其真法ヲ彼書ニ得テ、城西官園ニ於テ始テ新製アリ。(中略) 從來、和製ニ成ル所ノモノハ其用ニ当ラズ。今真法ヲ以テ造レル物ハ、実ニ舶來ノ物ヲ欺ク。(中略) 尤、砲術・火器ハ元來彼ヨリ此ニ伝フル所ニシテ、軍備ノ一大要具ヲナストイフ。コレ亦、其造法精詳ノ書モ多シトナレバ、必ズ細密ノ事アルナルベシ。皆此千古未ダ曾テ発セザル所ニシテ、近來、此學開ケテ後、其國益タルモノコ、ニ取得シ所ノ実事タリ。<sup>(77)</sup>

時計、望遠鏡、眼鏡等の製品は中国では明の時代に既にある。我が日本にも二百年余前に初めて伝わってきた。今では、もはや一日も欠けてはならぬものとなっている。やがてこちらでも模倣品を造って使用に資するようになったのである。近頃、その真の製造法を蘭書において獲得し、日本においても新製品の製造を始めた。從來の和製のものは余り実用的ではなかったが、今真の製造法を得て造ったものはまことに舶來品と区別できない。もっとも砲術や火器も元來西洋より伝わったが、これらのものは軍備の重要な一部分をなしていると言える。これまたその製造に関する解説書は精密で詳細なものが多い。きつと参考になる部分がある。これらは殆どいまま

で発明されていないところである。こうした学問は、それが始められてから、実によく国益を増進した、という。西洋の製造技術が中国經由で日本に伝わり、その後、日本人はさらに西洋から技術関係の原書を手し、その原書に基づいて、模造し、新しい製品を開発して、ついに西洋の原産品と変わらない新しい製品を持つようになる。ここには近代日本における西洋文化移植の原型が見える。玄沢はそうした事実の社会的意味を広く人々に理解してもらおうとしていたのである。彼が指摘したいのは中国人の知らないことを知り、西洋人の造れるものを作り、西洋に近づき西洋を超えるということ、は国益に繋がる、ということである。これこそは玄沢が目指した蘭学というものの社会的価値であった。

しかし蘭学への認識が深くなればなるほど、蘭学者たちの西洋という実体の全体像に対する追究心や不安も日まじに強まってくる。そのような西洋が、文物の盛んな国として尊敬に値するものであると同時に、現実的に接触するとなると強力な敵の国にもなるからである。ロシアに次いで来航したイギリス船が、蘭学者たちに与えたインパクトはきわめて大きいものであった。西洋の実学よりも西洋の歴史地理、人間生活に対する関心が蘭学者の間に高まってゆき、ロシアやイギリスを中心とする新しい西洋像の構築はこうした蘭学者を「洋学者」に転身させる契機となったのである。玄沢の孫にあたる大槻如電は『磐水事略』において次のように玄沢の対外視線の



転移を描写している。

寛政中魯西亜國船の蝦夷地（今の北海道）に來りし事あり。これより外患始て起り魯西亜志（桂川月池）魯西亜本記（前野蘭化）等の譯述あり。其後六年文化紀元魯の使船一艘長崎に來り交通を求む幕府許さず。此船に仙臺領の漂流民四人を載せ返せり。警水は藩命を受けて魯國の風俗文物を問ひ、環海異聞十卷を撰りたり。<sup>(78)</sup>

前章にふれた通り、寛政四年（一七九二）にはロシア使節ラクスマンが伊勢の漂流民大黒屋光太夫を護送して根室に來航した。こうしたロシア船のその後の一連の動静は、日本人の対外危機感を一気に煽り、蘭学者にオランダを中心とする西洋認識を是正する好機を与えたのである。空前の外患意識が、多くの学者をして次々とロシア問題に視野を開かせた。林子平が『海国兵談』と『三国通覽図説』、本多利明が『西域物語』をそれぞれ著し、ロシアの歴史や地理及び社会を把握しようとし、当代一流の蘭学者である前野良沢と杉田玄白も『魯西亜本記略』や『野叟独語』を書いて、ロシア問題に対する詳細な分析と問題提起を試みようとした。後節に登場する地理学者山村才助（一七七〇～一八〇七）も『訂正増訳采覧異言』（一八〇二）に莫斯科未亜、魯西亜のことを取り上げ、さらにそれ

までのロシア関係のもので、質量ともにもっとも充実したと言える『魯西亜国志』を著したのである。

このようなロシアブームをその頂点に盛り上げたのは、漂流民たちのロシア見聞体験に基づく光太夫のロシア滞在記録『北槎聞略』が蘭学者桂川甫周の手によってまとめられたことである。さらに文化元年九月に、ロシア使節レザノフが長崎に漂流民を護送してきて通商を要求したが、この際も漂流民津太夫ら四名の見聞を筆録した『環海異聞』（一八〇七）が大槻玄沢によって多くの補足解説を加えられ、再編集されている。西洋人の著した書物の翻訳でなく、日本人の実際に見たロシアそして世界の国々の姿を報告するものとして読者に切実感をもって読まれたことであろう。

大槻玄沢の頭に描く世界というものは、『環海異聞』の序例附言に提示されている。

因ニ曰、此天地世界は自ラ四大洲に分ちたるものなり。遠西の人、四方に航海して此理を窮めしとそ。唐山にて明朝の末にいたり、西洋人内地に入りて其図説を示し、人始て知れりと見ゆ。其四大洲とは

一ニ曰 アジア 明人亜細亜又亜齊亜と音訳す。<sup>(79)</sup>

アジアの中身として西ではアラビア、ペルシア、インドア、東で



は中国、ダッタン、朝鮮女真、日本、琉球蝦夷等と一部の属島（ル  
スン・アマカハ・カラッハ・台湾等）をそれぞれ挙げている。

二つ目の洲はアフリカであり、そして三つ目の洲はヨーロッパで  
ある。ここではゼルマニア、ハラントア（オランダ）、フランス、  
イタリア、イスパニア、ポルトガル、リュシア（モスコビアともい  
う）、アングリ（イギリス）を並べて、特にイギリスがヨーロッパの  
大島であると注記されている、四つ目の洲はアメリカで、アメリカ  
の独立戦争を知らなかったために、ヨーロッパの属国が多いという  
認識に止まっている。

上述の四大洲に関する知識は玄沢の独特のものというよりも、当  
時のエリート社会の常識のようなものであった。そのような知識の  
由来について、

此四大洲の図説、明の末漢字に訳せる輿地全図などいふ物あり。  
又職方外記などいへる訳説の書中にも載せたり。又和蘭船本邦  
に齎し来る天地球并ニ大地総界の類、諸家に蔵する物多し。

〔官庫には大小天地球并ニ地球図説尤多しといふ。〕又近來世に  
流布する新製地球及世界図も皆此四大洲を分てるもの多し。是  
此度の漂流人は、初より彼二大洲（アジア、エウロッパ）の  
海陸を過ぎ、帰路は全く五大洲迄を経歴せり。実に大地世界数  
万里外四面の環海を一周して帰朝せる事なれば、預め此世界は

昔より四大洲に分てるを知る事、斯編を読むの先務とする所な  
れは茲に附記す。<sup>(80)</sup>

中国経由の世界地理書とオランダ経由の地理書によって、世界の  
イメージを捉えることができたが、そのような世界の存在を確認し  
たのは、ロシアから帰ってきた漂流民であったとする。本の知識に  
頼る世界的イメージに対する検証を求める玄沢等の洋学者にとって  
は、実際に西洋の地に足を運んで、遙かな海の彼方から漂流して帰  
国した人々の見聞には、大いに期待されるべきものがあつたのであ  
る。想像的世界から現実的世界に学問的関心を転換させたきっかけ  
は、こうした漂流民の体験談によって造りだされていたといえる。

こうして世界像の検証作業が続けているうちに、玄沢の視野に立  
ち並ぶ西洋世界の中心的な存在は、次第にオランダ国から、ロシア  
そしてイギリスへと切り換えられていった。特にロシアはどんな国  
として玄沢のイメージに映されていたのか。

此国右にいふ欧邏巴洲の西北にありし王国なり。百有年来彼土  
に賢主某なる人興りて諸邦を懐け、服従せしめ、其東北方亜細  
亞洲止白里（支那韃靼の北也）の諸大国共迄を併せ、其尽境カ  
ミシヤーツカに至る。従つて近時我東北蝦夷諸島にも其人来往  
す。（中略）もと其本国は尙万余里外の地なりしに、今は亜

細垂の尽境に至るまで本領とし、東北蝦夷の奥なる島々迄削略し併せ有つものもあれば、知らず識らず遂に近隣の国となり、我境界より海上十日をも経すして至るへき近地とはなれりとそ<sup>(81)</sup>。

玄沢にしてみると、ロシアは、ヨーロッパの一隅から、国土を広げて、領土の野心に燃えて膨張している国であり、そのような拡張の動きは既に、日本のすぐ近くにまで及んでいる。遠方の彼方にある国が今や危険な近隣国になった。これこそ危険な兆しであることは明らかである。しかし世の中ではこの兆しに無感覚な人々もいる。このような人々に対して玄沢は自らの世界認識を披露し、その新たな世界について何を知るべきかを提示したのである。

我方の人多くは、から朝せん天ちくなといふ名のみ聞知り、其しらする所に於ては間或は碩学宿儒といへとも弁する事を得ず。海外四辺別に許多の諸大洲国土ありて、列居する事をは知らざるも聞ゆ。凡常の人は固より恬然として是を省りミさる也。深く心あらん人々は異域外邦といへとも、務て其国情俗尚をは弁知せん事を講し置きたき事歟、常に海外諸国の方位土風地形の広狭肥瘠・海道里の遠近・氣候の寒温・物産の怪異・人類の多寡厚薄・政教の邪正・各土の治乱興亡・予め知て、不虞をまたは万金の謀とやいふへき。<sup>(82)</sup>

多くの人々は中国、朝鮮、天竺という国しか知らない。その他の国々については例えば碩学や儒者でも知らないことが多い。海外に多くの洲と国が存在し、並び立っていることすら知らない人もいると聞いている。凡そ人々が敢えてこの問題を反省しないからであらう。良心的な人であれば、異国他域とはいっても、努めてその国情や風俗を知る必要があると思う。常に諸外国の方位、風土、土地、その陸上、海上の距離、天気、物産、人口、政治宗教、歴史事情を予め知っておいて、いざという時に備えようとするところこそが、この上なく貴重なことといわなくてはならないと言う。玄沢の関心は各国の地理位置や気候条件や物産等に止まらず、人口や政治宗教、歴史等についても払われている。

漂流民の帰国は西洋世界の存在を実証したのみならず、西洋とはどういふものかを知るための手掛かりをも提供した。世界地理の予備知識を持っている蘭学者である玄沢にとつては、「地球の四面環海一周し驚濤九万里を凌ぎ、再我東方に帰朝せし」、現実の世界を實際に回ってきた漂流民の目撃証言は、悠々と開けつつある西洋という朦朧たる新しい天地に具体像と輪郭を与える最高の拠り所であった。これは「前代未聞未曾有の一大奇事」をなし遂げた漂流民たちのもたらした「上下古今剖判三千年來絶て無き所の奇話異聞」<sup>(83)</sup>に対する玄沢の感激が強烈なものであった理由である。

いふならば玄沢の感動を呼んだものは、漂流民津太夫らが伝えた西洋情報の深さと新しさにある。事実『環海異聞』の口述者である漂流民津太夫は、『北槎聞略』の口述者である漂流民光太夫よりはもっと広くて新しい世界の情報をもたらしている。『環海異聞』と『北槎聞略』に差異をもたらしたのは、漂流民の帰還経路である。

光太夫らが、陸路シベリアへ戻って、オホーツク港から帰朝したのに対し、津太夫らは、ペテルスブルグの外港クロンシュタットから、海路大西洋を航海、南米ブラジルに渡り、ホーン岬を廻って太平洋に出、マルケサス諸島、サンドウィッチ諸島をへて、カムチャツカに至り、改めて日本列島の南側を廻って長崎に入る。これは本当に世界一周巡航と言えるほど、充実した、四百三十日間（一八〇三年八月七日～翌年十月九日）の旅であった。旅の途中に、ナポレオン体制下のヨーロッパを廻って、漂流民たちが乗っているロシア艦ナデジダ号はイギリス艦から敵国フランスの船と誤認されて砲撃を受けた。ロシアのレザノフ使節は英艦の単純な謝罪に承知せず、漂流民たちを連れてイギリスの地に踏み、イギリスとロシアの交渉現場を漂流民たちに見せるという一幕もあった。漂流民らの体験談を通じて、玄沢は図らずも西洋国イギリスの存在を実感しないではいられなくなった。玄沢は思った。世界周航という事実は、まず紛れもなく日本人にとって、未知の世界を遠くから眺める時代がいよいよ終わりに近づいていることを意味している。海という媒体を通じ

てロシアが日本の近隣になれたのと同じように、イギリスも随時に日本の脅威になるのではないか。こうしてますます西洋の正体を知りたくなった蘭学者玄沢は、世界における日本という意識にも目覚め始め、漂流民の生き生きとした叙述の中から、新たな西洋映像や世界構図を見出そうとしたのである。これは後に玄沢の『捕影聞答』<sup>(84)</sup>前編（一八〇七）における対イギリスの問題意識をも孕んでいたと言えるのではなからうか。<sup>(85)</sup>

『捕影聞答』に見る玄沢のイギリスに対する詮索心は、西洋世界という未だはっきりしない影の存在を現実のものに還元しようとする衝動に駆られている。これは変動期における西洋の全体像を超えて、西洋各国の個性に意味を見出そうとする試みである。個として存在した西洋を把握することによって、再び日本という個の存在意味を見直したいというのが、洋学者玄沢の本音であろう。玄沢はイギリスという個を次のように捉えている。

総界全図を按ずるに、地は和蘭近傍に在り。即、欧羅巴大洲に係る一大島なり。其地三州に分る。「エンゲランド」「スコットランド」「イ、ルランド」といふ。然れども、惣名を「エンゲランド」といふ。我長崎を距ること、西海凡七千六十里余ありといふ。北極地五十一度より五十五度余に在り。氣候和適、土

地肥沃、諸穀・野菜を産し、海辺には魚塩の利あり。山谷には銀・錫・銅を出し、且良馬を産す。就中錫を最上とす。又毛織類は他国に勝れり。土俗、天性勇悍、最水戦に習ひ、常に善く舟を操る。且天文曆学を始め、學術諸芸を精究し、皆他邦の人に勝れり。亜墨利加等、他の三大洲中にも併せ有つ属国多し。是其約説なり。<sup>(86)</sup>

イギリスの国名や地理位置のほかに、氣候や物産、習俗を紹介したのみならず、天文曆学や諸学科の精巧さをも高く評価し、多くの属国をもっていることにも触れた。イギリスは、ただの国ではなく、世界的にも重要な存在だというイメージを浮き彫りにしているのである。

ところが、玄沢にとっては、イギリスはもはや、単に理想的な楽土ではなくなった。「魯西亜に次ぎて恐るべきは伊祇利須<sup>(87)</sup>」と声高く叫んだ『捕影聞答』の執筆は、日本人がロシアの脅威を強く感じ、イギリスの存在にも微かに不安を覚えはじめた時期にあった。ナポレオン戦争期にあたるヨーロッパについては、オランダ人の風説書もオランダ自国の利害関係に絡んで、オランダに代わってイギリスやフランスが中心となった様相を正確に日本人に伝えようとはしていない。日本人がアメリカの独立戦争の情報を知らなかったのも同じ理由による。こうして対外情報が不足していたにもかかわらず、

一部の国際感覚の鋭い日本人が断片的にでも西洋の変動に気がついたのかも知れないのである。玄沢は本の知識や伝聞に頼ってイギリスという国のことを、結局は想像混じりでしか描くことができなかったが、彼は何とかしてイギリスの正体を追究したかった。こうした心境が『捕影聞答』の成稿を誘い、イギリスへの興味深い疑問を次々と持ち出させたのである。したがって『捕影聞答』が提起した疑問なり、推測なりが的はずれであつたとしても、それを問難することはないのであろう。問題の対象国を正確に選んだだけでも、すでに玄沢の先駆性を表している。最初にイギリスという影の存在に新しい世界像を求めた玄沢によって、日本は十九世紀の世界に一步步近づいたのだともいえるのである。こうして西洋世界への探究を、影から真実に近づけようとする十九世紀初期の日本人は、その野心的目標を、順次にオランダからロシア、そしてロシアからイギリス等へと移していった。

#### 山村才助

大槻玄沢の孫に当たる和漢洋に通達した学者大槻如電（一八四五～一九三二）はその著書『新撰洋学年表』の一八〇七年（文化四年）の項目において、次のように山村才助（二七七〇～一八〇七）のことを記している。

土浦藩士山村才助は奉命訳書の功を以て幕府の直臣に挙げられんとせしに会病て死す時人惜之

才助は采覧異言増訳の余力広く萬国の地略風俗に精通せしかば幕府の命を受けて魯西亜誌印度志等の著訳あり此人幼より文才あり児戯毎に柳葉を集て文字を作れり既に長し大槻の門に学ひ著書訳書多し性談諧にて往々人の笑怒を招く曾て同藩豊田某が好事の余り刀に横文字かきてよと乞ふ才助一揮して与ふ某意氣揚々これを帶ふ蘭字を知る者あり一読大笑して曰く豊田藤馬大馬鹿野郎と某佛然たれどせん方なくて其儘止むと。<sup>(88)</sup>

藩士山村才助は、新井白石の『采覧異言』を増訂し、幕府のためにロシアやインドの地理書を訳した功績ある学者である。文才に富み、幼い頃から好学の人で、後に大槻玄沢の門に入り多くの著訳書を残すと同時に、一方では個性が強く、同藩の横文字の分からない連中に悪戯をしたりする人でもあったといい、同時代の多くの人は、才氣ある才助が若年にして病気で亡くなったことを惜しんだという。

前野良沢らが『解体新書』翻訳の稿を起こした年（二七七年）の前年に江戸土浦藩邸に生まれ、三十八歳で生涯を終えた山村才助は、幼少にして『大学章句序』全文を写したと伝えられ、二十歳で大槻玄沢の門に入り、杉田玄白や前野良沢のような老大家にも時々教えを請う機会を持つに至った幸運な男であった。彼はその三十八

年の短い一生の間になした一連の学問的著作によって近代日本地理学の先駆に数えられている。三十二歳で『訂正四十二国人物図説』と『西洋雜記』を著し、三十四歳には『大西要録』と『東西紀遊』を訳し、次いで『訂正増訳采覧異言』が成った。徳川後期の西洋地理や西洋歴史の研究を当時として行けるところまでに押し進め、質量ともに優れた開拓的な研究を残したのである。

才助の学問的な成長は徳川後期、老中松平定信が所謂「寛政改革」（二七八七〜九三）を行った時代に実ったものであった。田沼時代に続き、天明の飢饉による幕藩制の動揺を挽回するために、享保改革を理想に財政再建と農村復興をはかった定信は、この政治改革において経済的に都市の町人に対する抑商的措置を取っただけでなく、文化的にも風俗や出版方面に取締りを行い、特に学問においては徂徠学や折衷学派を抑えて、朱子学を正統的学問としてその位置を高めようとした。その延長として幕府は後に聖堂を官立の昌平坂学問所（一七九七）と定め、幕吏登用の試験を朱子学に限定した。

この「寛政異学の禁」は、幕府による学問の支配を強化し、諸藩の異学に対する態度に大きく影響したと見る意見もあるが、実際には単に内外情勢に左右されたもので、実質的な効果を上げたとは言えなかった。

ここでのいう内外の情勢とは、十八世紀以来の日本が置かれた国内的、国際的な環境の変遷を指す。十八世紀の初めにロシアが南下し

て日本との交通を望むようになった。田沼時代になると、北方問題に関心を寄せ続けてきた江戸後期の知識人たちは、ロシア人の蝦夷地進出に脅威を感じるとともに、海国として対外的に経済進出を行うことにも意欲を持ち始めていたのである。林子平の『三国通覧図説』『海国兵談』、さらに本多利明の『蝦夷拾遺』『西域物語』『経世秘策』等の著書がまさに、上述のような知識人の心理的な軌跡を示していた。

一七九二年（寛政四年）に、ロシアの使節ラクスマンが通商を求めて根室に來た。定信は祖法を守るために相手の要求を退ける気構えを示したが、実際の定信の心中はそう単純なものではなかった。

前にも触れた通り、後に彼は『秘録大要』（文化五年）を著し、北からの危機によって世界認識を微妙にあらためざるをえなかったことを漏らし、対外問題の処理という幕府にとっても初めての課題に直面しなければならなかった事情を認めている。定信に言わせれば、西洋の学問は技術的なものに限れば特に朱子学に対立するものではなかった。このような考え方は幕府一般のものでもあったろう。定信が隠退後に完成した寛政暦は高橋至時（二七六四―一八〇四）や間重富（二七五六―一八一六）などの幕府の天文方によって作られたものである。現在の地図と比べても殆ど劣るところがないと言う『大日本沿海輿地全図』の制作（一八〇〇年に始まる）をなし遂げた伊能忠敬（一七四五―一八一八）も、至時の門人で、しかも幕府の

役人という資格を持っていた。まして本木良永の門人志筑忠雄（一七六〇―一八〇六）が『曆象新書』（一八〇二年）を著し、西欧の地動説・星雲説に比すべき研究をなしえたのもこうした同時代の雰囲気があったことであろう。

しかし山村才助を徳川後期の世界地理研究の頂点に立たせたのは、幕末の為政者たちの天文・地理等の技術研究に対する寛容度ばかりではなく、西川如見や新井白石などの先学の業績と、蘭学の旗手の一人であり、才助の恩師にあたる大槻玄沢の誘導、さらに同時代の諸学者との論争や交流が幸いしていたことはいうまでもない。そしてもっとも重要なのは、才助自身の学問的な勇氣と胆力である。

先に述べた通り、才助は西川如見の『四十二国人物図説』と新井白石の『采覧異言』を選び、それを訂正と増補という形で乗り越えることによって、自らの新しい学問体系を作り上げたのである。もともと西川如見と新井白石は、徳川時代の世界地理研究の開拓者であり、その出発点であった。両者を超越することは決して簡単なことではない。才助がその学問の突破口をこの二者に置くことを躊躇<sup>ためら</sup>わなかったことだけでも、多大な勇氣を要するものであった。

長崎生まれの西川如見（二六四八―一七二四）は、寛文の頃儒学を学び、以来、中国から伝わった天文、地理、暦数、気象の諸学をもとに、先輩の諸説及び外国の諸説を合わせて、天地人に関する独自の学問的探究をした。その代表的な成果として、『華夷通商考』

（元禄八年、一六九五年京都にて刊行）をあげることができる。これは「鎖国」日本にもっとも早く海外の事情を紹介したものであった。上・下二巻で、上巻は「中華十五省之説」の解説であり、その内容は各省の道路里程、方向、土産、風俗にわたる。下巻は「外国」の項目において朝鮮、琉球、大宛、交趾、東京を記し、「外夷」の項目において占城チャム、柬埔寨カンボジア、太泥タニ、六甲ロウカフ、暹羅シヤム、オランダ等三十一カ国の地誌を記している。その後宝永年間に、中国在留宣教師アレニ（艾儒略）が著した『職方外紀』と長崎に集められたあらゆる資料とをもとにして同書の増補版を作った。国際都市長崎という当代唯一の海外貿易港に流入した新知識は如見の著作に十分に生かされたのである。したがってその後の世界地理研究において、『華夷通商考』は「江戸時代にかりそめにも世界の地理を論ずるもの」として、最も重要な参考書の一つ<sup>(90)</sup>と数えられるものになった。一方如見の『四十二国人物図』（享保五年、一七二〇年）二巻は世界の諸人種を南米の土人に至るまでこれを図して注解した著作である。いうならば後者は『華夷通商考』に書かれた世界知識を踏まえて、紅毛から伝わった人物図を写し、世界万国の人々の実像に迫ろうとしたものであった。図の説明として、その人物の住む国の方位、気候、人物の性情等も簡単に記されている。同書ではさらに「渾地五大州」という項目で亜細亜、利未亜、欧羅巴、亜墨利加（南州、北州）、墨瓦臘尼加（メガラニカ）というマテオ・リッチ流の世界像を取り上げ

て、その方位等を記している。外の世界の人間に対する西川の興味深い探索は、江戸時代の日本人による初めての人種学的な試みだったと言われる。この人物図が同時代日本人の西洋映像や世界イメージに与えた影響は計りしれないものがあつたろう。

さらに同書に添えられた劉善總の序文には、「凡そ異国の名を聞く者は必ず詳にその俗の好む所、いかんと言う事を聞かなければならない。そうして、その善きものはこれを記し、我が身の法となし、苟もその悪きはわが身の戒めとすべきである<sup>(91)</sup>」という解説が載せられている。これはつまり中華の天下からぬけでもっと広い世界に眼を配り始めた日本人が、早くも夷国の人間について、彼らになにか学ぶべきものはないかと、単なる好奇心以上に強い関心と願望を持ち始めたことを示すものであった。

才助は新井白石の『采覧異言』を訂正・増訳した。新井白石は、前章で詳しく見てきた通り、中国経由の世界地理知識とオランダ人等の西洋人から直接取り入れた世界地理知識を纏めて『采覧異言』を書き、さらにイタリア人シドッチに尋問した経緯を記録して『西洋紀聞』を著した人であった。西川如見の『華夷通商考』は、基本的に中国流の世界像に基づくものだったが、新井白石は、西洋人から聞いた知識を以て、中国由来の固定観念を検証したり、批判したのであり、日本人自身による新しい世界的視野の確立を初めて実現した人物と言える。才助が世界地理分野ののりこえるべき相手を新



井白石の『采覧異言』に決め、人種知識に関するライバルを西川如見の『四十二国人物図説』に定めたのも、まさにこの二人の先輩学者が達成した学問の画期性によるものであったろう。

そもそも、才助がこのように先駆者の事業を批判しながらも、基本的には継承していくという姿勢をとったのは、恩師の指導によるところも大きかった。最初に『訂正四十二国人物図説』の作成を才助に提案した大槻玄沢は、同書の序（二八〇）で、才助に『訂正四十二国人物図説』を命じた経緯を次のように述べている。

門人山村子明は幼より地理の書を嗜み、余に従って、西学を習うこと、年あり。従来その坤輿大地の諸説を、彼の書中より訳定する著撰、頗る多し。余、よって生に命じて、この図説を考正せしむ。<sup>92</sup>

つまり大槻玄沢は、門人山村才助の新しい世界地理研究を信頼していたからこそ、その訂正増補の任を托したというのである。言い換えれば玄沢は才助の地理学的造詣が過去の名著を批判したり、訂正したりするところまで成長していると判断していたのである。そして恩師に厚く信頼されていた才助は、事実見事にそれを達成し、原作に立派な増補や訂正を施した。意太里亜の条为例にとり、原作と才助の訂正本を比較して、才助が如見の原作にどれ程の手を加え

たかを見ることにしよう。如見の原著には、

意太里亜、以西把尼亞、此二国欧羅巴の門にて、大国也。四季ありという。意太里亜の都を羅馬といえり。一国なり。いずれも邪法国也と聞伝う。

「イタリア、イスパニア、この両国はヨーロッパの国で、大国である。一年中四季があるという。イタリアの首都はローマと言う。その都自体が一つの国ともなっている。いずれも邪法の国と言われている」とあるが、才助の訂正本では、

意太里亜国、別名「ワルセ・ランド」ト云フ。欧羅巴洲中ノ大国ニシテ、其西北ノ牙而白ト云ル大山ヲ以テ入爾瑪尼亞・赫爾勿婁亞・払郎察等ノ諸国ト界ヲ分チ、其地ハ皆地中海ニ臨メリ。此地、氣候極テ融和ニ、土地甚豊饒、物産殷富ニシテ国用一ツモ欠クコトナシ。故ニ称シテ天下ノ楽土ト云フ。土人ハ天性靈慧ニシテ、星曆・音楽・画図・諸技ニ精シク、其他土木造建・百工器械ニ至ルマデ、皆其巧妙、他国ニ勝レリト云。  
（イタリア国は別名「ワルセ・ランド」と言う。ヨーロッパ洲のなかの大国である。その西北にはアルプスという大きな山があり、それがドイツやスイス、フランス等の諸国と境界を分かち、その地は

皆地中海に臨んでいる。この地方は、氣候が極めて融和であり、土地が甚だ豊穡である。物産が豊富で国用に何一つ欠くことがない。故にここを天下の樂土と言う。住民は生まれつき、聡明と知恵をそなえ、天文学、音楽、繪圖、諸般技術に詳しい。その他、土木建造・百工機械に至るまで、その巧妙さは皆他国に勝るといふ。

となっている。ここでは才助はイタリア国やその周辺の諸地を地理的により正確にとらえて、如見の原作をはるかにこえる地誌の体系へぐっと近づいていたと言え<sup>(93)</sup>るが、さらにイタリアの氣候と物産、そして文化についても触れ、自然に恵まれ、人々に持ち前の聡明さがあり、諸学問や技術も他国にずっと優れているイタリアを、ある種の憧れを込めて高く評価していたのである。

『訂正四十二国人物図説』は、しかしながら才助の生きている間は大槻家の本箱に眠ったままで公刊されることなかった。嘉永七年（一八五四）になって、永田南溪という人物がこの『訂正四十二国人物図説』を種本とし、少し手入れをした上で、『海外人物輯』という表題に直して、出版したという。<sup>(94)</sup>半世紀の長い歳月を経て才助の本がようやく他人の手によって世に出たのは、才助の世界地理が如何に時代を先取りしていたかを物語ってもいよう。

『訂正増訳采覧異言』の制作（二八〇二）は、才助の世界地理に対する造詣の深さをさらに余すところなく示している。才助の活躍

した時代において、白石の『采覧異言』は、世界地理に関心のある学者にとつて無視できないものであ<sup>(95)</sup>ったが、才助はそのような全国的に知られた名著を増補し訂正しようとしたのである。これを実行するには、白石の世界地理学を乗り越えるだけの実力が要求されるが、これはまさに幕末の世界地理学をリードした才助にしかできない仕事であった。

新井白石の『采覧異言』（二七一三年成）は徳川時代の最初の世界地理書である。漢文体を用いて、五大洲の輪郭を描き、世界の地理・歴史・政治・産物・風俗・宗教などを限られた資料を駆使して、十二分に記述説明し、当時の日本人の世界像を知る上からも極めて興味深い著作である。これに対して才助は、『訂正増訳采覧異言』において、白石の書に大幅な増訳を加え、訂正して、独立の著書と言ってもよいほどの内容に発展させた。同書の「引用書目」によると、訂正増訳に使われた参考書は西洋書三二種、漢籍四二種、そして日本の書籍は五二種に達するという。才助はこうした数多くの参考書を使って、案文をつけたリ、白石の誤りを訂正するだけでなく、新しい解説を加えることさえしている。

才助は同書の完成に際して、『采覧異言』を増訳・訂正しようとしたきっかけと、それを可能にした条件とを次のように述べている。

宝永中ニ白石源公明旨ヲ奉ジテ邏馬<sup>ロオマ</sup>ノ人ニ接シ、尔後正徳年間

来貢ノ和蘭人ニ逢ヒテ官庫從來所蔵ノ和蘭ノ「ヨハンブラア」ト云人所撰ノ輿地全圖ヲ以テ、コレニ示シテ、其方俗ヲ問ヒ、私録スル所アリ。(中略) 最後明ノ萬曆中ニ所刊ノ萬國全圖ヲ訂正シテ、采覧異言ヲ撰スト云。(中略) 其該博典實遠ク明圖の比ニ非ズ。然レドモ、惜カナ、四大洲中有名ノ大國尚遺漏スルコト少カラズ、或ハ唯其方境所在ヲ記スノミニシテ、其國事ニ及バザル者アリ。コレ當時邏馬<sup>ロイヤ</sup>ノ人其圖ノ記セル和蘭ノ文辭ニ通セス、公モ亦異方殊言ヲ解セズシテ、全ク傳譯スルコトヲ得ズ、且對話ノ和蘭人ハ使期促迫ナレバ、亦詳ニ其説ヲ告グルノ暇ナキノミ。宜ナリ、其精審ヲ得ザルコト。然レドモ、公ノ學識卓絶ニシテ、倭漢古今ノ事實ヲ詳究スルノ餘リ、遙カニ海外ノ事ニ及ブ、其宏量遠大ニシテ、廣ク訪ヒ、遠ク求ルノ懇到ナルニ非ズンバ、當時ニシテ何ゾ此撰アラシヤ。<sup>(96)</sup>

すなわち、白石は優れた学識を以て西洋の学説や和漢古今の学問を総合し、日本最初の世界地理研究の大事業をなし遂げた。それは明の世界図にはるかに勝るものであったが、しかし、四大洲のなかの有名な大國も尚遺漏することが少なくないうえに、またその方位の所在を記すのみで、其の国事に及ばないものもあるとされる。さすがの白石も当時オランダ語に通じていなかったし、せつかくのオランダ商館員との対話も時間的に限られていたので詳細な説明を聞

くことができなかった、と指摘している。

白石は明代中国から伝来した世界地理の知識を一挙に乗り越え、徳川中期日本における世界地理学を確立させた。だがその記述には不備や不正確な箇所が多いし、地理と社会・国家との関連にまで視野が及んでいないという欠点がある。それは十九世紀という新しい時代の需要を満たすものではなかった。さらに白石の時代においては、まだ西洋文献の原語が読めないもので、西洋の世界地理学について完全な理解はあり得なかった。一方才助は直接に西洋の言語が読めたおかげで、白石を乗り越え、より精密度の高い世界地理学の形成を可能にすることができたのである。才助の得意と自信に満ちた口調から、十九世紀初期における蘭学の著しい進展のなかで、大槻玄沢に教わってオランダ語をものにした一人の蘭学者の知的な興奮をさえ窺うことができる。また、そこからは、中国のみならず西洋も日本人に対して学問の扉を開いたことへの感謝の気持ちがいひしと伝わってくる。蘭学の学問的訓練を経た才助にとって、新井白石の不備を補うことは、一時の興奮ではなく、かねてからの夢の実現でもあった。

昌永幼ヨリ輿地紀載ノ書ヲ好ム。嘗テ異言ヲ讀テ、其諸説ノ宏博ニシテ聞ヲ新ニスルコト多キヲ感ズ。但其紀事未ダ備ハラザルコトヲ惜ム、且此書開彫刊本ナク、數數傳寫ヲ經テ、魚魯亥

豕ノ誤亦多シ。恒ニコレヲ校正増補スルノ心アリ。<sup>(97)</sup>

幼い頃から地理の学問を好んで、白石らの世界地理に導かれるうちに、その不備を改めようとする気持ちが自然に生まれてきたという。

さらにその手入れの巧みさも並々ならぬものであった。

故ニ數本ヲ得テ、コレヲ校定シ、其文義ニ於テハ稍其訛字ヲ訂正ス。(中略)諸ノ西書ニ因テ、異言所載ヲ校考シ、遂ニ私説ヲナシテ、コレヲ其下ニ記シ。<sup>マ</sup>又彼邦所刊ノ「ゼエ・アトラス」「コウラント・トルコ」二書所載ノ畧説ヲ譯シテ、各國ノ下附シ、又天明中ニ月池桂川君所謂官庫諸藏ノ西圖ノ傍ニ載スル各地畧説ノ譯言アリ(中略)、コレト參勘シ其他諸書見ニ随テ、考鏡スルニ足ル者アレバ亦コレヲ次ニ附譯シ……<sup>(98)</sup>

さまざまな参考書を手元において、白石の『采覧異言』を訂正したのみならず、さらに自らの「私説」をも付け加えたという。『采覧異言』の記述と『訂正増訳采覧異言』の記述を具体的に比較し、才助の増訳訂正部及びその「私説」を読んでみれば、才助の工夫が分かる。例えばヨーロッパの地理について、『采覧異言』では、

参之西図及邏馬和蘭人等説、是州東南諸国在大乃河墨何的湖外者、大小凡三十余、臥蘭的亜亦在北海之北、明人之説頗為不合。<sup>(99)</sup>

「西洋の地図及びローマやオランダ人等の説を参考にして分かるのは、この洲の東南諸国が大乃河(タナイス)、墨何的湖(オランダ語のメオチセ・メルまたはメオチセ・ゼエ)の外側にあって、大小合わせて凡そ三十余ということである。臥蘭的亜もまた北海の北にある。明の人(マテオ・リッチ)の諸説は、余り適合しない」と記述している。これに対して、才助は、

昌永按ニ、此説然ラズ、此書ノ下ニ所載ヲ合セ考ルニ、如德亜・<sup>ジュデア</sup>亜臘皮亜等ノ諸國ヲ以テ皆歐羅巴ノ部ナリトス。故ニ大乃河・墨何的湖・外ニ三十余国ト云ナリ。然レドモ今詳ニ諸西書所載ヲ考ルニ、大乃河・墨何的湖、皆歐羅巴ト亜細亞トノ界ニシテ、如德亜・亜臘皮亜ハ、皆其地亜細亞ニ属スルコト甚明ナリ。然ルトキハ、此ニ利氏ガ圖説ヲ以テ是トスベシ。又此ニ云和蘭鏤版ノ圖、官庫所藏ノ者月池桂川君詳ニコレヲ譯ス、其説ニモ又大乃河・墨何的湖ハ、亜細亞・歐羅巴ノ界ナリト記セリ。然ルトキハ上ノ原文西圖ヲ誤リ閱スル者ナルコト愈明ナリ。<sup>(100)</sup>

と、上記の白石の記述の誤りを指摘し、訂正したのである。すなわ

ち、白石は蘭鐮版の万国全図を読み間違つて、マテオ・リッチのこの箇所の説が正しくないというのに対して、万国全図を正確に読めば、リッチの説が正しいことになる<sup>(10)</sup>と強調した。さらに才助は、大乃河の西語は「タナイス」であり、墨何的湖は、オランダ語のメオチセ・メルまたはメオチセ・ゼエであり、臥蘭的亜の西語はグルウランドであると指摘する。才助は白石の誤りを指摘するに止まらず、さらに自らの新しい説をもそこに付け加える。例えば、同じ『采覧異言』の一節にこうある。

又図説云、歐羅巴洲有三十余国、諸国共一総王非世及者也、国之王子中常推一賢者<sup>(11)</sup>為之。

「またマテオ・リッチの図説によると、ヨーロッパに三十余りの国があり、諸国は一人共通の王を持ち、しかも世襲で王位を継承するのではなく、諸国の王子のなかから一人の賢い方を推し王となすのである」という白石の叙述に対して、才助は、次のように批判して新しい解釈を打ち出している。

圖説ヲ按ニ此諸國以下ノ二十三字ハ、入<sup>ゼル</sup>馬<sup>マニア</sup>泥<sup>ニア</sup>亜<sup>ニア</sup>國ノ下ニ所注ニシテ、歐羅巴總洲ノコトヲ云ニ非ス、此書ノ下ノ入<sup>ゼル</sup>馬<sup>マニア</sup>泥<sup>ニア</sup>亜ノ條ニ、羅馬人説其與國七國トアル者亦コレヲ謂フナリ、又艾

氏圖説<sup>ア</sup>亞<sup>マニア</sup>勃<sup>マニア</sup>瑪<sup>マニア</sup>泥<sup>マニア</sup>亜<sup>マニア</sup>の條ニモ、七大屬國ノ語アリ、則コレ入<sup>ゼル</sup>馬<sup>マニア</sup>泥<sup>マニア</sup>亜<sup>マニア</sup>ノ帝ノ輔政七官ノ諸侯ナリ、彼此合考レバ、原文ニ也ニ作ル者ハ誤字ニシテ、此諸國以下ノ二十三字ハ、歐羅巴總洲ノ事ニ係ラザル事明ナリ。亞<sup>マニア</sup>勃<sup>マニア</sup>瑪<sup>マニア</sup>泥<sup>マニア</sup>亜<sup>マニア</sup>ハ入<sup>ゼル</sup>馬<sup>マニア</sup>泥<sup>マニア</sup>亜<sup>マニア</sup>國ノ別名ナリ、下ニコレヲ詳ニス<sup>(12)</sup>。

つまり才助はヨーロッパ諸国が一人の王を共有するという白石の説について、それは入<sup>ゼル</sup>馬<sup>マニア</sup>泥<sup>マニア</sup>亜<sup>マニア</sup>國（ゼルマニア、ドイツの事）の条をいうもので、ヨーロッパ全体のことをいうのではないと正した。こうして才助はあらゆる角度から白石の『采覧異言』に増訳と訂正を加え、十九世紀初期における最高水準の世界地理知識を披露し、かつて徳川前期における世界地理の到達点を代表した白石の学問を受け継ぎながらも乗り越えていく。

才助が新しい世界地理学の先頭に立つまでの道程については、杉田玄白がその『蘭学事始』において次のように言及している。

土浦侯の藩士に山村才助といふ一奇士あり。その叔父市川小左衛門を介として翁に蘭学のことを問ふ。翁、そのころは年若い、この業を以て悉く門人玄沢に寄托す。故にこの男も同人に入門せしむ。玄沢かの国文二十五字より教へ立てたり。天性その才備はり、殊に地（理）学をこのみ、専らその筋を専精せし

が、白石先生の采覧異言を増訳重訂して十三巻の書を訳撰す。栗山先生の推挙によりて官へも内献せり。その余、翻訳の内旨も奉じたりしが、その業も全からずして、即世せり。惜しむべしといふべし。万国輿地の諸説は未だ漢人の知らざるところのもの多し。これ蘭学のここに至れるの初なり。<sup>(10)</sup>

玄白が才助に与えた評価はこの「一奇士」に尽きるといえる。その「奇」たるところはつまり三十代の若さで徳川後期の世界地理学を頂上に押し上げたことであろう。日本における「万国輿地」の学問を中国の達しえなかった境地にまで至らしめたのは、まさにこの「一奇士」の奮闘によるのである。杉田玄白に託されて才助に蘭学の手引きをした大槻玄沢が『訂正増訳采覧異言』のために序を与え、弟子のなかでも特に才助の世界地理学の高い造詣に対して、一種の自慢と満足の情を隠さなかったのは、ゆえなしとしない。序にいう。

獨若山村子明、夙耽群籍、純志于渾輿之学、(中略)最竭力於西洋輿地之諸書、頃有増訂采覧異言之撰、全部十二卷示余、請之斧正。取而讀之、其說精詳明備、増續重訂之功、盡白石先生所未能盡。<sup>(11)</sup>

(二人山村子明は広く本を読み、専ら地理の学問を志し、西洋の地理学に力を入れた。彼は増訳、訂正した「采覧異言」全部

十二巻を以て教示を求めてきたが、読んでみると、その記述は精しさが分かった。これは白石先生の尽くさないところを尽くしたものといえる。)

玄白にしても玄沢にしても、才助との関係を文章に表わしたのは、まさに才助という優秀な弟子がなし遂げた仕事で、量的に白石の原著の約十倍に達しただけでなく、質的にも、はるかに白石の世界地理知識をこえていたからであろう。いうならば二人の蘭学の大家を自慢させる力が才助の『訂正増訳采覧異言』にはあったということである。

才助には蘭学の二大巨峰に支えられて『訂正増訳采覧異言』の著作に取り組むという優れた学問環境があったが、しかしそれだけでは新井白石をこえるような世界地理学を確立することはできなかったろう。老大家の慧眼を裏切らないほどの学問的な見識と才能をも十二分に備えていたからこそ、才助の生涯の大事業の成功を保証するものであった。

才助は自らのその徳川後期における世界地理学の傑作を、まず恩師大槻玄沢に捧げた。その第一巻には「磐水大槻先生閱 江都山村昌永子明著」とした。玄沢は前に触れたように序文を記して、才助の大成を喜んでゐた。さらに蘭学の同人杉田紫石が「後之読此書者、或取而為備不虞之要典、則子明之績、千載不朽也」<sup>(12)</sup>(後にこの本を読

むものは、或いはこれを取って虞れない要典に備えることができれば、すなわち子明の業績が、永遠に消えないこととなる」という序文を記し、才助の成果を絶賛した。また同じ杉田紫石の推薦で、才助は当時の漢学の大家柴野栗山<sup>(17)</sup>（一七三六—一八〇七）にこの大著を引っ提げて面会し、本書を官に進呈した。栗山は『訂正増訳采覧異言』を奇とし、官に請うて、それを天下の図籍の補いにすると述べ、才助の世界地理の学問的価値を公式に認めた。徳川日本における世界地理の総決算をなしたとげた才助は、これによって、世人の賞賛と官の是認を一身に受け、蘭学者としての学問的地位を不動のものにしたのである。

しかし、このように高く評価されたにもかかわらず、『訂正増訳采覧異言』は今日に至るまで、大槻家や官の書庫に閉じ込められ、写本として読まれることはあっても、公刊されることは一度もなかった。時代の子として生まれた新しい世界地理学者である才助は、瞬く間に過去の時代の人になってしまったのか。それとも才助が不幸にも若い年で夭折したためか。原因は未だに定かではない。但し一つははっきりと言えるのは、疑う余地なく才助の著作は、徳川末期日本における世界地理学の最高傑作だったということ、そして才助の次の世代には、その影響を受けた世界地理学者が少なくなかったということである。われわれは才助以後の世界地理学研究から、幕末日本のこの学問の基礎をなし、次の世代の研究の更なる発展のな

かに活かされていった未刊のままの『訂正増訳采覧異言』の余響を見出すことができる。

例えば比較的早く『訂正増訳采覧異言』を自分の研究に取り込んだ一人として、徳川後期の幕臣で北方探検家の近藤重蔵（二七七一—一八二九）が挙げられる。重蔵は、北方諸島への探検を以て世に知られているが、彼が編集した『外蕃通書』（一八〇八—一八一九年の間に成書）は、才助の世界地理研究をしばしば参照している。その第二十四冊の「<sup>アマカワ</sup>亜瑪港書一」の条に『新印度志』とあるのは、才助が幕命によって訳した『印度志』（一八〇六）にはかならなかった。もちろん、この『外蕃通書』にも『訂正増訳采覧異言』は大いに利用された。

反対に才助の訂正増訳に異を唱えることによって、才助の世界地理学と合流した人物もいる。幕府天文方として、天文観測に従事しながら、満州語・ロシア語を修め、地理学にも通じ、後にシーボルト事件で獄死した高橋景保（一七八五—一八二九）がその人である。景保は才助と相当深い関係があったばかりでなく、才助の蘭学、特に世界地理の大事業にさまざまな助言と便宜をはかった人でもあった<sup>(18)</sup>。この景保は『訂正増訳采覧異言』の地図の部を読んで、自らの気付いたところを書き入っていたことが知られている<sup>(19)</sup>。

才助の同時代人に才助の世界地理を批判する力を持つ人は殆どいなかった。その中で、高橋景保だけは、才助の地理学を受け入れた



上に、その不備を批判し、それを発展させることができたのである。彼こそ才助と並ぶ、或いは才助をこえた蘭学の力を持ち、才助の世界地理学の流れを大きくし、太くしていく一人であったと言える。

こうして才助の世界地理研究は、未刊のまま、近藤重蔵の北方探検の地理学や高橋景保の蘭字に溶け込み、さらに「萬国の事を知るには實に此位の物はありや致さんでござる」という平田篤胤の「想像力の種子」<sup>(11)</sup>となったり、渡辺華山や橋本左内・吉田松陰のような幕末志士の熱血を振るい起こす鮮明な西洋映像ともなったのである。<sup>(12)</sup>また日本における西洋史研究の先駆の一人といわれる佐藤信淵は、亡き友山村才助の『西洋雜記』を取捨選択して『西洋列国史略』を著したことも指摘されている。<sup>(13)</sup>才助の残した研究は白石を受け継ぎ、これをさらに発展させた西洋を中心とする世界的視角を開いた。これはやがて信淵の手を経て、幕末志士たちの活躍に流れてゆき、近代日本における新たな世界像の構成に寄与していくのである。

### 渡辺華山

蘭学者、画家の渡辺華山（一七九三―一八四二）は、十九世紀前半という大変動の時代に自らの関心を世界事情に向け、日本と世界との関わり方を積極的に探索した一人である。しかし華山は、決して幕府に評価されなかった。彼は一八三七年のモリソン号事件に際して、異国船打払令に反対し、「蛮社の獄」で罪を問われる身にな

えなった。天保十二年（一八四一）十月十一日、時に四十九歳だった華山は、遺書を数通と絶筆の絵「黄梁一炊図」を残し、自らの手でこの世を去った。「邯鄲の夢」の故事に基づいたこの絵は「蒼老俊鋼な筆と簡素な淡色をもって、落莫として寒村の風景を現している。おのずから画者の殺気を帯びた険しい心胆さえ窺われて、寒風のすさぶごとく凄蒼な画致が示されている」と評されている。<sup>(14)</sup>これは華山の心の中を現す最後の表現にはかならなかった。華山は死をもって、そしてこの絵をもって、世の中に対して何を発信しようとしていたのか。あえて言うならば、華山が伝えたかったのは、自らの人生の虚しさや立身や栄華の儚さの思いよりも、太平の夢に惚けている幕府に対する強烈な警告だったのではないだろうか。華山のこうした心境を決定的に作りだしたのは、その優れた世界認識とこれに伴う自国の存亡への危機感覚であった。

華山は、三河国田原藩の小禄の家に生まれた。藩財政の窮乏によって、渡辺家の家計は時々窮迫の危機に瀕した。少年の彼は親の生活潤すために儒者を目指したり、画家を志したりして、藩務と副業との両立を目指したのである。しかし両者のバランスを取ることがはなかなかわつかなかった。一時、華山は天下一の大画家になろうとして、藩籍を離脱し、長崎に行って、画業に専念しようと考えたこともある。この計画が失敗した後、結局彼にのこされたのは、藩業と画業という二つの分野に跨がり、藩政改革と絵画技法の更新を

同時に進めていく道のみであった。

華山を蘭学に近づけたのは、藩政のなかの海防問題の現実化である。一八二五年、幕府の「異国船打払令」が發布されると、日本中が海防の総動員体制に入ったといえる。華山の所属する田原藩も例外ではなかった。この時同藩では初めて海防係りという役職を設けている。一八三二年五月、年寄役末席に起用されて、海防係りを兼務することになったのをきっかけに、華山も海防に目を向け、蘭学の研究に力を入れるようになった。

かつて儒者と画家を目指した華山は、江戸時代の一般教養としての儒学の洗礼を受けた上に、絵画の訓練を通して十分な想像力をも養っていた人間である。儒学と蘭学、そして絵画の領分までをわがものとしていた華山は、東洋から西洋に視野を移し、空間的にも観念的にも新しい世界に入る姿勢を整えていた。海防への関心と蘭学との邂逅は、更にそのような傾向を強めた。蘭学による西洋世界に対する知的探検は、まず空間的な世界の把握に向かっている。彼は世界五大洲の構成を次のように描いていた。

古ハ一地球〔セカイ〕ヲ四分<sup>つ</sup>仕<sup>か</sup>、亜細亜<sup>アジヤ</sup>・欧羅巴<sup>ウロパ</sup>・亜弗利<sup>アフリ</sup>加<sup>カ</sup>・亜墨利加<sup>アメリカ</sup>ト定候<sup>さだま</sup>処<sup>ところ</sup>、又亜墨利加<sup>アメリカ</sup>ヲ南北ニ分チ、五大洲ト仕<sup>か</sup>、其<sup>その</sup>後<sup>ご</sup>見<sup>けん</sup>出<sup>しゅつ</sup>之<sup>の</sup>諸地<sup>しよち</sup>多ク相成<sup>あひなり</sup>、四方無<sup>な</sup>残<sup>しん</sup>審明<sup>しんめい</sup>仕候<sup>し</sup>ニ付<sup>ひ</sup>、近來<sup>きんらい</sup>南北<sup>なんぽく</sup>ア墨利加<sup>アメリカ</sup>ヲ一洲ト仕<sup>か</sup>、大平海<sup>たいへいかい</sup>諸島<sup>しよとう</sup>ヲ取集<sup>とりあ</sup>メ、是<sup>こゝ</sup>ヲ烏<sup>ウ</sup>斯<sup>ス</sup>答<sup>ダ</sup>刺<sup>リ</sup>利<sup>リ</sup>、

ト称シ五大洲ト致候<sup>いふ</sup>。

これは空間的に地球全体の構成を五大洲として捉え、十九世紀初期の世界地理の知識を正確に反映した認識だが、あえていえば当時日本における常識のようなものをふり返っただけで、特に華山の発見といえるものではない。しかし華山の目は、このような地理的分類に止まることなく、さらに各洲の文明的な内容に焦点を絞っている。五大洲では、アジアとヨーロッパの人民が特に優れていて、なかでも四十度以北の地よりは、四十度以南の方が文明が古くから盛んだったという。前者は、日本、中国、ペルシア、ユダヤ等の国を代表とし、後者は蝦夷、タタール、蒙古、満州及びヨーロッパ諸国を指している。しかし文明は南から北へ広がったゆえに、元の時代や清の時代には、中国の教えが蒙古や満州等の諸国に入ったし、ユダヤの教えはヨーロッパに入っていわゆるキリシタンとなったし、アラビアやインドの教えはタタールに入り、いわゆるマホメット教となったという。すると、それまで後れていた地域は文明開化の地に生まれかわり、文明の古さを誇る地域はその逆の道を辿ることになる。その結果後発国が一転して先進国となった。華山が強調するのは、こうしてヨーロッパが文明の中心に転進し、世界的覇権を獲得し、現在すでに世界的に播るがすことのできない存在となっていくということであった。ヨーロッパの拡張について彼はさらにこう

述べている。

又歐邏巴諸国ハ海外至ラザル隔モ無之、四大州諸国ヲ押領候得  
バ、天地ノ間、韓日諸部ノ国ニ無之ハ、大低歐邏巴洋夷之腥穢  
ヲ披ラザルモノ無之、唯皇国ノミ万邦顛覆ノ中に独立仕、最  
古ヨリ一毫ノ汚瀆ヲ受ザルモノ。一地球中、媿耦可仕者更  
これなく、誠ニ難有義ト奉存候。<sup>(10)</sup>

ヨーロッパの膨張を見つめながらも、こうしたヨーロッパに対し  
て、ひとり日本だけが完全な独立を守っていることの誇りを忘れず  
にアピールしていたのである。華山はこうした文明変遷を基軸に、  
その流れの意味を次のように纏めている。

右之通、天下古今之変ニテ、古ノ夷狄ハ古ノ夷狄、今ノ夷狄ハ  
今ノ夷狄ニテ、古ノ夷狄ヲ以テ、今ノ夷狄ハ難制奉存候。<sup>(11)</sup>

すなわち文明と夷狄の関係はあくまで相対的なもので、昔の夷狄  
は今の夷狄とは必ずしも同じではないとする。言い換えれば、過去  
の夷狄が今の文明となることもあれば、その逆もあり得るというこ  
とである。華山はさらに文明と夷狄との互換関係をもたらし原因に  
目を配った。西洋において、このような「晚出國」<sup>(12)</sup>が文明国へ転

換するのを促したのは、人々の信仰ではなく、その「物理の学」に  
よるのである。

右之通、古今大変仕候得共、大道ハ何レノ国々迎モ、今ハ  
古ニ及バズ候得共、物理ノ学ハ古ハ今ニ及バズ候テ……<sup>(13)</sup>

どこの国でも道徳や信仰は、昔の方が優れていたが、物理の学だ  
けは昔が今に及ばないという。この「物理ノ学」こそは、ヨーロッ  
パ人が、世界的な膨張をなし遂げるための秘訣であった。

西夷共物理ノ学ヲ専ニ仕候故、天地四方益審ニ相成、一国  
ヲ以テ天下ト不仕、天下ヲ以テ天下ト仕候義、頗規模ヲ広  
張仕候風有之候。<sup>(14)</sup>

西洋人は、物理の学問を通じて世界万国のことを窮め、一国をも  
つて天下とせず、世界をもって天下とする。天下の範囲は、こう  
した物理の学を持っている西洋人によって、広められ、拡大された  
という。

華山が自国の海防の急を意識して、西洋事情研究によって「彼を  
知る」に努めた理由は、まさにこの西洋の地球規模にわたる拡張に  
あり、唐土を世界の中心とする知識人固有の「中華」意識や、一国

だけを天下とする幕府の無神経に対する反発にあったと言える。日本の周辺へ浸透してきた西洋の圧迫が華山に危機感をもたらし、この危機感のうちに華山は西洋事情の探究に心を傾けた。西洋の膨張によって、世界は一地球規模になったという驚くべき発見は、華山の知的探検の到達点でもあった。この知的な高原から見渡したとき、地球規模の世界においては西洋人及び西洋文明・学問の占める比重が余りにも大きく、孔子の教えも世界の五つの偉大な教え（ユダヤ教、キリスト教、マホメット教、仏教、儒教）のなかの一つに過ぎなかったこともはっきりと分かってきたのである。

華山にとってはこうした世界各国、なかでも西洋諸国の制度、風俗、人物及びその「教え」をまず知ることが何よりも至急の課題となった。西洋の学問を一層窮めるためには、まず西洋と交通しなければならぬ。

今天下五大洲中、<sup>ア</sup>亜墨利加・<sup>ア</sup>亜弗利加、<sup>ア</sup>亜（<sup>ウ</sup>鳥）<sup>ス</sup>太羅利三洲は既に<sup>ヨーロッパ</sup>歐羅巴諸国の有と成。<sup>ア</sup>亞齊<sup>ア</sup>亞洲といへども、<sup>わがくに</sup>僅に我国・<sup>とうきん</sup>唐山・<sup>ヘルシア</sup>百爾西亞の三国のみ。其三国の中、西人と通信せざるものは、<sup>なだわがくに</sup>唯我邦存するのみ。万々恐多き事なれども、<sup>ばはんおそれ</sup>実に杞憂に堪ず。<sup>(四)</sup>

華山は五大洲に覇権を握っている西洋人と交通をしない日本の現

実に対して憂慮を表し、この西洋に対して「鎖国」を続けようとする幕府当局の現状認識の甘さに強く警鐘を鳴らした。彼はこの強烈な危機意識のもと、西洋世界の地球規模の拡大に応じて、西洋への知的な探検をさらに深め、西洋の「天・地・人」に関する学問の構成や、西洋の実力の秘密に迫ろうとしたのである。彼は『駄舌或問』において、対話体の文章を綴り、西洋人に答えてもらう形を取って自らの西洋への関心のありどころを提示した。この問答文のなかに、当時の西洋各国とその文明が華山の目にどう映っていたかを見ることが出来る。例えば西洋の学問について、三つの分野に分けてこう述べている。

按ずるに、<sup>ウイス</sup>ウイス、推歩学。即ち、<sup>せんめ</sup>天を専主とす。ナチュールは自然の物理にして、<sup>ど</sup>地志に取ては地を専主とす。スタートは<sup>(四)</sup>人情・風俗・政事・沿革等、人を専主とす。

すなわち西洋の学問を、数学、つまり天体運行の度数を計って暦を作る学問（ウイス）、自然地理学（ナチュール）、そして人間科学（スタート）の三つにまとめている。これは中国固有の学問体系の範疇「天・地・人」にあわせて纏めたものであるが、しかしその学問の中身や方法などは、在来のもものと大きく異なっていた。「地」に対応する自然地理学を取ってみても、それは測量に基づいて「一

地球を航海し、実測せる地理書<sup>(12)</sup>であつて、固有の地誌よりは「地」の範囲が大分広くなる。『外国事情書』においても、第一は教道、第二は政道、第三は医学、第四は物理学という西洋の「四学」が在来の学問の「四学」の明德、治民、厚生、格智とうまく対応している<sup>(13)</sup>と述べている。これは華山の目に西洋の学問が決して異質なものと映つておらず、或いは在来の古典の延長であつたり、或いは在来の学問の不足を補うものとして映つていたことのしるしであり、同時に在来の文明に対する相対化でもあつた。このため学問の世界を西洋にまで大きく拡大することができたのである。

このような華山の西洋文明に対する相対的認識は、他の蘭学者知識人においても既に見出すことができる。但し、新井白石や杉田玄白・前野良沢等においては医学や地理学が中心となつたのに対して、華山の時代では、むしろ政治社会や宗教までを含んだ。東西文明全体に対する徹底した相対化認識が生まれていたのである。

西洋を同じ文明の地表において眺めると、その学問だけでなく、人間や社会のすべてに強い関心を覚えないではいられない。同じ『歎舌或問』では「ヨーロッパのなかで、貴国の他にどの国が一番軍事的に強い<sup>(14)</sup>か」という問いを出している。これに対して次のような答えをのしるした。

答云、生質勇敢、戦闘精練なるは、都児格国第一なるべし。

されども奇変百出なるを以て、亦奇敗ある事も候。是に当り候ものは、唯俄羅斯なるべし。<sup>(15)</sup>

つまりこの答えはロシアの存在を大きく意識していることが分かる。さらに次の問答では軍事の分野ではロシアが優勢であるのに対して、学問の盛んな国としては「独逸国」と「払郎察」、つまりドイツとフランスを、また工芸が巧みで、技術に秀でている国として、大貌利太泥亜つまりイギリスを挙げている。<sup>(16)</sup>ロシアからドイツ、フランス、イギリスにいたるまで、十九世紀と二十世紀の世界史を動かす主要国の顔が揃つていた。但し二十世紀に入ってから初めて世界的に活躍するようになった新大陸アメリカ洲については、僅か「今時唯、ノールドアメリカと称すれば、大貌利太泥亜の亜墨利加領と申事に成来り候。」<sup>(17)</sup>というに止まつた。華山の時代に現実的に感じられていた軍事的な脅威は、専らロシアやイギリスの拡張に集中していたのである。

抑鄂羅斯は東漸して東北止白里より北亜墨利加の西岸に及、<sup>(18)</sup>地方三千里、地球四分之一を保てり。英吉利斯は西漸して、北亜墨利加東岸より内地加拿太に至り、又南は亜細亜の諸島、亜<sup>(19)</sup>〔鳥〕斯太羅利の一部を略す。

ロシアとイギリスが地球の大きな部分を抑えている現実を見ると、このような大国と日本との関係に目を閉じるわけにはいかない。「西人より一視せば、我邦は途上の遺肉<sup>いにく</sup>の如し。餓虎<sup>がこ</sup>渴狼<sup>かつろう</sup>の顧ざる事を得んや」と、華山の危機意識は強まるばかりであり、幕府の指導者たちの平和惚けに対する批判もますます募る一方であった。

嗚呼<sup>ああ</sup>今夫<sup>いま</sup>是<sup>これ</sup>を在上<sup>ざいじょう</sup>大臣<sup>だいじん</sup>に責んと欲すれども、固<sup>もと</sup>より袴子<sup>かしの</sup>弟<sup>てい</sup>、要路<sup>やうろ</sup>の諫臣<sup>かんしん</sup>を責んと欲すれども、賄賂<sup>わいろ</sup>の倖臣<sup>こうしん</sup>、唯是有心者は儒臣<sup>にうしん</sup>、儒臣又<sup>のぞみ</sup>「望」浅<sup>あ</sup>ふして、大を措<sup>お</sup>ぎ、小を取<sup>と</sup>り、一に皆不痛不癢<sup>いた</sup>の世界となりし也。今夫<sup>いま</sup>如<sup>かく</sup>此<sup>このごとく</sup>なれば、只束手<sup>ただ</sup>して寇<sup>まは</sup>を待む<sup>か</sup>。<sup>13</sup>

世界の現状を知らず、外患に眼をつぶって、いたずらに井中の太平を謳歌している為政者のために日本が危機に陥っているのだと、当局への痛烈な批判をし、日本の将来に対する強い不安を表したのである。この激越な調子は、のちの「蜚社の獄」のさい、彼の有罪の証拠のひとつとされた。

蜚社の獄に先立って、世人から「妖怪」と呼ばれていた鳥居耀藏（二七九六―一八七三）は、華山らを調査するに当たり、高野長英（二八〇四―五〇）の反体制的著作『戊戌夢物語』について、「異国を称美し、わが国をそしりし書物、著述いたし候者」と明記してい

る。為政者が罪としたのは、華山らの現実に対する批判と、西洋への賛美との二点にあることがわかる。

長英は奥州水沢藩（岩手県）の医師の子として育てられた。江戸で蘭医の修業をし、長崎では鳴滝塾でシーボルトに学んだ。のちに江戸で町医を開業し、渡辺華山や仙台藩医学館教授小関三英（一七八七―一八三九）らと交わった。一八三八年に『戊戌夢物語』を著し、華山と同様モリソン号事件で幕政批判をしたため、蜚社の獄で終身刑を宣告されたのである。

長英は医学を始めとする西洋諸科学の研究に強い興味を持ったひとであったが、華山とは蘭書の翻訳をしたりすることによって付き合い始めた。華山と往来するにつれて、次第に政治的にも開眼していったのである。

長英の『戊戌夢物語』という著書は、華山の一系列の著書と比べると、政治論として多少平凡な向きがあるにしても、当時の蘭学者一般の世界認識及び現状把握を知るには恰好のテキストといえよう。『戊戌夢物語』は、「夢ともなく幻ともなく、恍惚たる折節」という夢に入る際のいきいきとした描写を以て始まる。これは現実社会とは違った次元での話という想定なのだが、かえって実社会では議論してはならない話題へ接近するという嚴肅感や緊迫感を際立たせている。このような神秘的かつきわどい雰囲気の中に入っていくと、何人かの「碩学鴻儒」と言われる学者大先生が、遠い地球の向



こう側にある国イギリスについて、熱弁を展開していた。ある人はイギリスの地理的位置から気候や人民の性質、国としての強弱に至るまで得意な知識を披露したのに対して、ある人はその都ロンドンの繁盛ぶり、町の綺麗さ及び万国に航海して世界を制覇する威容を紹介する。そしてこの強国イギリスがアメリカ大陸ばかりでなく、インド、中国、さらに南洋諸島、日本の近海にまで勢力を振るって進出してきている、と熱を帯びた語調で指摘する人もいた。

中でもっとも衆人の注意をあつめた話は、間もなく日本人の漂流民を送還するために、日本に上陸すると伝聞されているイギリス人モリソンについての話題であった。

ある人の情報によると、このモリソン氏はもともと長く中国滞在の経験を持っているイギリスきつての東洋通であり、東洋の仁義道徳に馴染んでいる方である。このモリソン氏が船隊を連れてくるなら、「打払令」で拒否することはむづかしい。もしそうしたら、日本は「不仁の国」と見られてしまうに違いない。こうして議論の焦点は、接近しつつある西洋強国イギリスの船に対する処置を巡って、日本が鎖国を続けるか開国に移るかというところに絞られていったのである。

議論の進行が国を開くべしとの意見に傾斜して、その方向に大いに希望を託したい胸のなかを打ち明けようとする時、木柝もくたつの声に驚いて、夢が覚めた。この奇怪な「夢の弁論会」を記録しようと筆を

取った、と作者は文章の最後を締めくくる。

この夢物語は、医科学を通じて西洋世界を熟知した長英という人の胸に潜んだ自国の行方に対する憂慮こころづきを悉く表したものである。それは西洋の存在に対する肯定と、幕府の鎖国政治に対する不信を根底に抱えた表現でもあった。同じ危惧は、華山も『慎機論』において示していた。この意味において華山と長英は同じ地平に立って戦う「同志」と言ってもよかった。

しかし戦う相手である幕府の側も、必ずしも華山や長英のような志士と正反対の立場にいたとは限らない。そもそも幕府の指導者たちは、西洋の実力を完全に無視していたわけではなかった。幕府は西洋に関する情報を十分に持っていたが、情報の独占と安定した支配を求めて、国政に対する民間の批判や西洋関係の情報の一般への公開を極度に警戒していた。華山と長英の受けた不運な境遇は、このような幕府の思惑に反対する行動を起こしたことから生まれ、彼らは世間一般や蘭学者への、或いは蘭学者のみならず、西洋の事情にますます関心を示すようになりつつあった儒学者たちへの見せしめの犠牲者とされたのである。言い換えれば、幕末の為政者が押さえ込みたいのは、華山や長英のような少数の蘭学者の越権行為というよりも、社会全体に現れようとしていた西洋世界への抗しがたい憧れと好奇心そのものである。この新しい世界への接近は、徳川幕府の支配する在来の「天下」を揺るがしうるものであった。



## 箕作阮甫

十九世紀に入ると、対外的視野における西洋というものの存在感が増幅するなかで、多くの日本の知識人は、不安と驚異を内心に持ちながらも、西洋に関する新たな学問の上で一層の知的探検を試みるようになり、新しい世界の様相に一層濃密な想像を馳せるようになった。箕作阮甫（一七九九―一八六三）も、こうした十九世紀を迎える前々年に生まれて、明治維新の直前に亡くなった、まさに真の意味での幕末を生きた一人であった。

阮甫は京都で漢籍や漢方医学の教養を身につけたが、それだけに満足せず、さらに江戸で蘭学を学んだ。後に彼は幕府天文方の翻訳掛となり、蕃書調所の創設に際してその教授となった。「日米和親条約」締結の外交交渉にも参加した。阮甫の学問関心は、漢方医学から蘭学に進んだのだが、十九世紀中葉には、さらに世界地理学にも目が向けられたのである。幕末に阮甫のような優れた洋学者が世界地理学に目を向けた背景には、日本に押し寄せてきた外国船の動向や、中国から伝えられてきたアヘン戦争の情報がある<sup>(12)</sup>。蘭学によって、知的刺激をひたすら西洋から受けてきた日本人は、アヘン戦争を通じて、ロシア、そしてイギリスやアメリカからの脅威を現実的に捉え始める一方、世界地理を研究することによって、世界の真の姿を見つめ、西洋の侵攻という可能性に対処しようとしたのである。

る。

また、この時代の知識人は、アヘン戦争の衝撃とともに、清国の知識人たちの自国批判とその新世界に対する新しい認識にも出会った。阮甫は、中国人自らがアヘン戦争を反省した最初の著作、すなわち清末中国において世界情勢の議論を総括し、清末中国における新しい世界像を練り上げた魏源の『海国図志』を評価し、塩谷岩陰（二八〇九―六七）とともにそれを翻刻して日本に紹介したはじめての人間でもあった。阮甫の世界情勢への学問的な関心は、つねに時代の要請とそれに対する彼自身の対応を示すものである。魏源の世界戦略との邂逅は、阮甫の個人的な体験というよりも、阮甫の代表した時代が彼をしてそのような中国発の世界情報との接点に立たしめたものと言えよう。阮甫らは西洋との衝突の中から生まれた西洋論に啓発されながら、絶えず自らの新たな世界像を求めていたのである。中国の情報はその当時の国際情勢を見極める上にも、万が一日本に同じ悲劇が発生した場合に備えるためにも、或いはその後の西洋文明に対する徹底的な態度の転換のためにも、決定的なきっかけを提供したのである。こうして幕末の知識人たちは、中国発の世界地理や西洋情報に触れながら、西洋を含んだ新しい世界の実像を掴もうとし、一層精密でしかも深さのある世界像の再構築に躍りになった。

近世日本における世界地理研究は、新井白石に出發し、山村才助

に大成し、さらに青地林宗（一七七五―一八三三）の『輿地誌略』（二八二六）等の蘭訳本を経て、ついに高橋景保によって、当時の日本人の世界地理の総決算をなし遂げ、近代地理学の形をとのえたと言える。

世界地理学の総決算を象徴したのは、高橋景保の『新訂万国全図』（二八一〇年）の刊行であった。この図は、幕府が日々増強してくる西洋の圧力に対して新たな対策をたてるため、参考資料として天文方高橋景保に命じて作らせたものである。景保は西洋や中国經由の資料を蒐集し、広く世界に参考書を求めた。図の凡例において高橋景保は、西洋地理学の発達の秘密を「恒業航海、親歴諸国以得実験」（長い間航海をし、自ら諸国に渡って、以て実験をなす）にあると分析したが、この認識を自ら実行すべく、北方未開拓地域の地理については間宮林蔵を派遣し、実地調査に当たらせ、その成果を地図に記した。

さらに景保は十九世紀西洋の新たな探検における発見に従って、山村才助やその他（司馬江漢や橋本宗吉）の洋学者たちが存在すると信じてきたメガラニカの記述を新しい地図から削除し、その世界地理認識の斬新さをしめした。

しかしこうした新しい世界知識の獲得は、民間に提供をゆるされた情報量の線をこえたので、逆に幕府の不安を募らせる結果となった。結局世界地理の最先端を求めて走った景保は、洋書と交換する

ために、ドイツの医師シーボルト（二七九六―一八六六）に伊能忠敬測量の『大日本沿海輿地全図』の縮図を贈与したことが露見して、一八二八年投獄され、いわゆるシーボルト事件の犠牲者となった。

さらにイギリスの船やアメリカの船があいついで日本列島沿岸に入りする一八三〇年代後半になると、幕府は国内の安定策や海外知識の独占を以て、事態の打開を図った。かの有名な蚕社事件はこうした背景の下に起こったのである。その後の幕府は、医学以外の蘭学を規制するようになった。すなわち、その外来的危機の波紋が一般民衆にまで及ばないように必死に海外情報の流入を遮断しようとし、輸入蘭書の検閲制度を強化し、翻訳書の流布を禁じて、対外危機を「鎖国令」の枠内に止めて処理しようとした。この幕府の過剰反応のために、天文方や長崎のオランダ通詞の翻訳事業は一層促進されたものの、各藩の蘭学者たちによる医学以外の西洋事情の研究は一八四〇年代に突然困難な状態に陥ったのである。

幕府のこうした対外的な縮み志向の政治を前にして、幕府の天文方という有利な立場にあった箕作阮甫は、世界地理や世界事情の研究に一役買っただけで出た。阮甫が最初に関与した事業は、天文方高橋景保がシーボルト事件に関わって獄死したとき、中止のうきめにあった『厚生新編』<sup>(134)</sup>の編訳の継続である。『厚生新編』の翻訳の役割分担から見ると、初期は大槻玄沢、中期は宇田川榕菴（二七九八―一八四六）が中心であったらしい。榕菴の後、その立場を継承した人物

は恐らく箕作阮甫であつたと思われる。<sup>(15)</sup>その他阮甫はまたさまざまな種類の西洋書の翻訳に携わつた。<sup>(16)</sup>

阮甫と世界地理との関わりは、阮甫の養子箕作省吾（一八二一～四六）の世界地理研究に受け継がれている。箕作省吾は奥州水沢から出て箕作の門に入り、優れた才能を認められて、後に箕作家の養子として阮甫の季女しんに配した。省吾はその俊才を世界地理研究に注ぎ込み、その研究成果をまとめた大著『坤輿図識』（一八四五）は、幕末における専門地理学書として広く流布し、時の人々を大いに啓蒙した。養父の阮甫は省吾が亡くなってからさらに『八紘通誌』（一八五一）を著して、その続編に当てたが、これは養子省吾の未完の事業を全うする気持ちと、天文方としての使命感が一体になった結果であらうと思われる。

『坤輿図識』は五巻三冊で、まず亜細亜、欧羅巴、亜弗利加、南亜墨利加、北亜墨利加、豪斯多刺利の順に世界全体の地理を説く。そして各巻の始めにはそれぞれ世界六大洲の総論を設け、その次に諸国の土地の広さ・人口の多さ・歴史の盛衰・物産器械の紹介を行っている。質・量のいづれからみても、高橋景保の『新訂万国全図』と並んで、幕末から明治の転換期までの間で、もっとも広範囲にわたって世界事情の話題を提供し、福沢諭吉の『西洋事情』が出る以前の啓蒙書の頂点を成したといえる。

弘化三年（一八四六）、省吾はさらに『坤輿図識補』四巻四冊を

著し、前書に載せられなかった海外諸国の沿革、形勢、風俗を取り上げた。その巻一には地動説を紹介し、輿地総説・蒸発気・水原・河川・火脈・地震・山脈・氷山・砂漠等の自然地理を説いている。巻二は亜細亜補と米利幹誌補とを載せ、特にコロンビア・チリの独立を語り、アメリカ合衆国首府ワシントンの建立、その海軍の現勢を取り上げ、最後に「話聖東小伝」を付載している。巻三には、欧羅巴誌補をし、ドイツ・ロシア・フランス・イギリスを取り上げ、各国の人口、殊に諸国の陸海軍の軍備の説明に重点を置いた。巻四には阮甫の訳稿『西史外伝』に基づいて本篇に出る人物の略伝を載せている。こうして『坤輿図識』から『坤輿図識補』に進むにつれ、省吾の関心は西洋の主要国の中心に迫り、マクロ的な輪郭の把握から細部の描写に至ることによって幕末の世界的視野を広め深めていく。

前にも触れたように、省吾の『坤輿図識』の制作に阮甫の協力は欠かせないものであった。例えば、省吾の『坤輿図識』の中の「豪斯多刺利」の記述は、阮甫の訳稿「オーストラリア」の項目を活用したものと言われている。また省吾は『坤輿図識補』の「附言」の中で、「意在独成」（意独り成すに在り）と言いながらも、資料の収集や問題設定などについては、父の阮甫によるところが大きかったらしい。<sup>(17)</sup>二人の学問の上でのこうしたつながりは、必ずしも偶然ではなかった。もともとヨーロッパ列強の軍事力に対する関心と西洋

文明そのものに対する好奇心は、二人の問題意識の根底をなしていたと言える。これはまた省吾の『坤輿図識』、同『坤輿図識補』、また後に阮甫の著した『八紘通誌』に一貫したものであった。

省吾は『坤輿図識補』の執筆途中に病に倒れ、その後も病を押して執筆を続けたが、成稿間もない弘化三年末月の十三日に、二十六歳の若さで死去した。その未完の事業を引き継いだのが、阮甫の六巻六冊『八紘通誌』（一八五二）の刊行であった。

『八紘通誌』の凡例には、阮甫が自らの著作について次のように述べている。

若夫近二十年来新に獨立して國を成し。若は大國の格外防護に頼て初て國を建る等。沿革も亦極て多し。亡児が「坤輿圖識及補」其大略を記すと雖ども、脱漏する所猶少なからず。今載ざる所を擇み。且喪亂後各國政治の善惡・國政の強弱・風俗の汗隆・財貨の豊蓄・學術の盛衰・兵備の衆寡・産物の贍乏等を記し。務て方今彼洲各國の形勢を察識し、事情を探索するに便す。

一八五〇年代に至る西洋の歴史の流れは、世界の構図を変える力を見せるような著しい再展開の最中にあった。一七八三年にアメリカがイギリスに対する独立を獲得し、一七八九年にフランス革命が起こり、ナポレオンを巡って欧州全土は混乱が続いた。西洋世界全

体は混乱と再生の道を歩んできていた。このような西洋世界を眺め続けてきた日本知識人にとって、イギリスの中国侵略、西洋列強ロシア・イギリス・フランス・アメリカによる度々の日本沿岸来航の事態は、とうてい軽く見過ごしうるものではなかった。従来のような西洋世界についての概説的な紹介に、阮甫は不満を抱いた。従って彼は亡くなった養子省吾の著作の不備を補うことを兼ねて、十九世紀以来の西洋、特にヨーロッパの新たな変化について、政治、風俗、経済、學術、物産等あらゆる面にわたって、詳しく日本列島の人々に通報しようとしたのである。

結局、阮甫は『八紘通誌』でヨーロッパ諸国の地誌を中心に記述を進め、世界知識をもっとも求めていた幕末という時代の急用を満たし、その姉妹篇の『坤輿図識』とともに当時の人々のために西洋を含む新しい世界の構図を描いていく。

三年後にあたる一八五四年に、阮甫は川路聖謨<sup>(138)</sup>（一八〇一〜六八）に命じられ、塩谷宕陰<sup>(139)</sup>（一八〇九〜六七）とともに中国系の世界地理書である魏源<sup>(140)</sup>（二七九四〜一八五六）の『海国図志・籌海篇』に訓点と注音をつけて、それを複刻した。幕府の海防掛川路聖謨にとって、或いは『坤輿図識』や『八紘通誌』の著述を経験してきた阮甫にとって、この中国経由の世界地理書を日本に伝える意味は、何だったろうか。魏源のこの著作がただ西洋の事情を詮索するものに止まらなかったことは明らかである。むしろ二人の目をみはらせた

のは、『海国図志・籌海篇』が、同時に西洋の圧迫に対する自らの世界的戦略をも提示していたことであろう。これこそ、十九世紀中期に至るまで、阮甫自身の探索をも含めた日本人による世界論においては未開の領域であったと言える。

阮甫と一緒に『海国図志』の翻刻に携わった塩谷宕陰はかつて水野忠邦に任え、天保改革に参画した江戸儒家の重鎮の一人である。阮甫と塩谷宕陰の協力作業は、まさに幕末における洋学者と儒学者の提携をうたった「洋儒兼学」（佐久間象山の言葉）の一つの試みだったと言える。塩谷宕陰は「翻案海国図志序」において、この書の性質と翻刻の意味について、次のように述べている。

予嚮者讀魏默深聖武記。以謂此魏氏之懲忿錄也。<sup>(10)</sup>（中略）及讀海國圖志。則又謂此懲外篇也。記以省我。圖志以知彼。英主碩輔能斟其意擇其策。舉而施諸政事。則轉禍為福變凶為吉無難也。<sup>(11)</sup>（かつて私は魏默深の「聖武記」を読んだ。これは魏氏の「懲忿録」だと思った。「海国図志」を読むに及んで、すなわちこれもまたその「懲忿録」の外篇だろうと思う。「聖武記」をもって自国を省み、「海国図志」を以て、彼国を知る。英明な君主や優れた臣僚がその意味するところを読み取って、その策略を取り入れ、それを挙げてもろもろの政事を実施すれば、すなわち災いを福に、凶を吉に転じて、難を免れることができるだろう。）

宕陰は魏源の『海国図志』と同年に出来た『聖武記』を比較し、両者の共同性と差異を論じて、後者は清朝に対する懲戒論の典型であって、前者は後者の続編、つまり自国への懲戒論を展開しながらも、世界のことを知る方に重心を移していったものと捉えている。このような論調がもし清国の指導者たちに聞き入れられ、政治の現場に運用されておれば、清国は内外に迫る危機から逃れることもできただろう、とこの著作の実践的な意味に高い評価を与えた。しかも阮甫や宕陰にとつての『海国図志』の価値は、彼国を知ること尽きるものではなかった。同序はさらにこう指摘した。

此編則原歐人之撰。採實傳信。而精華所萃。乃在籌海籌夷戰艦火攻諸篇。夫地理既詳。夷情既悉。器備既足。可以守則守焉。可以款則款焉。左之右之。惟其所資。名為地志。其實武經大典。<sup>(12)</sup>（この書の元はすなわちヨーロッパ人の書いたものである。その実を取って信を伝えている。その精華の所在は、「籌海」「籌夷」「戦艦」「火攻」の諸篇にある。地理を詳細にし、夷情を明確にし、器械などを十分に持ち、守るべき時は守り、よしみを結ぶべき時は、親しく交わる。左へも右へも、ただその時の必要に従うだけである。名前は地誌とあるが、その実は軍事戦略の大典である。）

魏源の著作は世界地理の真実を伝えるだけでなく、新しい世界における自国の在りかたについても、明確な世界戦略を提起している。この世界戦略を陳述した主な部分が、即ち阮甫や宥陰が翻刻をしようとする「籌海篇」であった。魏源は『聖武記』と『海国図志』を通じて「夷の長技に師して、夷を制する」という主題を追求したが、それを実現するために「守」・「款」・「戦」の戦略論を打ち出している。幕末の日本には、西洋の地理や軍事技術について、決して清朝中国に劣らない学問の集積があった。しかしそうした学問的な蓄積を生かす世界戦略論を生み出す土台ができていなかったせいも、魏源の世界戦略論を知る前までは、蘭学者においても、儒学者においても、西洋を相手にして体系的な世界戦略論を打ち立てることのできる人を見出すことはできなかった。魏源の論説はこの空白を補い、幕末の日本知識人を啓発し、世界のなかの日本という新たな自覚を持たせたのである。幕末の知識人に魏源の説が賛意と共鳴をもって受け入れられた理由は実にここにあったと言える。

また同序には、翻刻に至るまでの経緯も記されている。

此書為客歲清商始所舶載。左衛門尉川路君獲之。謂其有用之書也。命亟翻采。原刻不甚精。頗多僞字。使予校之。其土地品物名稱。即津山箕作庠西。注洋音於行間。嗚呼忠智之士。憂國著書。不為其君之用。而反被深於他邦。吾不獨為默深悲焉。而并

為清主悲之。<sup>(14)</sup>

(この書は去年清国の商人が初めて舶載してきた。川路君が本書を獲得し、その有用性に着目して、私たちに直ちに翻刻するよう命令した。原刻は不完全な箇所もあり、偽字が多いために、私(宥陰)が校正をし、その土地・品物の名称等は、津山の箕作に洋音を注記してもらった。思うに原作者は忠知の士として、国を憂えて著書をしたが、自国の君主に重んじられず、かえってよその国で尊重されることとなった。私はただ原作者黙深のために悲しむだけでなく、清国の君主のためにもこれを悲しく思う者である。)

つまり、長崎に赴く幕府の外交代表川路聖謨の依頼を受けて、塩谷宕陰と箕作阮甫とが『海国図志』の冒頭二巻を占める「籌海篇」、すなわち魏源の世界戦略論を校正し注音を付けて翻刻したのである。右の最後の記述で、彼らは清朝中国において『海国図志』が全く有効に利用されなかったことを嘆じて、ひるがえってその空前の世界地理知識や世界戦略論を一日も早く日本人のために提供しようとする意気込みを、隠さずに示していた。阮甫はこの翻刻において注音を分担しただけだったが、この漢籍世界地理書との取組みが、彼の血を沸かせなかったとは決して言うことができない。上に述べたように、自ら幕末の世界地理学の転換を担う存在となった阮甫は、他のだれよりも、在来の世界地理学を越えて西洋事情や世界戦略論を



補うことのできる漢籍を期待していたに違いなかった。その後も、彼は同じ頃に輸入された漢籍世界地理書、徐繼著の『瀛環志略』八冊（一八六一年に対嶋閣蔵梓として、阿波藩から出版）を校訂し、米人裨治文（ブリジマン、Bridgman、一八〇一〜一六一）の『聯邦志略』二冊（一八六四年出版）に訓点をほどこし、英国慕維廉（Williams、B）の『地理全志』九巻三冊に補注した。さらに阮甫は中国発の世界地理や世界戦略論を学ぶ過程で、「漢洋語対照地名一覽」を作り、オランダ語の訳語と中国の訳語を対照して、明治期日本にそのまま引き継がれるに至った訳語の設定にも務めたのである<sup>(14)</sup>。

幕末という大転換の時代に活躍の場を持っていた知識人の一人として、阮甫は、西洋事情への探究を深めていくうちに、西洋世界の膨張に対処する方途を見つけたという現実的な要求に逢着した。この問題に応えたのは、中国発の世界地理、特に魏源の世界戦略論であった。歴史の転換点に立つ阮甫のような知識人たちは、時代の使命感に燃えて、中国から知的な刺激を一身に受け取ったのである。阮甫は「學術東西究古今、歷朝治亂儘鈎深」<sup>(15)</sup>（學術東西古今を究め、歴朝の治乱を広く深く捉える）と、自らの心意を詠んでいた。こうして過去の日本をふりかえり、東西両洋の学問を総合して、新しい世界における日本のあるべき姿を探る阮甫たちの知的な野心は、国難の唯中であって、燃え上がるばかりであった。

### 3 山片蟠桃の「世界」発見

蘭学者の一人一人を見ても分かるように、十八世紀後半から十九世紀前半の間ほど、日本知識人の心が激しく揺れた時はない。この時期には蘭学の流布や漂流民の提供した幾多の西洋情報の拡散があった。外来の情報を敏感に捉え、新しい世界像を心のなかに探りながら、それを以てありとあらゆるものを見直そうとする精神的風潮が人々の心中に生まれたが、在来<sup>(16)</sup>の学問への懷疑や新しい価値への探索を強める一方で、ロシア人やイギリス人などの来航による脅威への不安にも悩まされていた。本節では分析の対象を蘭学者以外<sup>(17)</sup>の知識社会に広げ、上述の状態は、支配者上層部や蘭学者だけでなく、その外の知識人社会にも行き渡っていたことを見てみたい。

本節であつかう大坂の町人学者山片蟠桃（二七四八〜一八二二）は、まさに現実の社会経済活動に立脚しながら、批判の書と言われる『夢の代』<sup>(18)</sup>をもって、在来の学問を正し、新しい世界像を求めようとした一人であった。『夢の代』において、蟠桃は、自らの「天地人」に関する新たな認識を示したのである。蘭学者の多くが学問的な枠組みとして、「天地人」の概念を使って西洋の自然論や地理論、人間社会論を論じつづけてきたのと同じように、蟠桃の「天地人論」も、彼の世界認識の全容がそこに盛り込まれているものである。また『夢の代』は、大坂懷徳堂の師、中井竹山・中井履軒の二



人から聞いたことをヒントとし、膨大な参考書を使って、子孫の警戒のためにかき記したものであった。われわれは、儒学者でもなく蘭学者でもない蟠桃の提示した世界認識から、蟠桃の啓蒙思想家としての本性だけでなく、当時の対外認識の一般的な趨勢をも見ることができるだろう。

中国の伝統的学問では、天、地、人の範疇こそ、人間社会すべてを把握する枠組みであり、同時に方法論であった。この意味において蟠桃も、『夢の代』の天文・地理・神代・歴代・制度・経済・経論・雑書・異端・無鬼上・無鬼下・雑論十二巻のなかでも、特に天文・地理の巻に特別な意味を付与していたと言える。彼は天文の巻において次のように述べていた。

天学ヲ以テ大ト云所ノモノハ、天アリテ後地アリテ後人アリ、人アリテ後仁義礼智忠信孝悌アリ、ミナ人ヲ治ムノ道ナレバ、コノ件々ハ天アリテ後ノコトナリ、然レバ則ソノ元ハスベテ天ニアリ。<sup>(14)</sup>

天地自然へのアプローチは人間社会への探索につながっているといる。彼はまた「苟モ我居ル処照サルル処ノ天地ノ根元ヲ知ラザレバ、井蛙管見ヲ免レズ、日月ノ照ス処、草露ノ墮ル処、シリ尽サザレバ、君子ト云ベカラズ<sup>(15)</sup>」と、天文地理の根元を押さえた上で始め

て学問があると言う。天文・地理の二編は、蟠桃にとっては全書 of 思想的基調を定める非常に重要な部分であったことが分かる。

まず『夢の代』の天文・地理の二編を通じて、新井白石以来、蘭学者を中心として浸透してきた一つの姿勢を見ることが出来る。それはすなわち世界的視野を以て、旧来の学問を批判し、西洋の学問を基準に新しい学問の体系を樹立しようとする努力である。徳川後期の為政者の鎖国政策とは逆に、多くの知識人は西洋の学問に対して開放的、かつ歓迎の態度を取っていた。蟠桃もその一人として、天文と地理に関しては西洋の学問の賛美と東洋の学問の批判にその本領を遺憾なく発揮していたのである。

奇ナル哉西洋ノ説ヤ、天地ノ大論ココニ尽ス、梵・漢・和ノ管見ノ及ブ所ニアラザルナリ、拳々服膺シテヨクヨク思惟スベキコトナリ、スベテ人ノ徳行性質ノコトニ於テハ、古聖賢ヲ主トシテ是ヲ取ベシ、天文・地理・医術ニオイテハ古ヘヲ主張シ、是ヲトルモノハ愚ナリト云ベシ。<sup>(16)</sup>

蟠桃にとっては、よくよく考えるべきことは、新奇なる西洋の天地論が、天竺、清国、日本の比肩しうところではないという事実である。道徳倫理は古い方を取るべきにしても、天文、地理、医術などは古いものを主張することは愚かであるという。その言外の意

は、道德倫理的な心情はともかく、天地人の学問は西洋のものを取るべしというところにある。いうならば、道德倫理を天地人の学問の枠外に置いて、天地人の学問のすべてを西洋に仰ぐという志向を見せている。「新井白石以来の、そして佐久間象山、橋本左内へとつらなっていく和魂洋才、採長補短の態度が見られる<sup>(10)</sup>」という以上、新井白石以来の日本知識人の胸を脈々と打ってきた西洋文明への共鳴の低音がここに力強く聞こえてくる。蟠桃の西洋学問論は、その価値観や西洋認識に大きな影響を与えるものであった。

西洋ノ人ノ諸藝ニ精シキハ、和漢ノ人ノ及ブ所ニアラズ、一器ヲツクリ一術ヲ工夫ス、ミナ官ニ訴レバ直ニ其家ニ祿ヲ與ヘ、費用ヲソナヘテ到ラザル處ナシ、病ヒニアヘバ、子或ハ弟子ニ譲リテコレヲ訴レバ、又其嗣ヲ奉ズルコト前ノ如シ、ユエニ三代五代ヲ歴テモトゲ得ザルコトナシ<sup>(11)</sup>。

作者の眼は西洋の学問を支える社会基盤にも向いていると言える。即ち西洋人の学問は、その社会の必要に応じて生まれ、その社会の保護を受けて成長してきたという。ここには西洋の学問と人間社会の連動を考えて、学問、技術とそれを支える社会、人間の要素を同時に捉える、いわば福沢諭吉を代表とする明治時代の西洋文明論に近いものが見えている。しかし社会的保護に恵まれているだけでは、

よい学問が達成されるとは限らない。その上に、優れた学問の方法論もそなえなければならぬ。

西洋歐羅巴ノ國々ニオイテハ、ソノ實地ヲ踏ザレバ、圖セズ云ハズ、天文ノ如キハ海外諸國ニ往來シ、測量試験シテコレヲ云ユエニ、大舶ヲ艤シテ萬國ニ抵リ、天文地理ヲ正スコトナリ、ユエニ梵漢我國ノ如キ虚妄ノ説ハナシ、ココヲ以テ其説ヲ信ズベシ<sup>(12)</sup>。

つまり、西洋の学問は事実に基づいた「実学」だからこそ、信ずるに足る、という認識に至っている。この実学とは、実地調査を重ね、測量試験を通じて結論を得るというものである。西洋人は世界万国に往来し、その地を実際に見、測量して、さらにそれをまとめて自らの地理学を作り上げたからこそ信じるに足りるものであるとする。蟠桃の西洋の学問及び文明への関心はなによりもこの「信頼性」にあった。こうした信頼できる学問の前では、虚妄な学説などは簡単に崩れてしまう。一方旧来の学問への批判は、逆に「虚学」への不信から始まる。

スベテ天文地理ノコトハ一日一日ニ開ケテ、古ヘノ足ラザルヲ知ルル、今ノ發明ニアルナリ、シカレバ則天竺須彌山ノ説、日

本ノ神代ノ巻ノ説ヨリ漢土ノ諸説ハ、ミナ天文ノ開ケザル前ニシテ、居ナガラ天地ヲ測ルモノナリト知ルベシ、其國ノ目ノ及ブ所ノミニシテ、管ヲ以テ天ヲ窺フガ如クナルコトヲ、漢ノ世ニ至リテ西北大ニ開ケテ、天竺アルヲシル、イマダ西洋ニ及バザルナリ。<sup>(13)</sup>

西洋の新しい天文地理学を以て見ると、古来の天文地理学の不足不備を痛感せざるをえない。古えから伝えられてきたインドの説や、清の説及び日本の説は、殆ど天文地理学の開化以前になんの実測をも経ずに作られたもので、それぞれ各国の視野の中に制限されていて、視野の外にある西洋世界については全然知るところがない。故にこれは信ずるにたるものとは言えない。しかし西洋の天文地理には、東洋のことも、その他西洋以外の地域のことも明確に記してある。そしてその善し悪しの分別がはっきりしているという。実測を怠る方法に加えて、西洋のことに暗いという旧来の天文地理学は、日本固有の学問全般に対する蟠桃の信頼を完全に失わせていた。東西学問の根幹に係わる天地の学問における西洋説への蟠桃の傾斜をさらに深めさせたのは、何よりも西洋の天文学に基づく「地動説」の受入れである。蟠桃は言う。「歐羅巴洲『暗厄里亞』國ノ人『奇児』ト云者曆象新書ヲ著ハス、コレマデノ天學ハミナ地ヲ不動トセシニ、コノ書ハ天ヲ静トシ地ヲ動トス。且地星ノ外ニ許多ノ世界ア

ルノ理ヲ云」。<sup>(14)</sup> ヨーロッパの天文説では、天が静かで、地が動き回る。これは在来の説の逆である。天と地という自然世界に対して西洋人が示した全く異なった認識、異なった結論は、「凡致知格物ノ大ナルハ天學ナルベシ」と信じる蟠桃の世界観や学問観の根幹を揺るがすものであった。

こうした優れた方法論と優れた天文学を持つ西洋は、同時に世界の空間的構成を示す新しい学説をも次々に提出した。これに対して蟠桃は強い関心を持たざるをえなかった。新しい地理学の知識は在来の世界像を修正する契機を蟠桃に与え、その上さらに自らの世界像を構築する勇気を得させたのかも知れない。蟠桃の脳裏に浮かび上がった新しい「世界」<sup>(15)</sup>は、日本を含めた漢土やアジアの国々が頂上の真ん中に位置し、大東洋が上の左、大西洋が下の真ん中、北アメリカが左の下、ヨーロッパやアフリカが右の下に小さく書かれたものであった。これは何を意味するかというと、世界の存在の一端としてヨーロッパやアメリカ、アフリカを認めたものの、しかし日本という自己を中心に据えて、世界を見渡す姿勢は変わっていないかったということである。いうならば、これは世界に対する日本というものの主体性を強く意識したものであったとも言えよう。しかもこのような主体性意識は、蟠桃の世界への好奇心と西洋の地理学に対する信頼を損なうものではなかったばかりか、逆に新しい世界における日本という主体を一層強く意識するように促した。『夢の

代」が天文、地理を先に述べたあとで、多くのスペースを日本という人間世界のありかたに置いたのも、蟠桃のこうした内心を物語っている。

西洋の新しい存在を十分に認めながらも、日本的自我を意識し、その上に西洋の世界地理学を手掛かりにして自らの新しい世界像を組み立てようとする蟠桃の姿勢には、西洋の学問を祖述し、私見を挟まずに、純粋な西洋の視点に立って在来の世界を見直そうとする洋学系の人々とは、いくらか異なった趣きが見られる。蟠桃の場合には、西洋の学問を信頼するにはするが、洋学の受け入れと主体的自我の並立が矛盾しないという特徴があった。そのために彼は客観的に西洋の学問を評価することはあっても、それを絶対化せず、自らの判断に頼りながらそれを受け入れ、さらに展開していくことができたと言える。例えば彼は世界の五大洲説について次のように述べている。

西洋人天下ヲ巡リテ、見出ス所ノ大洲三ツ、曰亞細亞洲、曰歐羅巴洲、曰亞弗利加洲、後又二ツ、曰亞墨利加洲、曰墨瓦羅爾加洲、是ヲ五大洲ト云ナリ、ミナ西洋人ノ見出ス所ニシテ、五大洲トスルモ、又國々名ヲ付ルモ、ミナソノ命ズル所ナリ、故ニ天竺トイヘドモ、漢土トイヘドモ、我大日本トイヘドモ、皆是西洋人ニ名ヅケラレテ、印度<sup>インデヤ</sup>トシ、支那トシ、「ヤツパン」

トス、恥ベキニアラズヤ。<sup>(原)</sup>

世界の五大洲を発見した西洋人のことを紹介し、その西洋人の使った世界地理の術語を日本人がそのまま使っているのは、恥ずかしいことではないかという。西洋地理学に通用する慣用法を尊重する姿勢を強調する一方、すべての固有の読みかた（例えば、天竺、漢土、日本など）から新しい西洋出自の読みかた（例えば、印度、支那、ヤッパンなど）に変わる必要がないことをも強調していた。こうした客観性と主体性を同時に重んじる記述の手法は、各洲内の国々の紹介においても見出すことができる。例えば、最初に取り上げた亜細亞洲の項目では、日本と中国について、「大日本漢名倭、蠻名ヤッパン」、また「支那<sup>シナ</sup>蠻名ナリ、自ラ華夏ト云、中國トス、歴代國號ヲ改ム、日本ヨリ漢土ト稱ス、又唐明ト云」と記述され、感情をさし挟まずに事実をそのままに述べる姿勢を窺わせている。一方ヨーロッパについての記述にも同様な姿勢が見うけられる。その纏めかたは作者のもつ当時の西洋像を浮き彫りにしているといえよう。

意太里亞<sup>イタリヤ</sup>「エウロッパ」ノ總帝ナリ、地中海へ出ル、今「ドイツランド」ニウツル。莫斯科<sup>モスクワ</sup>未亞帝號、西洋ノ東極ニアリ、「アジヤ」ノ北邊ミナ屬ス。「ヲロシヤ」ト云、又「ユスランド」ト云。

度<sup>トルコ</sup>兒格帝號「エウラツバ」「アジャ」「アフリカ」多ク屬ス。

右ヲ西洋ノ三帝トス。<sup>(13)</sup>

蟠桃の捉えた西洋の国々は、上述の三つの老大国をはじめとして、その次は「以西<sup>イスパニア</sup>把<sup>ニ</sup>尼<sup>ア</sup>垂<sup>ア</sup>」「漢<sup>エン</sup>人<sup>グ</sup>蘭<sup>ラ</sup>土<sup>ンド</sup>」「佛<sup>フ</sup>良<sup>ラ</sup>察<sup>ンス</sup>」「度<sup>ド</sup>逸<sup>イ</sup>都<sup>ツ</sup>蘭<sup>ラ</sup>土<sup>ンド</sup>」と列強国が並び聳える。このような配列順序は同時代の洋学系の世界地理学者の西洋認識と比べると、やや時代後れで、十九世紀初期の西洋の勢力交代を精確に反映してはいなかったが、当時の西洋世界の主要勢力を揃って扱い、一応の西洋イメージを獲得しているとは言える。もともと蟠桃の関心は、西洋人の世界発見の事実とその植民地拡大の実態にあった。彼はいわゆる西洋の三帝国の一つであるロシア勢力の拡張については特別の関心を示し、その拡張ぶりを生き生きと描いた。

魯<sup>リュウ</sup>西<sup>シ</sup>亞<sup>ヤ</sup>ノ「モスコビヤ」ニ「ビーテル」氏出デ、帝位ニ即キテ、歐羅巴ノ東北ヨリ亞細亞ノ北邊、韃靼ノ半ハミナ是ニ属シ、ツヒニ東方「カムシカットカ」ノ地ニ至ル、(中略)、彼致知格物ニオケル、到ラザル所ナシ、トリ分天文地理を第一トシテ遠略ヲツトム、諸國ニ通商シテ、ソノ内ニ手ニ合國アレバ、奪ヒ取ラントス、コレマデ取テ已ガ有トシ、且遠島ニハ守禦ヲ置イテ是ヲヲサメ、通商ノ便トス、其國タニハ西ハ歐羅巴中ナレバオ

イテ論ゼズ、南モ亦然リ、サレドモ「トルコ」ノ地ヲ争鬭シ、或ハ奪ヒ或ハ失フコト多シ。<sup>(14)</sup>

続いて彼はロシアの勢力が世界的に拡張していく過程で、近くでは日本の蝦夷にまで及んでいたことや、ロシアに漂流した日本人光太夫らによって、ロシア人は日本の事を詳しく知り、さらに使者を派遣して、遠く西アメリカまでを回った後に、長崎にやって来て通商を要求したことを叙述した。<sup>(15)</sup> 行間にロシア人が世界万国に雄飛する気概を敬服する蟠桃の気持ちが見えよう。

彼萬國三千世界ヲ胸中ニ諳ジテ、隣家ニ通フガ如クスルコト易キヲシル、我輩ノ湖水ニ船ヲ泛メテ、膽ヲ冷シ恐怖スルト同日ノ論ニアラズ、ソノ大膽不敵イカナルモノゾヤ、纔ニ七八十人ノ從卒ヲヒキキテ萬國ヲ巡リ、使命ヲ辱メザルモノ、孔子ノ所謂四方ニ使シテ君命ヲ辱シメザルモノニ比スレバ、隣國ノ性情ヲ知タル地ト、知ザル地ト天地懸隔ス、我士人カカル外遠ノ國ニ至ラバ、恐怖イカガアラン、コレヲ以テ西洋人ノ智術ノ逞シキヲ知ルベシ。<sup>(16)</sup>

まるで隣の家を通るように簡単に世界万国を往来しているロシア人の行動ぶりは、蟠桃の目には大胆不敵なものであり、人間として

最高の勇氣をもつものと映った。それはまさに使命を背負い、世界万国との往来交通を通じてお互いに知り合おうとする君子の姿であつた。それに対して、わが日本の人々は、湖に船を浮かべても心細いので、まして世界万国を廻る意気込みなんか無いという。小さい世界に閉じ込めろうとする日本人と、広い世界を自由に行き来するロシア人が全く対極の存在として捉えられている。しかしこのような西洋人の世界進出に伴い、「歐羅巴國々ハ外國ヲ奪ヒ屬國トシ、代官ヲ置テ是ヲ治メ、諸國通商ノ便トス、今専ラ我國人ノ知ルモノハ『ホルランド』ノ『ジャガタラ』ヲトリ、城ヲ築キ守ルガゴトキナリ、是ヲ以テソノ底意ヲ考知ルベシ、恐ルベキニアラズヤ」<sup>(10)</sup>と述べる。多くの國を征服し、屬國にしていく側面にも言及し、勇氣と知恵の持ち主である西洋人の諸外國征服とその世界征服の日本に対する意味合いについて、注意深く觀察していかねばならぬと述べていた。また西洋人と日本人とのこの対極性は、世界進出の有無ばかりでなく、生活の至るところにも見られるものである。

ムベナル哉和漢ノ人ハ、始ヨリ字學ヲナセドモ、一生國字ヲ知盡サズ、ソノ外佛學・詩歌・茶ノ湯・謡曲・舞樂ヲ始メトシテ、無用ノ稽古藝術ニ日ヲ費シ、マタソレゾレノ生業ノ為ニ、サマザマノ諸藝諸行ヲナシテ、實ニ忠孝仁義ヲ學ビテ、身ヲ修ムルコトモナシ得ズ、況ヤ天文地理ソノ外ノ義理ニ通ジ、知ヲイタ

シ物ニ格ルヲヤ(中略)天下萬國ノ大體ヲモシラズ、唯我國ノ風俗今日ノアリサマヲ是トノミ心得テ、天變地妖外國の變事アレバ、何モ分ラズ驚怖スルバカリニテ、世ヲ過スコソ口惜ケレ<sup>(11)</sup>。

和漢の人々は仏教、詩歌、お茶、謡曲、舞樂をはじめとする無用の「虚学」ばかりに日々を費やし、実用的な諸芸や修身活動を怠り、天文地理や物理、義理の学問に関しては、無関心である。天下万国の事情をも知らず、ただ自國の風俗しか心得ていない。このような人は、不測の大變動に遇ったら、成すすべもなく、ただ恐怖を示すばかりであらう、と蟠桃は、古い社会生活に馴染んで新しい「世界」に見向きもしない世の中の「人間」たちに危機を覚えている。それと同時に蟠桃の心のなかには、西洋人を代表とするもう一つの全く新しい「人間像」が出来上がろうとしていた。

西洋歐羅巴ノ人々ハ天下萬國ニ渡リテ、天文ヲ明ラメ地理ヲ察シ、世界ノ大キナル全體ヲ辨ヘ、忠孝仁義ノコトハ本ヨリ、致知格物ノコトノミニ耽リテ、諸藝諸術ノ無用ノコトニ日ヲ費スコトナク、(中略)ユエニ萬國ヲ巡リテ大洋萬里ノ間ニ、イカナル天變妖怪アリテモ驚クコトナク、始メテ到リタル國人ニ對話ストイヘドモ、顔色變ゼズ平生ノゴトシ、況ヤ自國中ニオイテラヤ。<sup>(12)</sup>

これは現実の西洋人というよりは、蟠桃の理想の「西洋人」を描いている部分と言える。蟠桃の理想の「西洋人」とは世界万国に進出し、天文地理を実証をもって究め、世界の全体像を掴んだ人間であり、儒教の忠孝仁義説はもとより、格物致知の学に耽り、無用の諸芸術に日々を送ったりしないような人間である。このような「人間」は、世界万国に出て行っても心細く感じず、かつ難しい局面に自在に対応し、さまざまな国の人と平気で対話ができるという。この新しい「人間像」は、明らかに、世界という舞台をイメージして作られたものであった。その背後には、蟠桃の頭のなかにある東洋的な理想と西洋的な想像の混合が見られよう。こうした近世日本における「世界人」の原初形態には、十九世紀初期における日本人の強い想像力と探究心を見ることができる。西洋人の姿を借りて自らの理想像を求めようとした蟠桃は、これを機に、いっそう世界の中心の日本という自覚を深めていくのである。

#### 4 平田篤胤の「日本」発見

前述したように、十九世紀に入ってから、洋学者を中心とする知識人たちは、海外漂流民の伝聞や西洋の天文、地理及び人間に関する諸学問との接触を通じて、独自の世界像を培った。一方、その他の非洋学系知識人たちも、そうした西洋の学問や情報を伝えた蘭学

者の影響を受けながら、自らの世界像を構築し、世界における日本の存在への自覚をもつようになった。こうした人のなかの典型的な一人として、国学者平田篤胤（二七六〇―一八四三）を挙げることができよう。

平田篤胤の思想については、一般的に徳川後期の国学者として本居宣長の学問を継承して、国学から神道に近づき、その神道の宗教的色彩と実践の本質によって、幕末の変動に大きな影響を与え、明治初期の教学にも重要な役割を果たしたとされている。また篤胤には西洋文明、特にキリスト教についての認識があったとも言われている<sup>(15)</sup>。但し従来の研究では、十九世紀における新しい世界像や西洋知識が篤胤の思想、特にその日本中心主義的な傾向に与えた影響に言及してはいるものの、そうした影響を過小評価している嫌いが否定できない。事実上洋学者とは異なった学問的地盤に立つ篤胤は、西洋を含む世界の出現という現実と、西洋から伝えられてきた天文、地理の学問的な刺激によって、初めて在来<sup>(16)</sup>の国学的な視点を受け継ぎながらも、新しい世界における日本の存在に目覚めることができたといえる。彼の日本中心主義の裏には、世界における日本という厳然たる意識の存在があったことを認めなければならない。

篤胤は、一七七六年（安永五年）八月二十四日、久保田（現在、秋田市）城下の武士の四男に生まれた。幼少の時より二十歳まで山崎闇斎系の漢学を学び、その間に叔父について医学の勉強をもした。



外に武術の修業につとめた経験もあった。一七九五年に、彼はこうした平坦な勉学生活にけりをつけ、藩を脱して江戸に出た。これは彼の生活の転換点となった。その後各地で流浪生活を経たすえ、一八〇〇年に備前松山藩士山鹿流兵学家平田藤兵衛篤胤の養子となった。遊学、そして上京、そして養子となって江戸に定住するようになった篤胤は、それ以来十九世紀の初頭にかけて門人を集め、その門人に向けた講学を中心に、早くも自己の学問の好調期を迎えた。

彼の著作に話しことばが多く、常に大衆の耳を意識している啓蒙的なものが多いのはそのためである。篤胤の学問には、門人や大衆に対する説得がいつも動力として背後に隠されていると言える。篤胤にとって、目の前にいる門人や大衆が何を問題とし、どんな回答を望んでいるかということが、常に学問の原点として自覚されていたければならない問題だったのである。だからこそ今日のわれわれにも篤胤の著述を通じて、当時の大衆の心の声に触れることができるのであろう。こうした声に答えるために篤胤の著作が存在していたといってもよいからである。その大衆の声とは、まずなによりも蘭学者や儒学者を中心とするハイカラな知識社会に流行っていた外来文化崇拜に対する反発であった。

篤胤はその大衆のひそかな憤懣に力づけられ、国内外を問わずあらゆる知識を吸収しながら、日本中心的な学問を構築しようと、正統の世界とは異なった大衆向けの学問に挑戦した。彼はついに日本

を世界の中心に置いて世界を見渡す方向に動きだし、新しい世界における日本の存在を捉え直そうとする一人として登場した。彼の学問的な総合と融合とは意外にも実に幅広いものであった。中でも西洋の学問についての関心は強烈であった。<sup>(167)</sup>彼は自ら『解体新書』を四回も読んだというほどであり、西洋の学問や世界認識の分野において多くの蘭学者たちの啓蒙的な書籍に導かれていることを自ら認めている。特に西川如見や新井白石のような在来の学者、また山村才助の学問からの影響がもっとも大きかった。彼は代表作『古道大意』(文政七年、一八二四年序)において、次のように山村才助の『訂正増訳采覧異言』に論及している。

万国ノ有様ヲ。一目ニ見エルヤウニシタル物ガ。山村才助昌永ノ。増譯采覧異言ト申シテ十二卷。<sup>モットモ</sup>尤國々ノ圖モ附テキル。是ハ一體。新井筑後守白石先生ノ。采覧異言ト云書ヲ。増補イタシタルモノ。實ハ公儀ノ御息ノ掛<sup>イキ</sup>ツテ出来タルモノデ。万国ノ事ヲ知ルニハ。實ニ此位<sup>クワイ</sup>ノ物ハアリヤ致サンデゴザル。但シ是ニハ御國ノコトガ洩<sup>モシ</sup>テキル。其ノ故ハ我國ノ事デ。誰<sup>タレ</sup>モ知タルコト故ニ外國人ノ評議ヲ聞<sup>キ</sup>マデハナイ。<sup>(168)</sup>

新井白石以来の世界地理研究、特に山村才助の業績を褒めながらも、そこに一貫して見える西洋中心的な視点を批判している。この

篤胤の代表的な著作である『古道大意』を読んで印象深く感じるのは、篤胤が外国を強く意識し、それに対峙して、世界における日本を位置づけようとするその意気込みである。同著作では、彼はまた新井白石以来広く伝わった世界の五大洲説を紹介し、「扱其大地球ニ有ル國ヲ、五ニ分テ、第一ヲアジアト云ヒ、第二ヲエウロツパト云、第三ヲアフリカトイヒ、第四ヲ南アメリカト云ヒ、第五ヲ北アメリカト云フ。凡テ五ツノ大國トイヒ、又是ヲ以テ五大州トモ申スデゴザル」と言い、また日本、中国、インド等は第一洲のアジアの大国であるとし、ヨーロッパを第二の洲として、当時の世界地理の常識を披露している<sup>(18)</sup>。但し彼は洋学者たちの説を再叙述するのではなく、あくまでも新しい世界像の把握を通じて、新井白石やその他の洋学者たちとは異なった日本的な視点を打ち立てようとしていた。日本人は、早い時期から中国の『三才図会』を模倣して『和漢三才図会』を作った。『和漢三才図会』の記述内容を吟味すると、日本人には西洋文明が大量に入る前に、「中華」に対する日本の文化的主体性や相対化意識が既に出来上がっており、その後それらが発達を遂げて、日本的「中華」意識、つまり日本を中心とする対外的視点が成立していたと言える。だが、西洋との出会いによって、日本人はふたたび在来<sup>(19)</sup>の文化相対主義的視点を生かし、新たな世界における日本の主体性を再確認する新しい課題に遭遇した。にもかかわらず、西洋に向かって走りだした洋学者たちは、逆に西洋に対す

る好奇や憧れに迷わされて、西洋的な学問の視点を自らの視点にしてしまった。新井白石から山村才助に至るまで、これは無意識の基準となり、疑う余地のない慣習となりおおせていた。篤胤はまさにこのような文化的な脱主体性の傾向に批判の矢を放とうとしていたのである。

大体、文化的な主体性を主張するには、まず自国の文化を他国に比べて他国に相当するか、或いは優れているかという比較論を展開するのが普通である。さらに比較のためには一定の基準や論理も要求される。かつて中国文化に対する文化的相対化や主体性を主張する時に、日本人は中国的な「華夷秩序」の論理を以て日本の主体的文化像を打ち立てた。篤胤やその門人たちもまず西洋の学問をそのまま日本のものと見る姿勢を警戒しながら、神代以来の歴史を西洋と同じ或いは西洋以上に発展したものとする論法を作り、自らの日本中心主義を根拠づけようとした。そのような発想は、天文地理学の働きに対する理解に示唆されたところが大きい。

天文地理暦数等の學を事とするものは先づ詳に此天地の初発の有状より其運動く靈機に資て萬物の生成れる實理を知らずはあるへからざることなり而るに其天地開闢の事を説けるは何れの國なる書等も悉皆荒唐にて取に足るもの有ること無し特り御國の古傳のみは何れも實徴ありて（中略）異議あるまじき傳なり。<sup>(20)</sup>

即ち天文地理学の目的は、天地の初期状態の解明と天地万物の生成の真理を知ることであるといひながらも、天地開闢の説については、外国の書物よりも日本の古い記録の方が取るに足ると言う。これは天文地理学の働きを否定するというよりも、天文地理学の理論に、宇宙の生成や人間世界の成立に限って、日本の古典に基づいた日本的な解釈を挟み込もうとするものであった。つまり西洋の天文地理学に関して何も文句を言う立場にはないが、その宇宙生成説については、日本的な解釈を試みようとしたのである。この強い日本志向の形成に際しては、学問的な根拠だけでなく、すべて西洋を仰ぎようとするかのごとき世の風潮への反動も大きかった。

外国人のみかかる事は知りて。皇國人は絶て思ひ得まじき事に思へるは心狭し。亦などてしか皇國人を劣めて。外國人をのみ勝れりと爲るやらむ。大倭心を人に進むる人の言とも覚えざるなり。<sup>(17)</sup>

こうして何もかも外国人が日本人より優れているとする発想に痛烈な批判を加えると同時に、篤胤の心のなかには、一つの新しい日本像が浮かび上がっていた。それは万国に優れる、類を見ない偉大な、美しい日本であった。

コノ御國ハ。萬ノ外國ドモトハ天地懸隔で。何モカモ不足ナクトハナク。満足デ美シク。第一ニ命ヲツナグ米穀ガ。萬國随一ニ結構デ。此結構ナル風土水土ノ國に生レテ。結構ナル五穀ヲ。豊受姫命。スナワチ伊勢ノ外宮ノ神様ノ。厚キ御徳ニ仍テ。飽マデニ食テアル故ニ。御國ニ生レル人ハ。本ノ種ト云ヒ。トント外國ノ人トハ。同年ニモイハレヌ程。武ヅヨク聰明ニ。殊レテ居ルデゴザル。<sup>(18)</sup>

この国は、他のすべての国とは天と地ほどの差がある。この国では何の不足もなく、皆満足して美しく生きている。第一に生命に必要な米については世界最高のものを持っている。この絶好な風土と水土に恵まれた国に生まれ、世界最高の食べ物享受し、神様の厚い徳を戴いた日本人は、まさに人類の本源であり、外国の人々とは比べようもないほど力強く頭がよく、優れているという。日本人が世界万国に優れているとする論理が、風土と自然の恵みに対する認識にもとづいていることが分かる。神や自然の恵みとして最高の米を持っていることを優れた日本の象徴とする論法は、最近の米の自由化を巡る日本人の議論にも蘇った話題であった。但し、今の日本人は外国を意識して自国の風土と自然の特殊性を以て、外国の米の接近から距離を保とうとするのに対して、篤胤の場合は諸外国と

の比較を以て自国が万国に優れている構図を描こうとしていた。同時に篤胤は西洋人の目を意識して、西洋人の書物に出ている日本像を引き合いに出して、西洋人から見ても日本は優れているという根拠をいわば横の方向から示そうとしている。彼はドイツ人でオランダ東インド会社の医師として一六九〇年、日本に到来し、オランダのカピタンに随従して二回も江戸参府を経験し、同九二年帰国後『日本誌』を著したケンペル（二六五―二七六）の日本論に着目していたのである。

扱ソノ遥西ノ國ヨリ。渡シタル書物ノ内ニ。ペンケルイヒンギハンヤツパン。ト云書ガ有ル。是ヲ此方ノ言ニ直シテ見ルト。日本志ト云フコトにナル。是ハエンゲルベルベルトケンフル。ト云者ノ記シタル書物デ。此人ハ萬國ノ事ヲ委ク知ウガ為ニ。ドコノ國ト云コトナク渡テアルキ。御國ノ事ヲモ吟味シヤウガ為ニ。阿蘭陀船ノカピタント云役人ト成テ。正徳時分ニ御國ヘモ参リ。京モ江戸モ見テ。カノ萬國ノ風土記ヲ作テ。萬國ニ名ヲ知ラレ。（中略）萬國ヲアルイテ見タ所ガ。天地ノ間ニ。御國ホド結構ナル國ハ無イカラ。其事ヲ。有ノ儘ニ記シタト見エルデゴザル。<sup>(13)</sup>

ケンペルの「日本論」も、結局篤胤の目からみると一つの日本賛

美画としか見えてこなかった。世界万国を知り尽くした西洋人でさえ美しい日本を大いに賛美しているのに、その日本人自身が最高の国に生まれながら、何故いつまでも外国ばかりを褒めているのかと問い掛けた上に、篤胤はさらに縦の方向から、自らの日本優越論を裏付けようとして、インドや中国が自国より優れていると思う人と現在西洋に見劣りを感じる人に猛烈な批判を加えた。

其ハ先佛者ハ。天竺バカリヲ賛テ。彼國ハ佛ノ本國デ。尊イ國ジャ。我國ハ東方粟散國ト云テ。東方ノ海ヘ。粟粒一ツヲ流シタヤウナ國ジャ。ナドト云テ騒グ。マタ儒者ハ。漢土ヲ稱テ。彼國ハ聖人ノ國ジャ。中華ジャ。我國ハ小國デ。且夷狄ト云テ。エビス國ジャ。ナドト云テ。御國ヲ陋メル。又近頃ハヤリ初タル。阿蘭陀ノ學問ヲスル輩ハ。ヨク外國ノ様子モ知テ居ナガラ。其中ニハ。心得違ヒラシテ。又ヤミクモニ。西ノ極ナル國々ヲ鼻負シテ。譬ヘバオロシヤハ大國ジャ。（中略）日本グラキノ小國ハ。コナミゼンニモスル程ノコトダカラ。ケウトイ物ジャナドト云テ。其圖ヤ。或ハ萬國の繪圖ナドヲ出シテ。此通り日本ハ小國ジャ。ナドト云テ驚カス。<sup>(14)</sup>

天竺を賛美する仏者、漢土を賛美する儒学者、そして阿蘭陀やオロシヤを賛美する洋学者、それぞれ篤胤から見ると自国の美点を正

確に見ていなかった人たちであり、自国と他国の位置関係を正しく把握し、他の国々に対する正しい接し方を知らない人ばかりであった。篤胤の頭にある日本は、国の大小とは無関係に、美しくかつ世界の中心となる存在であった。

國もいかほど廣く大きなとて、惡國は惡く、狭小なりとて美<sup>よし</sup>國は美なり、近く萬國の圖を見るに、南極の下方に當り、甚大<sup>いと</sup>きな國ありて、この大地にあらゆる國を三つにわりて、その一つにゐるばかり大きく、それには人も住<sup>すま</sup>ず、草木さへに生<sup>おひ</sup>ぬまでなるを、大小を以て國の美惡をいはむとならば、これをし<sup>よし</sup>も美國といはむや。<sup>(16)</sup>

國は大小で善し惡しを決めるものではないと、世間の通説を一蹴した。大小よりその中身の質が重んじられるべきという。篤胤はさらに外国人の地理学の説を援用し、地理的位置についても自らの日本優越論が理論的な根拠に欠かないことを強調しようとした。

遙西の國人の、萬國の風土を委曲<sup>くわし</sup>く記せる書の中に、皇國のこ<sup>こ</sup>とをも記して、諸國土の肥澤<sup>こころあまひ</sup>で、樂<sup>たのし</sup>き地は、北緯三十度より、四十度の間に、及<sup>およ</sup>ことなく、日本はその間に位<sup>ゐ</sup>して、且<sup>そ</sup>萬國の極東方<sup>きぎひ</sup>の境<sup>さかい</sup>なるに。天神<sup>てんしん</sup>のいかなる御心<sup>みこころ</sup>にか、彼の國を殊

に德恵<sup>めぐみ</sup>まして、周廻<sup>めぐり</sup>には、嶮<sup>きかし</sup>く烈<sup>はげ</sup>き荒海<sup>あらうみ</sup>を廻<sup>めぐ</sup>らして、外<sup>ぐわい</sup>つ國の侵<sup>おか</sup>し仇<sup>あだ</sup>なむを防ぎ、またその地形をここかしこに断放<sup>たちばな</sup>して、諸の島を合せたるがことくならしめたるは、其の國々の產物<sup>くにつもの</sup>を異<sup>こと</sup>に生<sup>な</sup>て、その總國に通用<sup>わたくしもち</sup>あしめ、日本一國外國<sup>にっぽん</sup>の產物<sup>のぞ</sup>を望<sup>ぞ</sup>まず、その國に產出<sup>さんしゅつ</sup>する物にて満足<sup>みちた</sup>らしめむとてなり。<sup>(17)</sup>

日本は西洋の地理学に言われる理想的な緯度に位置している国である。しかも外敵を防ぐ天然の屏障である海にも囲まれている。この理想の土地には物産が豊富に産出され、何一つ外国に頼るものはない、と篤胤は理想国日本のために声高に讃える。「實ニ御国ノ人ニ限リテ。唐土。天竺。オロシヤ。オランダ。シヤムロ。カボチャ等ノ國ニ至ルマデ。凡テ此天地ニ有トラユル萬國ノ人トハ。トン<sup>ワケ</sup>ト譯ガ違ヒ。尊ク勝<sup>タツ</sup>レテキル<sup>(17)</sup>」と信じる篤胤から見ると、日本を先頭に、唐土、天竺、ロシア、オランダ、シヤムロ（タイ）、カボチャ（カンボジア）という順に世界が配列されていることは明らかであった。こうして「神の御國。則ち地球の都たる<sup>(18)</sup>」日本は世界を凌ぐ存在と見なされるようになった。

篤胤は、西洋の学問や最新情報を、蘭学者の記述に依拠し、それを吸収しながら、西洋の天地開闢神話を模倣して、日本の古典や神話に基づく日本独自の世界観を展開しようとした。だが、結局、遠い幻の存在としてしか西洋世界を捉えることができず、逆にその伝

説や神話のなかに出てくる現実と幻覚のミックスしたものを、従来から曖昧な日本像に投影して、古くて新しい「日本」という新天地を発見した。これによって、篤胤は蘭学者のように世界の向こう側に存在する西洋に注目するばかりでなく、世界的視野を以て日本を見つめ、その世界における日本の位置づけに自らの学問の意味を見出そうとしていたのである。

凡そ国学者平田篤胤一門が篤胤流の日本中心主義を高唱しているのと同じ時期に、後期水戸学の理論的な指導者で、尊攘派の中心人物であった会沢正志斎（一七八二～一八六三）も『新論』（一八二五）という書を著し、「国体」の主張や鋭い情勢分析を以て、時局対処の新政策を提起するとともに、自らの世界認識及び神道・儒教の思想的な枠組みに基づいて、幕末日本を彩るもう一つの日本像を描き出そうとしていた。

会沢正志斎は常陸久慈郡諸沢村の出身で、かつて十歳の時より藤田幽谷（一七七四～一八二六）に学び、のちに水戸藩士として藩政改革・尊皇攘夷運動を推進し、神道と儒学を合わせた大議名分を唱えた。若き正志斎については、藤田幽谷に師事した頃、強気で、高慢なところがあったが、師の幽谷に度々注意され、ついに氣質を一変して穏やかな君子になったという逸話が伝えられているぐらいしか知られていない。彼が水戸学の世界に頭角を現したのは、やはり一八二五年の『新論』の成稿以後である。幕末の尊皇尊攘の思想的

先駆を成す『新論』は二巻で、国体・形勢・虜情・守禦・長計の五編に分けられている。この書は未刊のまま広く読まれていたが、一八五七年に正志斎の門人たちによって初めて密かに刊行された。

『新論』において、われわれは作者が当時の世界やその世界における日本の位置づけを強く意識し、その上で新しい日本像の構築に懸命であることを見ることができる。まずいわゆる「万国」について、彼は次のように述べている。

夫れ地の大洋に在る、その大なるもの二あり、一はすなわち中国及び海西諸国・南海諸島、これなりへその地、東は京師以東二十五度の地に起り、西は京師以西七十五度の地に至る。或は称して亜細亞・亞弗利加・欧羅巴と曰ふものは、西夷の私呼するところにして、宇内の公名にあらず、且つ天朝の命ずるところの名にあらず、故に今は言はず。一はすなわち海東諸国、これなりへ西は京師以東五十度の地に起り、東は九十五度の地に至る。或は称して南亞墨利加・北亞墨利加と曰ふものも、また西夷の名づくるところなり。

この場合の「中国」が日本を指していることは明らかである。海西諸国はアジア・アフリカ・ヨーロッパのこと、南西諸島は東南アジア・オセアニアのことをそれぞれ示している。括弧のなかに、正

志斎は亜細亜・亜弗利加・欧羅巴という西夷の地理学的呼称を使わないことを断りながらも、一応西洋が伝えた地理学通りに、世界の範圍と区域を分けている。西洋の地理学的概念を普遍的なものとして認めない態度を示すには示したが、西洋の提起した世界像をそのまま利用している。さらに日本を「中国」と呼んで、日本を世界の中心国として位置づけている。「中国」という呼称は、中国的な文明との結び付きを意識せず、単に「世界の中心となる国」の意味に使われていた。こうした日本を世界の中心に据えて、世界を眺める姿勢は、国学者篤胤との思想指向に完全な一致を見せている。かつて正志斎は日本精神を讃えた本居宣長の『直毘靈』に対して、『読直毘靈』を書き、水戸学と国学との相違を強調した。しかし世界と日本、つまり世界における日本存在の論に関する限り、宣長の弟子と自称する国学者篤胤と水戸学者正志斎の間には、むしろそれぞれ似通ったものが見えている。それは、そのまま彼らの日本像を支える思想基盤となっていたのである。

ところが篤胤たちが苦心して構築した「日本像」は、結局日本の存在を誇大視し、虚妄に陥りがちなものであった。これは、彼らの西洋世界への認識がまだまだ不十分であった事情を物語るにせよ、世界における日本の位置づけに真剣に取り組んだこと自体は、その後の日本人の目指すべき方向を暗示したものであった。

また篤胤の「日本」発見は、その門徒たちの思想指針ともなった。

篤胤に国学を学んだ佐藤信淵（さとうのぶひろ）（二七六九〜一八五〇）は、こうした日本中心論に刺激を受けて、日本と諸外国の関わりに取り組んだ一人であった。信淵は特有の天文学・地理学的な知識を使って篤胤の古史伝を段ごとに解釈した書物『天柱記』の自序に、自ら幼少より天文曆数を好み、中国、インド、蕃夷の諸書をあまねく読んだが、天地生成の説に関しては、一つも取るに足るものがなく、近頃篤胤の『靈真柱』を見るに及んで、始めて天地の運行、万物の生成は、悉く産靈神の産靈の御靈に因（因）っていることを知った、と告白している。これは篤胤の世界観が、信淵の思想形成に大きな影響を与えたことを示唆している。

日本を中心に問題意識を展開する学問方向においては、信淵も全く篤胤と軌を一にしていた。信淵の場合は、進んで世界各国を野蠻の域から救い出すのが皇国日本の専務であると考え、世界を一つにして、その頂上に日本が存在するという論理を作っていたのである。彼は『混同秘策』においてそのような視点を明確に示し、篤胤との思想的な連帯関係を浮き彫りにしている。

皇大御國は、大地の最初に成れる國にして世界萬國の根本なり、故に能く其根本を経緯するときは、則全世界悉く郡縣と為すべく、萬國の君長皆臣僕と為すべし、（中略）世界萬國の蒼生を濟救するは極て廣大の事業なれば、先づ能く萬國の地理形勢を



明辨し、其の形勢に従て天意の自然に妙合するの處置なければ、  
産靈の法教も得て施すべからざるなり。<sup>(18)</sup>

世界の根本存在として捉えた日本像は、篤胤の像の再版ということができる。彼はまた、全世界を日本の版図に入れて、世界の君長を皆日本の臣僕とする日本の国家構想をはっきりと示していた。信淵は日本人として、世界万国の地理を学ぶだけでなく、世界の中心である日本についてもっと知るべきであるという。一方、彼の描いた世界の中心である日本のイメージも、篤胤のそれとそっくりであった。

今夫萬國の地理を詳にして我日本全國の形勢を察するに、赤道の北三十度より起て四十五度に至り、氣候温和、土壤肥沃、萬種の物産悉く満溢せざること無く、四邊皆大洋に臨み、海船の運漕其便利なること萬國無雙、地靈に人傑にして、勇決他邦に殊絶し、宇内を鞭撻すべきの實徴全備せり、其形勝の勢自ら八表に堂々として、此神州の雄威を以て蠢爾たる蠻夷を征せば、世界を混同し萬國を統一せんこと、何の難しきことかあらん哉。<sup>(19)</sup>

信淵は篤胤の日本像を、さらに明確にした上、そこから世界統一の使命を持つ日本像へと発展させた。その日本の国家構想を実現す

るために、信淵は、まず世界でもっとも大きい国の一つである清国を征服することを提案した。彼はその実行の順序としてまず満州を攻取し、そこから燕京を衝き、最後は清国全土を日本の版図に入れ、さらに軍を進めて世界万国を征服するというプロセスを示していた。これは明治維新後、第二次世界大戦の敗北に至るまでの八十年間、日本の対外侵略主義の歩んだ道を取ったものにほかならなかった。

しかし、十九世紀四十年代になると、信淵は清国と英国の間に起こったアヘン戦争を通じて、西洋の実力の強さを思い知らされた。在来の世界征服論が、非現実的だと悟ったためか、彼は新たな西洋認識に基づいて、『存華挫狄論』を著し、現実の東西勢力の均衡を維持する方向に自らの国家構想を改めた。それは、日本対全世界という構想に代わり、アジア対ヨーロッパの構図を以て、新しい世界像を現そうとするものであった。

天地無私と雖ども、四大洲の人性不同を奈んともすることなし、蓋し亜細亞洲人は禮を崇び義を行ひ、各確然として其境界を守り、他國を侵伐し他人の物を奪ひ取るの念寡し、故に遠く海外に出でて利欲を業とする者あること稀なり、又歐羅巴洲人は利を好み欲を縦にし、欺き奪ふの念深くして貪り悻して飽くことなし。<sup>(20)</sup>

彼は世界の極点に立つ日本からアジアの一部としての日本に戻り、かつて清国をはじめとする世界全体を征服する論理を忘れたかのよう<sup>(18)</sup>にアジアとヨーロッパを比較し、平和的なアジアに対するヨーロッパの侵略的性質を説いた。さらに彼はヨーロッパの侵略に直面している東洋諸国の連帯を訴えた。現実的に迫ってきた国家的危機に臨んだ対応策として、清国の保存を以て西洋人の進出を阻止せよ、とその場凌ぎの口調を渗みださせながら次のように述べた。

古人有言曰、唇亡齒寒と、自今以後清國益式微して振ふこと能はざるに至りては、西夷貪悍無飽禍恐くは本邦に鐘まらん、可不慮哉、是を以て愚老竊に清國の復び興りて、永く本邦の西屏たらんことを欲す。

強力な西洋世界の出現は、日本が世界の中心ではないという事実を宣告した。西洋の実力に対する甘い推測に基づく世界像がもはや成り立たないと思い知らされた信淵は、過去の説に固執できず、現実の事態の打開のため柔軟な姿勢を示さざるを得なくなったと言える。彼は西洋の圧迫を目の前にして、日本の存亡のために、まず東洋の一員に加わらなければならないと悟ったのであろう。これは師の平田篤胤が苦心して構築した日本像から、世界の中の一国、しか

も東洋の一国という日本像に切り換えたことを意味している。但し、篤胤の日本中心主義的な世界像は、西洋の軍事的な圧力によって、幕末激変の風雲のなかに一時影を潜めたものの、これがぎり日本において完全に葬られたわけではなかった。それは幕末の尊皇攘夷の思想的な流れにおいても、明治時代以後の国粋主義者、日本主義者たちにおいても、依然として文化的主体性を求める精神的な源泉として生かされることになる。また西洋技術の威力を借りた自国膨張の理論的根拠に利用されることを通して、今日に至るまで日本人の対外意識の二重心理構造を産出し続けている。

## 5 まとめ

近代以降の日本では「アジア」という概念がいつも「ヨーロッパ」の対極として意識されている。明治期日本に流行した「脱亜入欧」論は、過去のものとして時代の流れのなかに消えつつある一方、平成の日本ではその逆の「脱欧入亜」さえ叫ばれるようになった。ただし多くの人は必ずしも、いまなぜアジアか、ということを正確に理解しているとは限らず、「脱欧入亜」論も、本質的にいままでの日本人の文明意識の延長に過ぎないかもしれない。かつて近代化の過程で抱かれた、憧れの「欧州」と憎しみの「亜州」というイメージが、歴史の残像としてしか存在しなくなった今日でも、ヨーロッパやアジアという言葉に、感情的な響きを感じる日本人はまだ多

い。

そもそも徳川時代の前半には、「欧州」も「亜州」も、中国經由で入ってきた西洋地理学において、地域範囲を指し示す名詞にすぎなかった。その時代の人々は、日本、中国、天竺、南蛮といった名称からは空間的な広がり以外の何ものも想像することができなかったのである。マテオ・リッチをはじめとする宣教師たちが伝えた西洋地理書は、最初は中国や日本の知識人に世界の空間的な拡大を意識させただけで、それに本格的な文明的な価値を持たせたのは、中国ではアヘン戦争（一八四〇～四二）後の知識人、魏源（一七九四～一八五六）らであり、日本では十八世紀後半以後の蘭学者や洋学者たちであった。つまり、これらの固有名詞に特別な意味内容や感情的色彩が盛り込まれるようになったのは、西洋という漠然とした世界に対する知的な模索と対話がはじまって以後のことであった。イタリア人宣教師シドッチに、中国經由で学んだ空間的・平面的な「世界」を、より実体的な存在として確かめ、自らの感覚で捉えようとした新井白石はその最初の一人と言える。こうした西洋を含む世界像の把握を通じて、旧来「世界」を批判する指向は、新井白石だけでなく、後の知識人にも明らかに見られる。前野良沢や杉田玄白らの蘭学者や洋学者、さらに平田篤胤、佐藤信淵、会沢正志斎なども、その代表的な人物である。こうして日本人は想像的な世界像から現実的な世界に入り、新しい世界像と自国像、ひいてはアジア

像を抱くようになった。それは明治時代の「脱亜論」に至って、最終的に日本人の世界意識として定着したと言える。

十八世紀末頃まで、日本人はアジアを相対化し、その不備を批判する一方、新たな世界像の構造をいち早く模索し、そこでの日本の位置を必死に捉えようとしていた。だが十九世紀になると、経験したことの無い外圧に衝撃を受けた日本人は、世界への関心をさらに強めた反面、それまでの、世界を見る相対的な視角を失いかけたのである。さらに幕末維新期には、新しい世界を文明的に序列化する風潮のなかで、西洋を絶対視し、それがそのままアジアに対する全面否定につながった。こうして、近世中葉から近代初期までの日本の近代化の未来が、いつも明暗両面の前景を伴っていることを示唆していた。

ところで、改革開放を声高に叫ぶ今日の中国では、アジアとかヨーロッパとかという概念にあまり特別な感情を抱いてはいない。例えばアジアと言っても、漠然とした地理的な範囲しか想起できず、むしろ西洋や東洋という概念に、もっと深い意味と文明的な響きを感じるのかも知れない。

明の中期に、イタリア人の宣教師マテオ・リッチは、漢字表記の、しかも中国を中心に描いた世界図を通して、中国人に新しい世界像を提示し、五大洲の呼び名（「亜細亞洲」「歐羅巴洲」「亜墨利加洲」「利米亞洲」……）を紹介した。これは中国人の、世界に対する空間

的な認識に多少の刺激を与えたものの、自国を天下の中心と思っている人々に西洋世界の存在を強く意識させることができなかった。

朝廷を含む一部の知識人があえて宣教師たちとつき合い、天文、地理、数学その他の技術や知識を積極的に吸収したのも、西洋のものをもって補うと信じこんでいたからである。リッチに教わった中国知識人、徐光啓（一五六二―一六三三）は、天主教（カトリック）が儒教を補うと信じて洗礼を受け、中国暦数学に西洋の学問を積極的に取り入れながら、同時に科挙の試験で進士にも及第した一人である。徐光啓は西洋世界の存在を認めはしたが、中国に優位する西洋はもちろん、中国と西洋との相対的關係さえも意識していなかった。

このような西洋認識は、やがてカトリック宣教師から西洋の新しい文明の情報が伝わらなくなった清代後半には、西洋への一層の無関心をもたらした。在来の天下世界に安住する清朝中国の人々にとっては、世界とは何か、世界における中国とは何かという問題は自明であり、究める必要がないものであった。日本の洋学者、そして儒学者、国学者たちが、徳川時代後半の世界像の模索への機運を大きく作り出したのに対して、同時代の中国では、アヘン戦争前後に、林則徐（一七八五―一八五〇）や魏源などによる世界再認識の動きが登場するまで、相当する動きがなかった。ここに、その後の両国の近代化の分水嶺を見ることができる。

## 注

(1) 沢野忠庵編述。西欧の世界観・自然像といったものを体系的・組織的に伝え、思想上もっとも大きな影響を及ぼしたものである。

沢野忠庵は本名をクリストヴァン・フェレイラ (Christovão Ferreira) というポルトガル人であり、キリスト教を弘めるために日本にやってきたイエズス会士であるが、後に棄教して幕府の用をつとめていた。寛永二十年（一六四三）に日本に潜入したキリスト教宣教師達がラテン語で書かれた西洋の一天文書を幕府に献じて、沢野忠庵がその翻訳や編術に当たった。『乾坤辨説』は上下四巻で、当時の西洋科学の内容を盛り込んだもので、「地球説」という西欧の伝統的自然学を取り上げているが、また「地動説」まで至っていないかった。

(2) 伊東俊太郎「転び伴天連の偉業沢野忠庵の再評価」、「比較文明と日本」中央公論社、一九九三年再版、一三五頁。

(3) 鮎沢信太郎「西川如見の『華夷通商考』について」、「歴史地理」第七七巻第一号、一七頁参照。

(4) 加藤周一「新井白石の世界」、日本思想大系『新井白石』岩波書店、一九七五年、五五一頁参照。

(5) 前掲書『西洋紀聞』中巻、七五六頁。

(6) 同右。

(7) 鮎沢前掲書、九三頁参照。

(8) 前掲書『西洋紀聞』中巻、七五六頁。

(9) 杉田玄白『蘭学事始』岩波書店、一九八八年、一一頁。

(10) 八代將軍吉宗は科学技術の振興をはかり、一七二〇年（享保五

- 年) 禁書令を緩和して、科学書の輸入を認める措置を取った。
- (11) 大槻玄沢『六物新誌』一七八六年(天明六年)刊、西洋薬学についての訳書。
- (12) 「管蠡秘言」序、日本思想大系『洋学上』岩波書店、一九七六年、一二九頁。
- (13) 後に天保年間、帆足万里が『窮理通』という物理学書をもって広く自然現象、文化現象の全般にわたり説明をしたが、これは良沢の枠組みに近い扱いだと言える。更に福沢諭吉の『窮理図解』等の翻訳書により、窮理学という概念で、西洋の物理学を言い表すようになった。良沢では、天理、地理、人理という幅広い学問のカテゴリーとして使われているのが分かる。
- (14) 前野良沢『和蘭訳文略』、前掲日本思想大系『洋学上』、七四頁。
- (15) 前野良沢『管蠡秘言』、同右、一七九頁。
- (16) 同右、一四四頁。
- (17) 同右、一四五頁。
- (18) 同右、『略説六大洲』『管蠡秘言』、一四五頁。
- (19) 同右。
- (20) 同右。
- (21) 同右、一四七頁。
- (22) 鮎沢信太郎(他)編著『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社刊、一九五三年、三六七頁を参照。
- (23) 大槻如電原著『日本洋学編年史』錦正社刊、一九六五年、二二三頁を参照。
- (24) 杉田玄白『狂医之言』、前掲日本思想大系『洋学上』、二二九頁。
- (25) 同右。
- (26) 同右、二三七頁。
- (27) 前掲、杉田玄白『形影夜話』、二六八頁。
- (28) 前掲、杉田玄白『野叟独語』、二九一頁。
- (29) 同右、二九三頁。
- (30) 同右、二九四頁。
- (31) 同右、二九五頁。
- (32) 同右、三〇〇頁。
- (33) 芳賀徹「十八世紀日本の知的戦士たち」、『日本の名著 杉田玄白 平賀源内 司馬江漢』中央公論社、一九七一年、参照。
- (34) 司馬江漢は覗き眼鏡、耳鏡(補聴器)、オランダ茶臼(コーヒークッキー)等を工夫する技術家の一面もあった。
- (35) 西洋の社会制度や教育事業を紹介したうえに、開国貿易論や人間平等説をも初歩的に持っていた。
- (36) 晩年には西洋自然科学と老荘思想にもとづく独特の人生の哲学が形成されている。
- (37) 司馬江漢『江漢西遊日記』、『司馬江漢全集』(第一巻)八坂書房、一九九二年、三一〇頁。
- (38) 芳賀前掲書参照。
- (39) 司馬江漢『おらんだ俗話』、前掲全集第三巻、一一九頁。
- (40) 司馬江漢『和蘭天説跋』、前掲日本思想大系『洋学上』、四八六頁。
- (41) 同注(39)、一二三頁。
- (42) 司馬江漢『和蘭通舶巻之一』、同右、一五二頁。

- (43) 同右。
- (44) 同注(39)、一二三頁。
- (45) 同右、一二六頁。
- (46) 同右。
- (47) 司馬江漢前掲書、全集第四卷、一九頁掲載。
- (48) 成瀬不二雄「司馬江漢の生涯と画業」、同前掲書、三七二頁参照。
- (49) 本多利明「『西域物語』自序」、日本思想大系『本多利明 海保青陵』岩波書店、八八頁。
- (50) 同右、『西域物語』上、九〇頁。
- (51) 同右、九二頁。
- (52) 同右。
- (53) 同右、九三頁。
- (54) 同右、九八頁。
- (55) 同右、九九頁。
- (56) 利明の小宮楓軒あての一七九九年(寛政十一年)正月二十一日付書簡にこの書に言及。
- (57) 一六〇〇年、J・ゴットフリート著、原名「世界の初めから一六〇〇年までに起こった記念すべき事件を記した紀年歴史書」。
- (58) 本多利明前掲文、九九頁。
- (59) 同右、一〇〇頁。
- (60) 同右、一〇六頁。
- (61) 芳賀徹前掲論文「十八世紀日本の知的戦士たち」では、江漢が飢餓にある民衆を見て、一種の人間的連帯感を覚えたと指摘し、様々の社会的制約がこの町人学者に息苦しく感じられていたと言う。

- 七二頁参照。
- (62) 本多利明前掲文「『西域物語』中」、一二四頁。
- (63) 同右。
- (64) 大槻玄沢『蘭学会盟引』、杉本つとむ解説、森島中良、大槻玄沢『紅毛雑話・蘭説弁惑』(生活の古典双書6)八坂書房刊、一九七二年、二一五頁。
- (65) 前掲書、大槻玄沢「『蘭説弁惑』巻之上」、一四六頁。
- (66) 一七八三年成稿、一七八八年刊行、『蘭訳梯航』序には「翁廿五六ノ時、蘭学階梯トイエル小冊二巻ヲ著シ」というのがある。
- (67) 大槻玄沢『蘭学階梯』巻上、前掲日本思想大系『洋学上』、三三三頁。
- (68) 朽木昌綱『蘭学階梯叙』、同右、三一八頁。
- (69) 孔平信敏「蘭学階梯の首に題す」、同右、三一九頁。
- (70) 例えば、大阪の懷徳堂学派の人々も世界像の拡大に従って頻繁に地球説に基づく「万国」の言葉を使っていたし、中国優越論への批判も盛んだったと同時に、彼らのオランダ人像は実学に長じ、虚妄なことを信じないという理性的人種のイメージでもあったという。また早くも地動説に注目した町人学者山片蟠桃は中国の宇宙説を「管ヲ以テ天を窺フガ如クナル」と批判して、西洋社会の実見による宇宙説や地理学を高く評価した。
- (71) 孔平信敏「蘭学階梯の首に題す」、大槻玄沢前掲書、三三二頁。
- (72) 『論語・雍也』「質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子」。
- (73) 大槻玄沢前掲書、三七九頁。

- (74) 清の聖祖康熙帝（一六五四～一七二二）の命によって編集された西洋學術（曆学・数学・音楽）の書物で、雍正二年（一七二四）に出版された。その中に『曆象考成』上編十六卷・下編十卷・表十六卷があり、これらは日本の寛政曆法の基礎とされ、日本の曆学に大きな影響を与えた。
- (75) 同注（73）。
- (76) 同右。
- (77) 同右、三七九頁。
- (78) 大槻如電『磬水事略』、大槻茂雄編『磬水存響』坤、思文閣出版、一九九一年復刻、五一八頁。
- (79) 杉本つとむ解説『環海異聞』八坂書房、一九八六年、一一一二頁。
- (80) 同右、一二一二三頁。
- (81) 同右、一三一四頁。
- (82) 同右、一五頁。
- (83) 同右、一九頁。
- (84) 『捕影聞答』前編は大槻茂（木）貞編『婆心秘稿』に収められた対外関係の文献の一つである。後者は第一冊が玄沢の対外論として有名な『捕影聞答』前後編のほか、文化四年六月に利尻島を襲撃したロシア人が残した松前奉行あての書簡の翻訳をめぐって記された『丁卯秘蘊』と『捕影聞答』の要約版というべき『伊祇利須疑問』、それに『捕影聞答』の末条を抄録した『問目草案』からなっている。
- 『捕影聞答』は、やはりヨーロッパの動乱の様相や一八〇六年以来のロシアとの紛争に対する日本人の対処を問うものであるが、それをきっかけとして、イギリス問題も明らかに浮かび上がっている。
- (85) 石山洋『環海異聞』の成立をめぐって―大槻玄沢の海外事情研究の一―、洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版、一九九一年、二四六頁参照。
- (86) 大槻玄沢『捕影聞答』、前掲日本思想大系『洋学上』、四〇一頁。
- (87) 同右、四二五頁。
- (88) 大槻如電修『新撰洋学年表』柏林社書店、一九二七年発行、一九六三年再版。九二頁。
- (89) 江戸後期に改正された曆。高橋至時や間重富が西洋の天文学を取り入れて作った清の曆を参照して作成。一七九八年より一八四二年天保曆が制定されるまで使用された。
- (90) 同注（3）。
- (91) 原文は漢文。
- (92) 原文は片仮名。
- (93) 鮎沢信太郎『山村才助』吉川弘文館、一九八九年版参照。
- (94) 同右、二七二頁参照。
- (95) 鮎沢氏によると、例えば西村遠里の『万国夢物語』（二七七四）にはこれを参考にした痕跡がある。さらに三浦梅園の『掃山録』（一七七八）や『五月雨抄』に見える世界地理も、殆ど『采覧異言』から出た知識と言える。
- (96) 山村才助『訂正増訳采覧異言』凡例、『訂正増訳采覧異言』（上冊）蘭学資料叢書Ⅰ、青史社、一九七九年、二二二―二四頁。
- (97) 同右、二五頁。
- (98) 同右、二六頁。



- (99) 新井白石前掲『采覧異言』巻一。
- (100) 山村才助前掲書、一三二頁。
- (101) 新井白石前掲書。
- (102) 山村才助前掲書、一三二頁。
- (103) 杉田玄白『蘭学事始』(下之巻) 岩波書店、一九八八年再版、五九頁。
- (104) 大槻磐水『訂正増訳采覧異言』序、山村才助前掲書、一四頁。
- (105) 杉田玄白の養子。紫石は一七七八年(安永七年)十六歳の時、杉田家に養子となり、一七八九年(寛政元年)玄白の長女扇と結婚し、文化十四年玄白の後を継いだ。
- (106) 杉田紫石『訂正増訳采覧異言』序、山村才助前掲書、八頁。
- (107) 松平定信が老中の時、昌平坂学問所の儒官となり、寛政の三博士の一人に数えられる。
- (108) 鮎沢前掲書『山村才助』参照。
- (109) 同右、二六四頁参照。
- (110) 東京大学図書館所蔵の『訂正増訳采覧異言』の善本に見える。
- (111) 平田篤胤『古道大意』下。平田篤胤全集刊行会『新修平田篤胤全集』(第八巻) 名著出版、一九七八年。
- (112) 高瀬重雄「山村昌永とその『訂正増訳采覧異言』について―幕末における洋学史の一断面―」『金沢経済大学論集』(一九七九年、Vol.12)、五二頁参照。
- (113) 前掲鮎沢、大久保『鎖国時代日本人の海外知識』「西洋史の部」参照。
- (114) 菅沼貞三『渡辺華山(人と芸術)』二女社、一九八二年。
- (115) 「鳥島」は「亜鳥」の誤記。現在のオセアニア州を指す。渡辺華山『外国事情書』、日本思想大系『渡辺華山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』岩波書店、一九七二年、一八頁。
- (116) 同右、一九頁。
- (117) 同右。
- (118) 同右、二二頁。
- (119) 同右、二〇頁。
- (120) 同右、二二頁。
- (121) 渡辺華山『慎機論』、同右、六九頁。
- (122) 同右、八一頁。
- (123) 同右。
- (124) 『外国事情書』、同右、二四頁。
- (125) 『駄舌或問』、同右、八一頁。
- (126) 同右。
- (127) 同右、八二頁。
- (128) 同右、八六頁参照。アメリカに対する情報や認識が相対的に不足していたのである。従って後に来航したアメリカ人ペリーの船に対する日本人の対応を決めるには、中国から新しく伝えられた世界地理書、例えば魏源の『海国図志』などのアメリカ論の寄与を待つ以外になかった。
- (129) 渡辺華山『慎機論』、同右、七〇頁。
- (130) 同右、六九頁。
- (131) 同右、七二頁。
- (132) アヘン戦争における清朝中国の敗北が、最初に日本に響いた事

例は、一八四二年（天保十三年）年七月の「薪水給与令」の発布である。これによって一八二五年に出来た「異国船打払令」をやめ、来航の外国船に薪水・食糧の給与を許可することになる。同じ一八四二年に、清国とイギリスの間に『南京条約』の調印が行われた。

(133) 十八世紀と十九世紀の世界地理知識の最大の違いは、イギリスのクック (T. Cook) による南太平洋探検によって、在来謎の大陸メガラニカに代わって、オーストラリアやニュージーランド等の南海諸島が次々と明らかにされたことである。これによって西洋における一七八〇年代以後の世界地図は一新された。

(134) フランスのノエール・ショメールの編纂した百科辞典をさらにオランダのデ・シャルモットが増訳訂正したものを基本に幕府の命によって編訳したものである。その内容は天文・地理・医学・物理・化学・動物・植物・鉱物・生理・衛生・薬学・農業・工芸などにわたり、訳業は一八一一年（文化八年）に始まって以来、三〇年近くを費やして一八三九年（天保十年）に至って終了した。質においても量においても幕末における最大の翻訳と言われる。編纂に関わった蘭学者たちはいずれも世界地理学にも関係の浅くない人々であったので、幕末の西洋事情の研究に寄与したと言える。

(135) 石山洋「箕作阮甫の海外知識」、洋学史学会研究年報『洋学二』（特集・箕作阮甫）八坂書房、一九九四年、七〇頁参照。

(136) 例えば、『海上炮術全書』（一八四三）や『日本風俗備考』（一八四六）の翻訳を分担した。また一八四六年五月、米国東インド艦隊司令長官ビッドル (J. Biddle) が江戸湾口に来航して開港を要求した時、その外交文書の翻訳に当たった。さらに一八五三年米国のベ

リーが開国を要求した時、杉田玄白の孫にあたる杉田成卿とともに「異国書翰横文和解翻訳御用掛手伝」を命ぜられた。

(137) 呉秀三は、養子の名前で出たこれらの著作について、「阮甫の筆と心とを労したことは少なくない。阮甫の著述と云ふてもよい位のものである」という。呉秀三『箕作阮甫』同朋舎、一九七一年複製、参照。

(138) 幕末の幕臣。一八五二年勘定奉行兼海防掛となる。

(139) 徳川後期の儒学者。江戸の人、幼より学問を好み、十六歳の時、昌平黉に入る。後に浜松藩主水野忠邦の儒官となつて、さらに幕府の執政となるに及び、清国のアヘン戦争並びに米船渡来のことについて、しばしば書を書いて海防を論じ、將軍徳川家茂に召されて幕府の儒官となる。海防論には主に『阿芙蓉叢聞』『籌海私議』などがある。

(140) 豊臣秀吉の征韓の時に朝鮮の左相柳成龍が目撃した所を記したものの。十七巻。一六九五年（元禄八年）日本で翻刻して、四巻とした。

(141) 塩谷岩陰「翻采海国図志」序、塩谷甲蔵・箕作阮甫全校『海国図志・籌海篇』江都書林、一八五四年（嘉永七年）甲寅七月刻。

(142) 同右。

(143) 同右。

(144) 例えば「合衆国」、「華盛頓」、「地質学」などは、これらの漢籍世界地理書に由来している。

(145) 箕作阮甫『臨終賦詩』、呉秀三前掲書、一九六頁。

(146) 一八〇二年に『幸我の償』という題で執筆を始める。一八二〇

年『夢の代』として仕上げる。

(147) 山片蟠桃『夢の代』巻一の三三、瀧本誠一編纂『日本経済大典』

(第三七巻) 啓明社、一九二九年、一一六頁。

(148) 同右、『夢の代』巻一の三二、一一四頁。

(149) 同右、『夢の代』巻一の三〇、一二二頁。

(150) 源了圓「先駆的啓蒙思想家蟠桃と青陵」、日本の名著『山片蟠桃海保青陵』中央公論社、一九八九年、四六頁参照。

(151) 同前掲、『夢の代』巻一の二三、六七頁。

(152) 同右、『夢の代』巻一の二五、九二頁。

(153) 同右。

(154) 太陽は宇宙の中心に静止し、地球は太陽のまわりを回転するという説。太陽中心説ともいう。アリストアルコス及びコペルニクスによる。日本への「地動説」のはじめての紹介は、長崎の通詞本木良

永(一七三五〜九四)が訳した地理書『和蘭地球図説』(三巻、一七

七二年訳、原本は不詳、一七四五五年の出版だったらしい)の巻一

「地球并ニ地図諸圖ノ事」においてである。また同氏は寛政五年(一

七九三)に訳した『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』(七

巻)において、地動説を基調として太陽系の説明を施していた。地

動説は、その後日本知識人のなかに浸透し、世界観の変遷に大きな

影響を及ぼすものとなった。例えば思想家三浦梅園(一七二三〜八

九)はその『扁山録』において、一七七八年(安永七年)に長崎を

訪れて地動説を聞いたという記述をしている。この耳新しい説はき

つと梅園の自然哲学に何らかの刺激を与えたに違いない。一七八八

年(天明八年)絵画の研究を目的として長崎に赴いた司馬江漢も、

良永から地動説を聞いたのをきっかけに西洋の天文地理学に目を開き、その自然認識を躍進的に発展させたといえる。彼は自ら銅版世界図をつくったりして、新しい世界像を広く庶民層にも押し広げようとしたのである。蟠桃の「地動説」に関する知識も基本的に本木に基づいている。広瀬秀雄「洋学としての天文学―その形成と展開―」、前掲日本思想大系『洋学下』、四二九頁。

(155) 同前掲、『夢の代』巻一の二八、一〇四頁。

(156) 同前掲、一五七頁の「地球凸凹袖之如キ図」を参照。

(157) 同前掲、『夢の代』巻二の二六、一七〇頁。

(158) 同右、一七二頁。

(159) 同前掲、『夢の代』巻二の一九、一七九頁。

(160) 一八〇四年にロシア使節レザノフが、長崎に漂流民を護送し、

通商を要求した。

(161) 同前掲、『夢の代』巻二の一九、一八〇頁。

(162) 同前掲、『夢の代』巻二の二〇、一八四頁。

(163) 同前掲、『夢の代』巻二の一九、一八一頁。

(164) 同右。

(165) 村岡典嗣「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」、『増訂日本思想史研究』岩波書店、一九九四年第七刷、三二二頁。

(166) 芳賀徹訳、ドナルド・キーン著『日本人の西洋発見』中央公論社、一九八六年。同書第六章「平田篤胤と洋学」には篤胤の借用した西洋科学や西洋神学の知識について詳しい紹介がある。

(167) 平田篤胤「志都能石屋講本」下、平田篤胤全集刊行会『新修平田篤胤全集』(第一四巻)名著出版刊、一九七七年、四九八頁。

- (168) 篤胤前掲書『古道大意』下、全集第八卷、一九七六年、六〇頁を参照。
- (169) 同右、五七頁。
- (170) 篤胤前掲書、『天之御柱之記』上都巻、全集第一二巻、一九七七年、五頁。
- (171) 篤胤前掲書、『天説弁々』上、全集第七巻、二五頁。
- (172) 篤胤前掲書、『古道大意』下、全集第八巻、五六頁。
- (173) 同右、六〇頁。
- (174) 同右、六八頁。
- (175) 同前掲書、『靈の眞はしら』上、全集第七巻、一一〇頁。
- (176) 同右、一〇八頁。
- (177) 同前掲書、『古道大意』上、全集第八巻、二九頁。
- (178) 同前掲書、『伊吹於呂志』上、全集第一五巻、一九七八年、一二二頁、参照。
- (179) 会沢正志斎『新論』形勢編、日本思想大系『水戸学』岩波書店、一九七三年、八八頁。
- (180) 佐藤信淵『天柱記』序、前掲『新修平田篤胤全集』(第一二巻)、三頁。
- (181) 佐藤信淵『混同秘策』、瀧本誠一編、復刻版『佐藤信淵家学全集』(中巻) 岩波書店、一九九二年、一九五頁。
- (182) 同右。
- (183) 佐藤信淵『存華挫狄論』序、瀧本誠一編前掲書、八六三頁。
- (184) 同右、八六六頁。